

1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報 いりふね

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅶ—

1996年3月

北海道余市町教育委員会

例　　言

1. 本書は余市川改修事業に伴い実施した入舟遺跡の第1次発掘調査(1995年度)の概報である。調査原因者である北海道小樽土木現業所の委託を受け、余市町教育委員会が調査主体となり実施した。

2. 今年度の発掘調査面積は、約2,213m²であり、発掘調査・遺物整理等の日程は、以下のとおりである。

4月1日～5月15日 遺物整理・発掘調査準備作業（遺物実測・図面整理・矢板打ち・杭打ち等）

5月16日～11月7日 発掘調査作業（包含層掘り・遺構掘り・実測図作成・写真撮影他）

11月8日～3月31日 整理作業（水洗・注記・分類・保存処理・復原・遺物実測・概報作成等）

3. 事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教育長 笹山義孝 調査指導員 岡田淳子（北海道東海大学）

事務局 教育次長 三浦清治 国際文化学部長・教授

水産博物館々長 佐々木功治 調査担当者 宮宏明（日本考古学協会員）

文化財係長 盛昭史 調査員 丹下昌之（名古屋大学大学院生）

調査補助員 小川康和（北海道考古学会々員）

調査実習生 青野友哉（明治大学文学部学生）・巒田克史（北海道大学文学部学生）

作業員 荒岡民雄・荒川龜雄・阿部栄子・泉原良子・岩崎靖子・猪口啓子・扇谷陽子

大村賢之・奥寺祐二・奥谷誠一・及川京子・岡西美喜子・岡崎すみ子・片岡常夫

川又智恵子・門野利朗・北川千登世・工藤忠幸・久保照代・櫛引葉子・小林和夫

小林光男・小林留美・佐藤主計・斎藤麻紀・佐々木美代・佐藤洋子・茂野憲一

菅原宏文・高島武夫・武田龍・高橋志津子・東門山ルミ子・東門田邦子

富永順子・富岡きみ・浪岡達也・中岡直幸・中井美幸・浜川ひとみ・畠山香代子

橋本広子・平野政秋・古田千穂・藤田智子・堀野香織・松下教介・前田貞子

山崎直子・横山由紀子・米谷登志子

4. 検出された遺構等については、便宜上、下記のように略称を用いて示した。

G P 墓塚 U P 性格不明のピット H S 縄文時代の石組炉

F P 地床炉とみられる焼土跡 S M 貝塚

5. 本書の執筆は、6の各位並びに調査指導員・調査員・調査補助員他がそれぞれ分担し、編集は宮宏明が、監修は岡田淳子が行った。

6. 遺跡・遺物の分析・鑑定・年代測定・保存処理ならびに原稿執筆等については、下記の方々に、また、下記の各位より御指導・御助力を賜わった。記して感謝申し上げる次第である。

近世ガラス玉の分析 赤沼英男・咲山まだか（岩手県立博物館）

炭化物の放射性炭素年代測定 木越邦彦（学习院大学理学部名誉教授）

動物遺存体の同定・分類 西本豊弘（国立歴史民俗博物館考古研究部）

植物遺体の同定 矢野牧夫（元北海道開拓記念館学芸部長）

木製品の保存処理 田口尚（北海道埋蔵文化財センター資料調査課）

| | | |
|---|-------------------------------|-----------------------|
| 碧玉の产地同定 | 藻科哲男 | (京都大学原子炉実験所) |
| 和鏡の鑑定と原稿 | 青木 豊 | (国学院大学文学部) |
| 金属製遺物の材質分析 | 小笠原正明・前川靖明 | (北海道大学高等教育機能開発総合センター) |
| UP-5出土柱の樹種同定 | 大谷 謙 | (北海道大学農学部森林科学科) |
| 中世陶磁器の鑑定・分類 | 吉岡康暢 | (国立歴史民俗博物館考古研究部) |
| 魚形石器の原稿 | 高瀬克範 | (北海道大学文学部学生) |
| 土器の鑑定・分類 | 大沼忠春 | (北海道教育庁生涯学習部文化課) |
| 墨書・刻書土器の鑑定と解説 | 平川 南 | (国立歴史民俗博物館歴史研究部) |
| 黒色土器の鑑定・指導 | 巽 淳一郎(奈良国立文化財研究所飛鳥・藤原宮跡遺構調査室) | |
| 大井晴男・井上勝夫・菊池俊彦・林 謙作・南部 昇・天野哲也・小野裕子・沖野慎二(北海道大学) | | |
| 藤村久和(北海学園大学)・山我哲雄(北星学園大学)・佐藤栄一(北海道東海大学)・小口雅史(弘前大学) | | |
| 藤本 強・宇田川 洋・大貫静夫・新美倫子(東京大学)・酒寄雅志・戸田正勝(国学院大学栃木短期大学) | | |
| 菊池徹夫・李 成市(早稲田大学)・渡辺 誠(名古屋大学)・工藤雅樹(福島大学)・石川日出志(明治大学) | | |
| 鈴木靖民・山本哲也(国学院大学)・佐藤洋一郎(静岡大学)・桜井清彦(昭和女子大学)・野崎欽吾(日本大学) | | |
| 阿部朝衛(帝京大学)・田村晃一(青山学院大学)・麻生 優(千葉大学)・前田 潮・福田正宏(筑波大学) | | |
| 山浦 清(立教大学)・齊藤 忠(大正大学名誉教授)・伊藤玄三(法政大学)・王 福浪(遠東文化研究所長) | | |
| 任 孝宰(ソウル大学)・岡村道雄・井上和人・西田健彦・原田昌幸(文化庁)・阿部義平(国立歴史民俗博物館) | | |
| 山崎信二・毛利光俊彦・玉田芳英・立木 修(奈良国立文化財研究所)・米田雄介・木村法光(宮内庁正倉院事務所) | | |
| 井上洋一(東京国立博物館)・野村 崇・平川善祥・小林幸雄・出利葉浩司・手塚 薫(北海道開拓記念館) | | |
| 種市幸生・千葉英一・才田雅彦(北海道教育庁)・古原敏弘・大谷洋一(北海道立アイヌ民族文化研究センター) | | |
| 中村和之(札幌稻穀高等学校)・畠 宏明・谷島由貴・中山昭大・藤原秀樹・藤本昌子(北海道埋蔵文化財センター) | | |
| 北林八洲崎・鈴木克彦・小田川哲彦・木村 高(青森県埋蔵文化財調査センター)・福田友之(青森県立郷土館) | | |
| 富権泰時・桜田 隆・高橋 学・五十嵐一治(秋田県埋蔵文化財センター)・船木義勝(秋田県立博物館) | | |
| 佐々木洋治・佐藤庄一・安部 実(山形県埋蔵文化財センター)・高橋與右衛門(岩手県埋蔵文化財センター) | | |
| 津野 仁(栃木県埋蔵文化財センター)・安孫子昭二(東京都埋蔵文化財センター)・津金沢吉蔵(群馬県教育委員会) | | |
| 藤沼邦彦(多賀城跡調査研究所)・小鳴芳孝(石川県立埋蔵文化財センター)・大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館) | | |
| 加藤邦雄・秋山洋司(札幌市埋蔵文化財センター)・松田 猛(釧路市立埋蔵文化財調査センター) | | |
| 佐藤智雄・五十嵐貴久(函館市教育委員会)・大島直行(伊達市教育委員会)・杉浦重信(富良野市立郷土館) | | |
| 明石博志・北沢 実(帯広百年記念館)・河野本道・青柳信克(旭川市博物館)・和田英昭(網走市立郷土博物館) | | |
| 佐藤一夫・工藤 肇・渡辺俊一・二階堂哲也・鈴木耕栄・大泉博嗣(苫小牧市埋蔵文化財調査センター) | | |
| 石神 敏(小樽市博物館)・石川直章(小樽市教育委員会)・直井孝一・野中一宏(江別市郷土資料館) | | |
| 園部真幸(セラミックアートセンター)・大谷敏三・田村俊之・豊田宏良(千歳市埋蔵文化財センター) | | |
| 佐藤和利(紋別市立郷土博物館)・氏江敏文(市立名寄図書館)・長谷山隆博(芦別市星の降る里記念館) | | |
| 中尾健照(熊本県立裝飾古墳館)・遠藤正夫(青森市教育委員会)・宇部則保・大野 亨(八戸市教育委員会) | | |
| 神原雄一郎(盛岡市教育委員会)・稻野裕介・杉本 良(北上市埋蔵文化財センター)・本堂寿一(北上市立博物館) | | |
| 根本豊徳(二本松市教育委員会)・秋本信夫(鹿角市教育委員会)・間壁忠彦・間壁茂子(倉敷考古館) | | |
| 杉浦裕二(豊田市郷土資料館)・藤沢良祐・金子健一(瀬戸市埋蔵文化財センター)・前沢和之(横浜市歴史博物館) | | |
| 佐藤 稔(長万部町教育委員会)・勝部 衛・片岡詩子(玉湯町立出雲玉作資料館)・梯原滋高(市浦村教育委員会) | | |
| 桐生正一・井上雅孝(滝沢村教育委員会)・武出 修・渡部高士(常呂町教育委員会)・山宮克彦(中標津町郷土館) | | |
| 松崎水穂・佐藤一志(上ノ国町教育委員会)・村田良介・合地信生・松田 功・萩野幸男(斜里町立知床博物館) | | |
| 計良勝範(佐渡博物館)・北野信彦(元興寺文化財研究所)・金沢 陽(出光美術館)・星 梓(北青山遺跡調査会) | | |
| 金刺伸吾(日本どうめんこの会々長)・松永重昭(全日本弓道具協会々長)・佐藤矩康(日本美術刀剣保存協会評議員) | | |
| 吉野孝雄(アトリエ43)・佐藤利雄・青木延広(北海道文化財保護協会理事)・中村五郎(福島県文化財審議委員) | | |
| 大竹憲治・千代 肇・大槻 巍・林 茂樹・土谷昭重・仲田茂司・平井尚志・門 國男・横山英介(日本考古学协会会员) | | |
| 福岡イト子・落合治彦(北海道考古学会々員)・竹田輝雄・大島秀俊・谷岡康孝・小柳リラコ(北海道文化財保護協会) | | |

本文目次

| | |
|--------------------------|----|
| I 発掘調査の概要 | |
| a 今年度の発掘調査区域と調査方法 | 1 |
| b 検出遺構と出土遺物 | 4 |
| II 諸分析の概要 | |
| a 入舟遺跡 UP-5 出土柱の樹種同定 | 14 |
| b 入舟遺跡出土金属製品の E D A X 測定 | 16 |
| c 入舟遺跡出土ガラス玉の蛍光X線分析 | 18 |
| d 入舟遺跡出土管玉の産地分析 | 22 |
| III 主要遺物の概要 | |
| a 入舟遺跡・大川遺跡出土和銅 | 30 |
| b 入舟遺跡・大川遺跡出土の魚形石器 | 39 |
| c 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版 | 53 |
| d 入舟遺跡出土の植物遺体について | 60 |
| e 入舟遺跡出土の木製品について | 62 |
| f 入舟遺跡・大川遺跡出土の泥メンコと鋳型 | 66 |
| VI 結語 | |
| a 小括 | 70 |
| b あとがき | 72 |

図目次

| | |
|------------------------------|----|
| 図1 入舟遺跡と大川遺跡の発掘調査区域 | 2 |
| 図2 入舟遺跡Grid配置図・遺構配置図・標準層序 | 3 |
| 図3 入舟遺跡出土の金属製品 | 16 |
| 図4 入舟遺跡出土金属製品の E D A X スペクトル | 17 |
| 図5 微小試料の定性分析法 | 18 |
| 図6 蛍光X線分析法による資料No.5の定性分析チャート | 20 |
| 図7 蛍光X線分析法による資料No.6の定性分析チャート | 20 |
| 図8 入舟遺跡出土の碧玉製管玉 | 22 |
| 図9 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル | 23 |
| 図10 碧玉及び碧玉様緑色石の原産地 | 23 |
| 図11 碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル | 28 |
| 図12 碧玉原石のE S Rスペクトル | 28 |
| 図13 碧玉原石の信号ⅢのE S Rスペクトル | 28 |
| 図14 碧玉製管玉の信号ⅢのE S Rスペクトル | 28 |
| 図15 入舟遺跡出土の和銅 | 31 |
| 図16 大川遺跡出土の和銅 | 34 |
| 図17 入舟遺跡出土の魚形石器 | 40 |
| 図18 大川遺跡出土の魚形石器 | 42 |
| 図19 大川遺跡出土の魚形石器 | 43 |
| 図20 噴火湾沿岸出土の魚形石器 | 49 |
| 図21 渡島半島日本海岸・道央部出土の魚形石器 | 51 |
| 図22 入舟遺跡出土の手形付土版・足形付土版 | 53 |
| 図23 全国出土主要手形付土版・足形付土版 | 56 |
| 図24 入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型 | 66 |
| 図25 大川遺跡出土の泥メンコ | 67 |
| 図26 入舟遺跡出土の石皿 | 71 |

写真目次

| | | |
|--------|------------------------|----|
| 表紙 | 入舟遺跡出土のガラス玉 | |
| 写真1 | 入舟遺跡遠景・作業風景・遺構 | 5 |
| 写真2 | 入舟遺跡検出の土壤及び矢来等 | 6 |
| 写真3 | 入舟遺跡検出の貝塚と出土遺物 | 7 |
| 写真4 | 入舟遺跡貝塚出土の遺物 | 8 |
| 写真5 | 入舟遺跡貝塚検出状況 | 9 |
| 写真6 | 入舟遺跡検出の礎石 | 10 |
| 写真7 | 入舟遺跡石組・石組ゆき等検出状況 | 11 |
| 写真8 | 入舟遺跡出土の各種遺物 | 12 |
| 写真9-1 | 入舟遺跡UP-5検出状況 | 14 |
| 写真9-2 | 入舟遺跡UP-5柱出土状況 | 14 |
| 写真10-1 | 入舟遺跡UP-5出土柱の光学顕微鏡写真 | 14 |
| 写真10-2 | 入舟遺跡UP-5出土柱の光学顕微鏡写真 | 14 |
| 写真10-3 | 入舟遺跡UP-5出土柱の光学顕微鏡写真 | 14 |
| 写真10-4 | 入舟遺跡UP-5出土柱の走査電子顕微鏡写真 | 15 |
| 写真11 | 入舟遺跡 金属製品出土状況 | 17 |
| 写真12 | 入舟遺跡出土の金属製品 | 17 |
| 写真13 | 入舟遺跡近世ガラス玉出土状況 | 18 |
| 写真14 | 入舟遺跡出土の近世ガラス玉 | 18 |
| 写真15 | 入舟遺跡と大川遺跡出土の碧玉製管玉 | 22 |
| 写真16 | 入舟遺跡和銅出土状況 | 31 |
| 写真17 | 入舟遺跡出土の和銅 | 35 |
| 写真18 | 大川遺跡出土の和銅 | 35 |
| 写真19 | 法隆寺西円堂内陣の和銅 | 36 |
| 写真20 | シトキ | 36 |
| 写真21 | 磐田八幡神輿 | 36 |
| 写真22 | 神輿の団 | 36 |
| 写真23 | 入舟遺跡出土の魚形石器 | 44 |
| 写真24 | 大川遺跡出土の魚形石器 | 45 |
| 写真25 | 入舟遺跡と大川遺跡の魚形石器出土状況 | 46 |
| 写真26 | 大川遺跡GP-179-1括出土遺物と魚形石器 | 47 |
| 写真27 | 大川遺跡GP-359-1括出土遺物と魚形石器 | 47 |
| 写真28 | 大川遺跡墓域伴出魚形石器接写 | 48 |
| 写真29 | 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版 | 54 |
| 写真30 | 青森県出土の手形付土版と足形付土版 | 57 |
| 写真31 | 入舟遺跡検出の地下式遺構と植物遺体 | 61 |
| 写真32 | 入舟遺跡の木製品と漆器等出土状況 | 63 |
| 写真33 | 入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型 | 68 |
| 写真34 | 大川遺跡出土の泥メンコ | 69 |
| 写真35 | 手形付土版 | 70 |
| 写真36 | ベンガラ付骨の石皿 | 70 |
| 写真37 | 文化庁主催「新発見考古速報展'96」貸出資料 | 73 |

I 発掘調査の概要

a 今年度の発掘調査区域と調査方法

1995年度の調査区域は、余市川河口部左岸つまり昨年度まで調査を行っていた大川遺跡の対岸(図1)に位置する。ラインは発掘区の長軸を任意に設定し、発掘区全域に一辺5mのグリッドを設定した。グリッド表示は北東から南西へ19~37の算用数字、北西から南東へR~Zのアルファベットを用い、南隅のグリッドライン交点(図2)で表した。

遺構及び遺構に伴う遺物については、状況に応じて縮尺1/10・1/20・1/50等の図面に出土位置・レベル・種別等を記録して取り上げた。包含層出土の遺物は、盛土や攪乱部分についてはグリッドごとに括して取り上げ、I・II・III層出土の主要遺物については適宜、縮尺1/20で図面化して取り上げた。

フローテーション法により今年度処理したのは、HS-1(石組炉)とFP-1(地床炉)の2ヶ所、墓壙・土壙・貝塚・便所跡とみられる地下式遺構や包含層の種子集中箇所等の土壤については適宜、1mmメッシュを用いての土壤水洗を行い、玉・土器片・剝片・貝片・骨片等の微細遺物を採取した。これらについては室内にて、A選別(種別ごとの分類)とB選別(動物遺体の分類・同定)を実施した。

鉄製品については、土砂・鏽等を落として脱塩中である。木製品(Ⅲe参照)については、水洗し土砂等を落とした後、脱気フィルムパックを行い、凍結防止のためサーモスタット付きのオイルヒーターにて温度管理を実施している。コハクについては、超音波洗浄器を使用した水洗を行い、バラロイドB72とナフサの溶液を数回塗布して乾燥させた。層・砂層の色調確認は日本色彩研究所刊の『新版 標準土色帖』を使用した。写真撮影は遺構・遺物・遺跡遠景・調査風景等をモノクロームフィルム及びカラーフィルムで適宜実施した。主要な遺構については遺物出土状況・遺構検出状況等については必要に応じて撮影した。

今年度の発掘調査は5月16日に開始し、11月7日に終了した。今年度の発掘区域は大川橋橋脚脇から運上家方面へと続く町道の真下ということもあって、道路の基礎部分や盛土層が予想以上に深いえ固く、表土剥ぎにかなりの時間が割かれる結果となった。特に発掘区の西側の大川橋橋脚周辺は深く、調査期間内の完掘は成し得ず、発掘到達面にビニールシートをかけ、埋め戻しを行った。入舟遺跡の第2次調査の際に続行する予定である。また、発掘区の北側が崖になっているうえ南側が余市川のため、廃土場所は発掘区の北東側に求める以外になく、土砂の運搬作業も困難を極めた。

今年度の総発掘面積は2,213m²余りに達し、次回の調査は今年度発掘区域の北東側、つまり海側部分を主体に発掘調査する予定である。(小川)

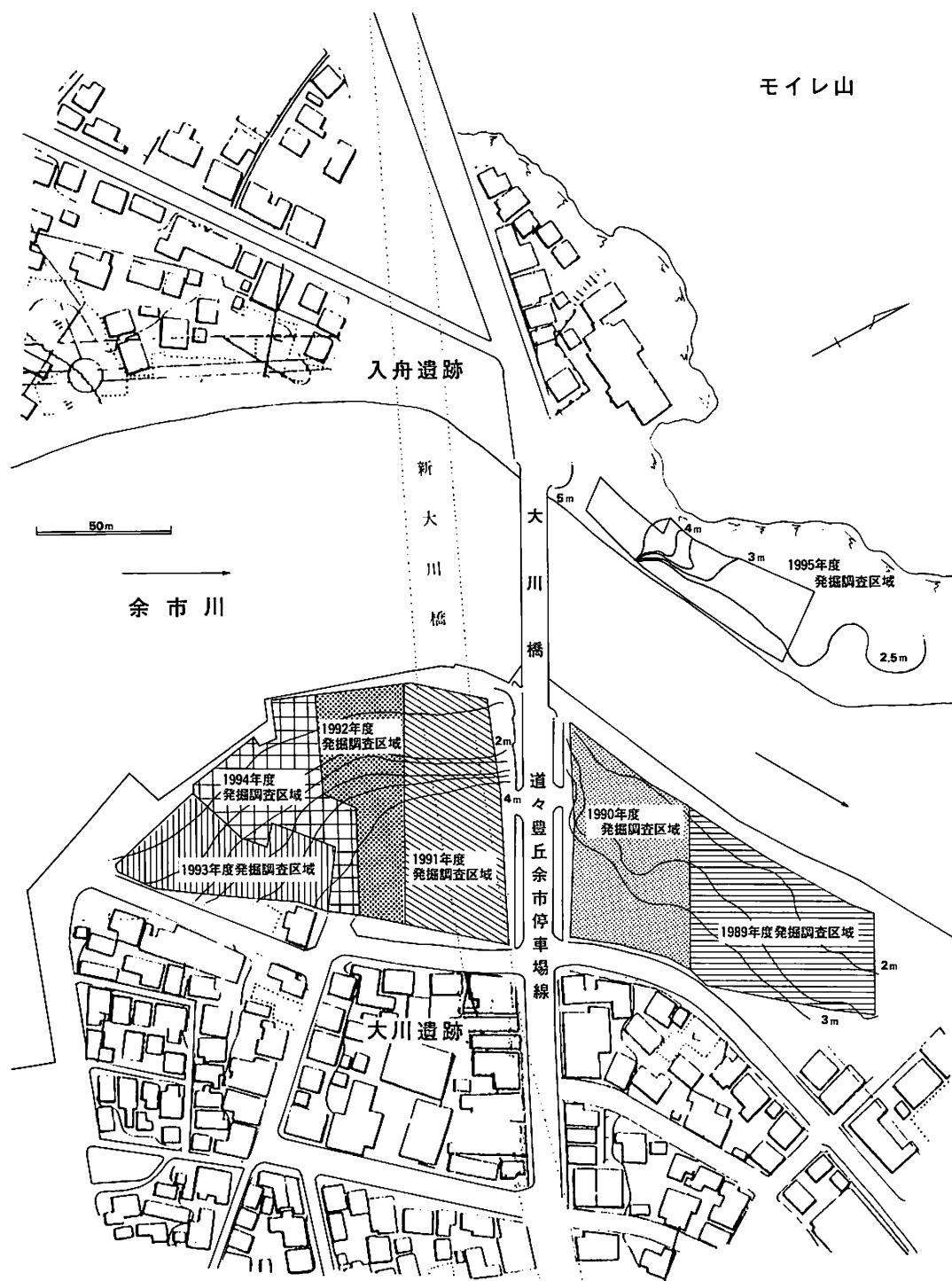


図1 入舟遺跡(1995年度)と大川遺跡(1989年度～1994年度)の発掘調査区域

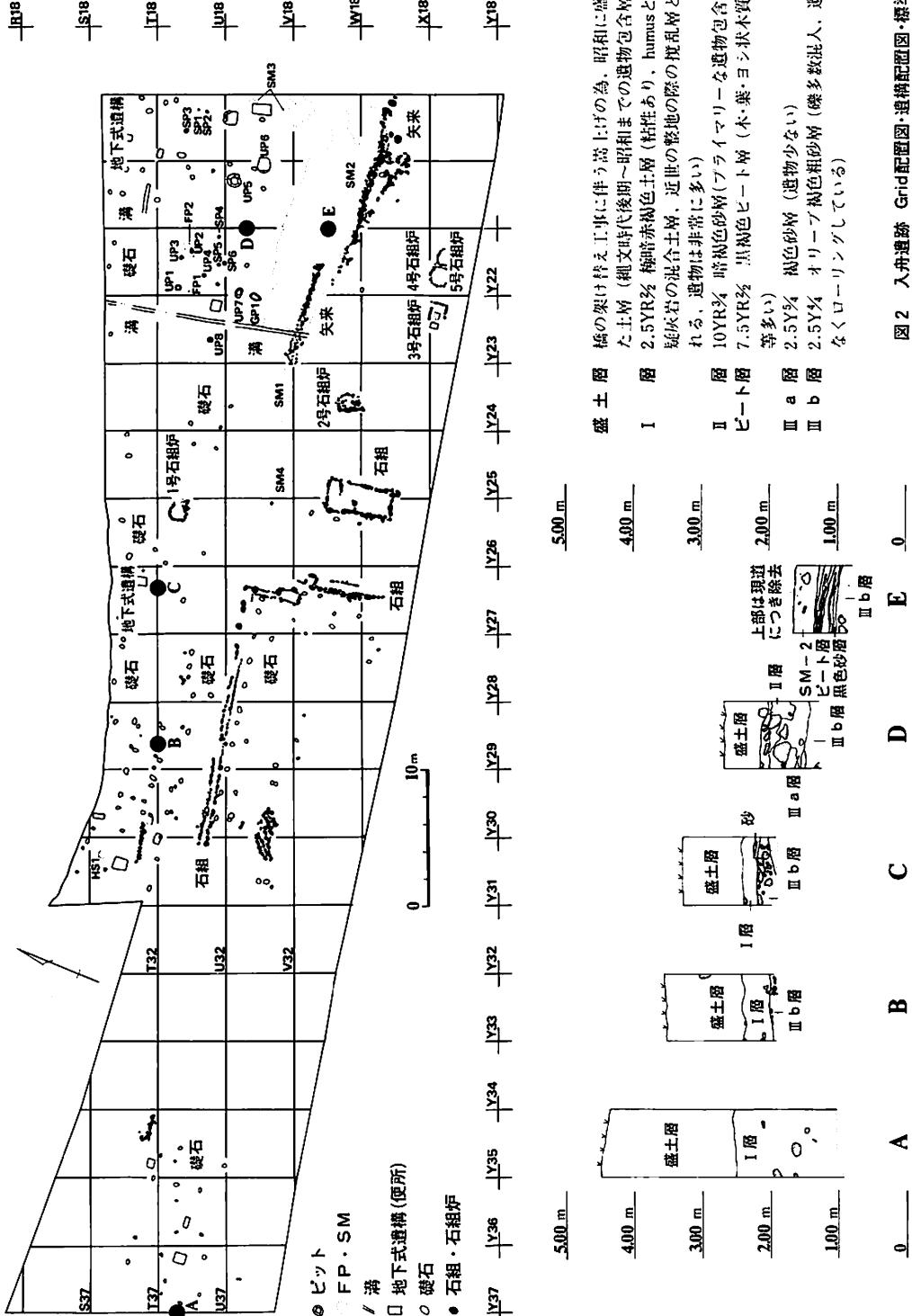


図2 入舟遺跡 Grid配置図・遺構配置図・標準層序

b 検出遺構と出土遺物

1995年度における入舟遺跡の発掘調査によって検出された遺構は図2及び表1のとおりである。GP-1は中世、HS-1は縄文後期とみられるが、検討中である。FP、UPについては各時期のものがある。SMと矢来は近世後半のものである。

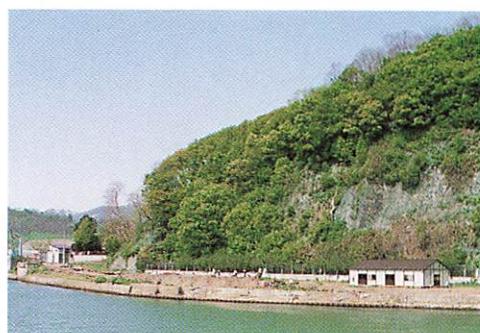
縄文後期の出土土器は、円筒上層b（サイベ沢V）、北筒（トコロ6類）、余市、手稻砂山、入江、ニセコ、手稻、鮑澗等である。縄文晩期の土器は大洞BC・C₁・C₂・A・A'相当の土器及び桃内、ヌサマイ。続縄文期の土器としては、港大照寺、軽川、恵山（南川Ⅲ・Ⅳ）、後北（江別太、後北A・B・C₁・C₂・D）、モヨロ、北大I・II等がある。弥生系の土器として、砂沢、天王山、赤穴等がある。擦文期のものとしては、十勝茂寄、須恵器、土師器、擦文（刻文）が出土している。出土土器総数5万4千点のうち多数を占めるのが縄文後期の土器である。縄文後期の土器の多くは北筒・ニセコと余市で、これらで80%以上を占める。擦文期の土器は、8世紀から9世紀前後のものがほとんどであると考えられる。土製品としては、手形付土版、足形付土版、土偶、有孔土製円板、土製円板、土錐、泥メンコ、泥人形、手焙り、七厘等がある。石器としては、石鎌、石槍、石錐、搔器、削器、ナイフ、石匙、靴形石器、石斧、石鑿、砥石、矢柄研磨器、石鋸、敲石、凹石、石皿、魚形石器（Ⅲb参照）等がある。石製品としては、玉（コハク平玉・石炭平玉・碧玉管玉）、硯、石盤、石墨、泥メンコ鋳型（Ⅲf参照）等がある。骨角器・骨角製品としては、回転式離頭鉛先、中柄、鯉口、ブラシの柄、箒等がある。金属器・金属製品としては、山刀・マキリ・鍔、袋状鉄斧、矢筒の飾り金具（イカヨブのトンビ）、鎌、船釘、釣針、鉄鍋、おろし金、キセル、鏡（Ⅲa参照）、灰搔き、指貫、古銭、ニンカリ、笄、燭台、銃弾、薬莢、鉄砲の火挾等である。木製品（Ⅲe参照）としては漆器椀（Ⅲe参照）、火鑓り臼、樽の蓋・栓、ガラス製品としては各種玩具、瓶、玉等が出土している。出土陶磁器のうち80%前後が近代、約20%前後が近世（ほとんどが19c）、1%程度が中世のものである。この他に多数の動物遺体や植物遺体があるが、現在整理中である。

(宮)

| 遺物名 | 遺構名 | 層位 | GP 1 | HS 1 | UP 1~8 | SP 1~2 | FP 1・2 | 矢来 | SM-1 | SM-2 ※ | SM-3 | SM-4 | 盛上層 | I 層 | II 層 | III 層 | 合計 |
|---------|-----|----|---------|---------|-----------|-----------|-----------|-----|--------|-----------|------|-------|--------|--------|---------|----------|--------|
| 土 器 | | | | | 13 | 2 | 2 | 1 | | 610 | 1 | | 1,379 | 49,091 | 2,887 | 137 | 54,123 |
| 土 製 品 | | | | | | | | | | 3 | | | 10 | 296 | 4 | 1 | 314 |
| 石 器 | | | | | | | | 1 | | 43 | 1 | | 82 | 2,850 | 147 | 21 | 3,145 |
| 石 製 品 | 玉 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 2 |
| | 他 | | | | | | | | | 2 | | | | 43 | 2 | | 47 |
| 骨 角 器 | | | | | | | | 1 | | 18 | 1 | | | 4 | 4 | | 28 |
| 金屬製品 | 古銭 | | | | 1 | | | 1 | | 13 | 1 | | 21 | 318 | 17 | | 372 |
| | 他 | 1 | | 2 | | | | 9 | 6 | 864 | 13 | 10 | 14 | 309 | 112 | | 1,340 |
| 木 製 品 | | | | | | | | | | 2 | 1 | | | 4 | 155 | | 162 |
| 陶 磁 器 | | | | 4 | | | | 68 | 11 | 1,007 | 5 | 3 | 471 | 6,245 | 1,017 | | 8,831 |
| 剝 片 | | | | | | | | | | 603 | | | 66 | 3,592 | 149 | 15 | 4,425 |
| 礫 | | 1 | | | | | | | | 4 | | | 1 | 57 | 7 | | 70 |
| 動物遺体 | 骨 | | | | | | | 6 | 15 | 1,019 | 11 | 7 | 9 | 79 | 44 | | 1,190 |
| | 貝 | | | | | | | 1 | 259 | 9,090 | 2 | 654 | 28 | 187 | 22 | | 10,243 |
| 植 物 遺 体 | | | | | | | | 2 | | | | | | 2 | | | 4 |
| そ の 他 | | | 1 | | | 2 | | 1 | 129 | | | | 1 | 117 | 145 | | 396 |
| 合 計 | | 1 | 1 | 21 | 2 | 2 | 92 | 292 | 13,409 | 36 | 674 | 2,082 | 63,194 | 4,712 | 174 | 84,692 | |

表1 1995年度入舟遺跡出土遺物一覧（1996年2月13日現在）

* 魚骨39.460kg出土



1) 入舟遺跡遠景（対岸の大川遺跡より撮影）



2) 入舟遺跡遠景（バックはモイレ山）



3) 入舟遺跡発掘作業風景（1995年5月）



4) 入舟遺跡発掘作業風景



5) 石組炉検出状況（HS-1, 縄文時代か？）



6) HS-1石組炉内焼土・炭化物除去状況



7) 土壌検出状況（UP-1, 時期不明）



8) 焼土検出状況（FP-1, 時期不明）

写真1 入舟遺跡遠景・作業風景・遺構



◀ 1) 土壌検出状況
(手前のピットがUP-5、
奥のピットがUP-6、
UP-5の壌底部から
は柱が残存、UP-5・6
とも近世)



2) 土壌検出状況 (UP-6, 近世)



◀ 3) 掘っ建て柱
出土状況
(U37Grid I層出土、
同一方向に傾いてい
る)



6) 矢来検出状況 (西側より撮影)



◀ 4) 矢来検出状況
(東側より撮影、
18c~19c、石材はモ
イレ山のものとみら
れる)



7) 矢来検出状況 (東側より撮影)



◀ 5) 矢来検出状況
(東側より撮影、
左上は木製品
発掘状況)



8) 矢来検出状況 (東側より撮影)

写真2 入舟遺跡検出の土壌及び矢来等

写真3 入舟遺跡検出の貝塚と出土遺物



1) SM-2 検出状況（東側より撮影、18c～19c）



2) SM-2 検出状況（西側より撮影）



3) SM-2 セクションベルト（貝層中には炭化物が非常に多い）



4) SM-2 セクションベルト（表面の貝は、多くはコタマガイ）



5) SM-2 西側遺物出土状況（左が鉤、右はイヌの下顎）



6) SM-2 遺物出土状況（中央は鉤）



7) SM-2 東側遺物出土状況（右上はマレク、左下は刀子）



8) SM-2 遺物出土状況（上は銅鎌、下はキテ）



9) SM-2 遺物出土状況（中央は銅鎌）



1) SM-2 東側遺物出土状況（右は刀子とイヌの下顎）



2) SM-2 西側遺物出土状況（18c～19c、中央は刀子）



3) SM-2 東側遺物出土状況（18c～19c、上は刀子）



4) SM-2 東側遺物出土状況（左は刀子、上は船釘）



5) SM-2 東側遺物出土状況（左はイヌの頭蓋、右は刀子）



6) SM-2 遺物出土状況（右上はキセル雁首、右下はイヌの頭蓋）



7) SM-2 西側遺物出土状況（左上がイヌの上顎、中と右が下顎）



8) SM-2 東側遺物出土状況（左はイヌの下顎、右上はキセルの雁首）



9) SM-2 遺物出土状況（左上はクマの下顎）



10) SM-2 東側遺物出土状況（左上は刀子、中央は中柄）

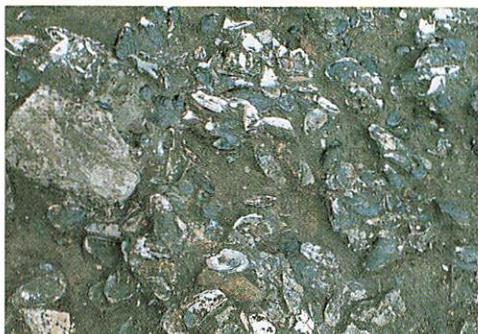
写真4 入舟遺跡貝塚出土の遺物



1) SM-2 西側貝出土状況 (18c ~ 19c, 中央は陶器)



5) SM-1 遺物出土状況 (コタマガイ・イガイが主体)



2) SM-2 西側貝出土状況 (主体はイガイ)



6) SM-1 遺物出土状況 (中央はクジラ, 左上は鎌)



3) SM-2 西側遺物出土状況 (中央部は鉄製品)



7) SM-4 遺物出土状況 (18c ~ 19c, 手前は骨)



4) SM-2 西側遺物出土状況 (右上は鉄製品と陶磁器)



8) SM-4 遺物出土状況 (主体はコタマガイ)

写真 5 入舟遺跡貝塚検出状況

写真6 入舟遺跡検出の礎石



▲1) U21Grid 硙石検出状況（近世～近代）



▲5) U21Grid 硙石検出状況（近世～近代）



▲2) T22Grid 硙石検出状況（東側より撮影）



▲6) T22Grid 硙石検出状況（1間間隔）



▲3) U28Grid
硫石検出状況
(半間ないし1間間
隔で置かれている)



▲7) T25Grid 硙石検出状況（1間間隔）



◀4) U21Grid・V21Grid
硫石検出状況
(奥の硫石のレベルが2.87m、
手前の硫石のレベルが2.57m、
その他4個の硫石のレベルは
2.20m～2.40m)



▲8) V20Grid・V21Grid 硙石検出状況



▲ 2) 石組検出状況 (V27Grid, 近代)

◀ 1) 石組検出状況 (T31Grid, 近代)

3) 石組検出状況 (U27Grid・V27Grid, 近代, ▶概ね10m × 2 m, W25・W26Gridの石組と並列)



◀ 4) 石組検出状況
(W25Grid・W26Grid,
近代の不明遺構)



7) 石組炉検出状況▶
(U26Grid, 概ね
2 m × 1.5m, 近代)



5) 石組検出状況 (上は焼けた粘土, 下は棒状の炭化材)



8) 石組炉内炭化状況 (U26Grid, 多量の炭化物出土)



6) 石組検出状況 (概ね 5 m × 2.5m)



9) 石組炉検出状況 (W24Grid, 概ね 2 m × 1.5m)

写真7 入舟遺跡石組・石組炉等検出状況



1) 異形石製品出土状況 (W24 Grid III層出土)



2) 挿り入り石斧▶
出土状況
(U37Grid I層
出土, 粘板岩)



3) 有孔石製品出土状況 (V36 Grid I層出土)



6) 後北式土器出土状況 (U22Grid III層出土)



4) 異形石器出土状況 (基部を欠く, 両挟りの有孔)



7) 朱塗り壺出土状況 (V30 Grid I層出土)



5) 石斧出土状況 (U26 Grid III層出土, 両端を使用)



8) 土偶出土状況 (U36Grid I層出土, 繩文晩期)



9) 動物遺存体出土状況 (U20 Grid II層出土)



10) 紅皿出土状況 (X22Grid II層出土)

写真 8 入舟遺跡出土の各種遺物

1995年度入舟遺跡出土古銭・硬貨一覧

[遺構出土]古銭

| 遺構名 | 古銭名 | 鋳造年 | 時代 | 枚数 | 備考 |
|---------|------|-----------|-------|----|---------------------|
| S M - 2 | 寛永通宝 | 1626~1869 | 江戸・明治 | 13 | 無背11、背久二(1774)1、背?1 |
| S M - 3 | 寛永通宝 | 1768 | 江戸 | 1 | 背21波 |
| U P - 6 | 寛永通宝 | 1626~1869 | 江戸・明治 | 1 | 無背 |
| 石矢来 | 寛永通宝 | 〃 | 〃 | 1 | 無背 |
| 計 | | | | 16 | |

[遺構外出土]古銭

| 古銭名 | 鋳造年 | 時代 | 盛土層 | I層 | II層 | 計 | 備考 |
|----------|-----------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 祥符元宝 | 1008~ | 北宋 | | | 1 | 1 | |
| 祥符通宝 | 1009~ | 〃 | | 1 | | 1 | |
| 皇宋通宝 | 1039~ | 〃 | | 1 | | 1 | |
| 嘉祐通宝 | 1056~ | 〃 | | | 1 | 1 | |
| 元祐通宝 | 1086~ | 〃 | | 1 | | 1 | |
| 寛永通宝(無背) | 1626~1869 | 江戸・明治 | 6 | 113 | 7 | 126 | |
| 〃(背波) | 1769~1869 | 〃 | 1 | 16 | | 17 | 4文銭 |
| 〃(背元) | 1741 | 江戸 | | 9 | 1 | 10 | 撰津 |
| 〃(背文) | 1668 | 〃 | | 5 | | 5 | 江戸 |
| 〃(背長) | 1767 | 〃 | | | 1 | 1 | 肥前 |
| 〃(背佐) | 1714~ | 〃 | | 1 | | 1 | 越後 |
| 〃(背足) | 1741 | 〃 | | 1 | | 1 | 下野 |
| 文久永宝 | 1863~ | 〃 | | 11 | | 11 | |
| 天保通宝 | 1835~1870 | 江戸・明治 | | 2 | | 2 | |
| 不明銭 | —— | —— | | 4 | 1 | 5 | |
| 計 | | | 7 | 165 | 12 | 184 | |

[遺構外出土]硬貨

| 硬貨名 | 鋳造期間 | 盛土層 | I層 | II層 | 計 | 備考 |
|----------|-----------|-----|-----|-----|-----|-------------|
| 旭日50銭銀貨 | 1906~1917 | | 1 | | 1 | |
| 旭日20銭銀貨 | 1906~1911 | | 1 | | 1 | |
| 竜10銭銀貨 | 1873~1906 | | 1 | | 1 | |
| 10銭白銅貨 | 1920~1932 | | 2 | | 2 | |
| 菊10銭アルミ貨 | 1940~1943 | | 2 | | 2 | |
| 菊5銭白銅貨 | 1889~1897 | | 8 | 1 | 9 | |
| 稻5銭白銅貨 | 1897~1905 | | 1 | | 1 | |
| 5銭ニッケル貨 | 1933~1937 | | 1 | | 1 | |
| 2銭銅貨 | 1873~1884 | | 11 | | 11 | |
| 竜1銭銅貨 | 1873~1888 | 2 | 47 | 1 | 50 | |
| 稻1銭青銅貨 | 1898~1915 | | 2 | | 2 | |
| 桐1銭青銅貨 | 1916~1938 | 6 | 24 | | 30 | |
| 富士1銭アルミ貨 | 1941~1943 | | 1 | | 1 | |
| 半銭銅貨 | 1873~1888 | 5 | 46 | 2 | 53 | |
| 5厘青銅貨 | 1916~1919 | | 2 | | 2 | |
| 旧10円青銅貨 | 1951~1958 | 1 | 2 | | 3 | |
| 1円黄銅貨 | 1948~1950 | | | 1 | 1 | |
| 1CENTAVO | ? | | 1 | | 1 | フィリピン(1960) |
| 計 | | 14 | 153 | 5 | 172 | |

c 入舟遺跡出土ガラス玉の蛍光X線分析

咲山まどか・赤沼英男（岩手県立博物館）

入舟遺跡から出土したガラス玉8点について、融剤によるガラスの分類と、着色剤の特定を目的として蛍光X線分析（XFA法）を行った。その結果を以下に報告する。

1 分析試料

分析した試料は近世のガラス玉8点である。試料の一覧を表2に、形状・外観を写真14に示す。

2 分析方法

蛍光X線分析法は近世にX線を照射し、含有される元素が発する2次的なX線（特性X線）を測定するものである。特徴は、非破壊で元素の定性が可能なところにあり、試料採取が困難な文化財の分析に適している。

試料はアルコールで超音波洗浄時、十分に乾燥させた。次に蛍光X線分析装置の30mm ϕ 試料マスク（重元素測定時は99.9%アルミニウム製、軽元素測定時は99.9%チタン製を使用）にポリプロピレンフィルムを張り、その上に試料をセットし、分析に供した。（図5）。なお、資料の変色を抑制するため、印加電圧・電流は40KV-30mAとした。

測定条件は以下のとおりである。

対陰極 : Cr

印加電圧・電流 : 40KV-30mA・35KV-25mA

分光結晶 : LiF·EDDT·TAP

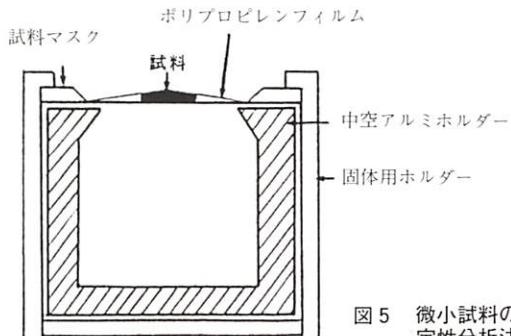


図5 微小試料の定性分析法



写真13 入舟遺跡近世ガラス玉出土状況

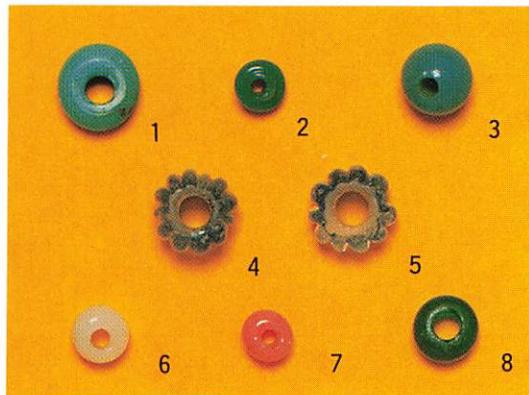


写真14 入舟遺跡出土の近世ガラス玉

表2 資料一覧

| 資料No. | 資料名 | 肉眼観察 | | | 写真番号 | 出土地 | 推定年代 |
|-------|--------------|-------|------|----|------|------|------|
| | | 色 | 形 | 状態 | | | |
| 1 | YLV21.II.8 | 桃色 | 丸(小) | 完形 | 7 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 2 | YLV21.II.30 | 白色 | 丸(小) | 完形 | 6 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 3 | YLV21.II.64 | 青色、透明 | みかん玉 | 完形 | 4 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 4 | YLV21.II.76 | 青色、透明 | みかん玉 | 完形 | 5 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 5 | YLV21.II.114 | 緑色 | 丸(中) | 完形 | 8 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 6 | YLV26.I.128 | 水色 | 丸(大) | 完形 | 1 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 7 | YLV36.I.497 | 青緑色 | 丸(小) | 完形 | 2 | 入舟遺跡 | 近世 |
| 8 | YIW20.II.26 | 青色 | 球(中) | 完形 | 3 | 入舟遺跡 | 近世 |

注) 資料名と推定年代は宮 宏明氏による。

表3 XFA法によるガラス玉の分析結果

| 資料No. | 資料名 | 主原料 | 融 剤 | | | | | 着色剤 | | | その他の | | |
|-------|--------------|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|----|------|----|----|
| | | | Pb | K | Na | Ca | Al | Fe | Cu | Sn | Ti | Zn | Sr |
| 1 | YLV21.II.8 | ++ | - | +++ | - | +++ | + | + | + | - | + | + | + |
| 2 | YLV21.II.30 | ++ | - | +++ | - | +++ | + | + | - | - | + | - | + |
| 3 | YLV21.II.64 | ++ | +++ | ++ | - | ++ | + | + | + | - | ++ | ++ | - |
| 4 | YLV21.II.76 | ++ | +++ | ++ | - | ++ | + | + | + | - | ++ | ++ | - |
| 5 | YLV21.II.114 | +++ | +++ | ++ | - | ++ | + | ++ | ++ | - | + | + | - |
| 6 | YLV26.I.128 | +++ | +++ | +++ | - | +++ | + | ++ | +++ | ++ | ++ | ++ | + |
| 7 | YLV36.I.497 | ++ | ++ | +++ | - | +++ | + | ++ | ++ | - | ++ | ++ | + |
| 8 | YIW20.II.26 | +++ | +++ | +++ | - | +++ | + | ++ | +++ | - | + | ++ | + |

注) X線強度100cps未満を「+」、100cps以上1000cps未満を「++」、1000cps以上:「+++」、「-」は検出されずを表す。

b 入舟遺跡出土金属製品のEDAX測定

前川 靖明・小笠原正明（北海道大学高等教育機能開発総合センター開発研究部）

実験試料

余市町入舟遺跡から出土した金属製品4点(YI.U36.12, YI.U36.13, YI.U36.14, YI.U36.15)

試料の作成

4点のうち, YI.U36.12についてのみ、一部表面をサンドペーパーで研磨した他は特別な処理などは行わなかった。

実験

4点全ての試料について測定を行った。試料を電導性の両面テープでサンプルホルダーに固定した後、EDAX測定を行った。YI.U36.12については、サンドペーパーで研磨した部分と研磨していない部分の2ヶ所の測定を行った。

測定条件

EDAX測定を行った全ての試料について、X線管電圧30KV、測定時間100secで測定を行った。

実験結果

EDAX測定の結果を図4に示す。図から判るように、測定した4点すべてが鉛以外の金属元素を含んでいなかった。

考察

EDAX測定は試料の表面しか測定できないため、試料内部の成分構成は判らない。また、測定時に酸化物として存在が考えられる元素を想定しなければならない。そのときに想定した以外の元素が全く含まれていないとも限らない。しかし、表面上の成分に鉛以外の金属元素が含まれていなかったことから、試料自体は極めて純度の高い鉛製品であると考えられる。

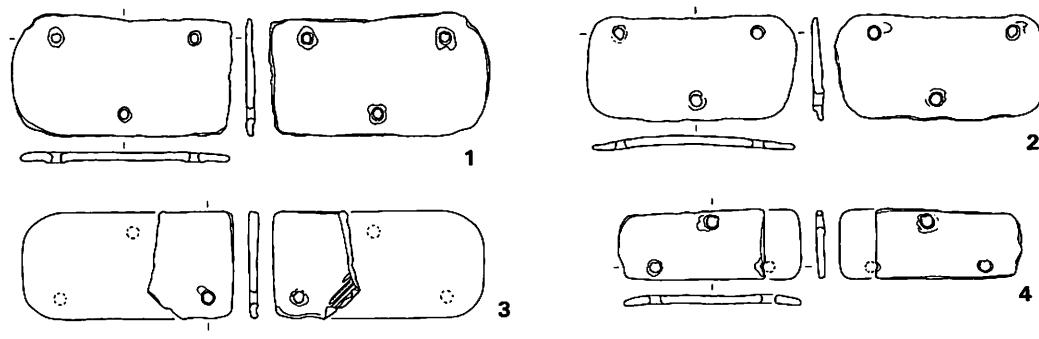


図3 入舟遺跡出土の金属製品

0 5cm

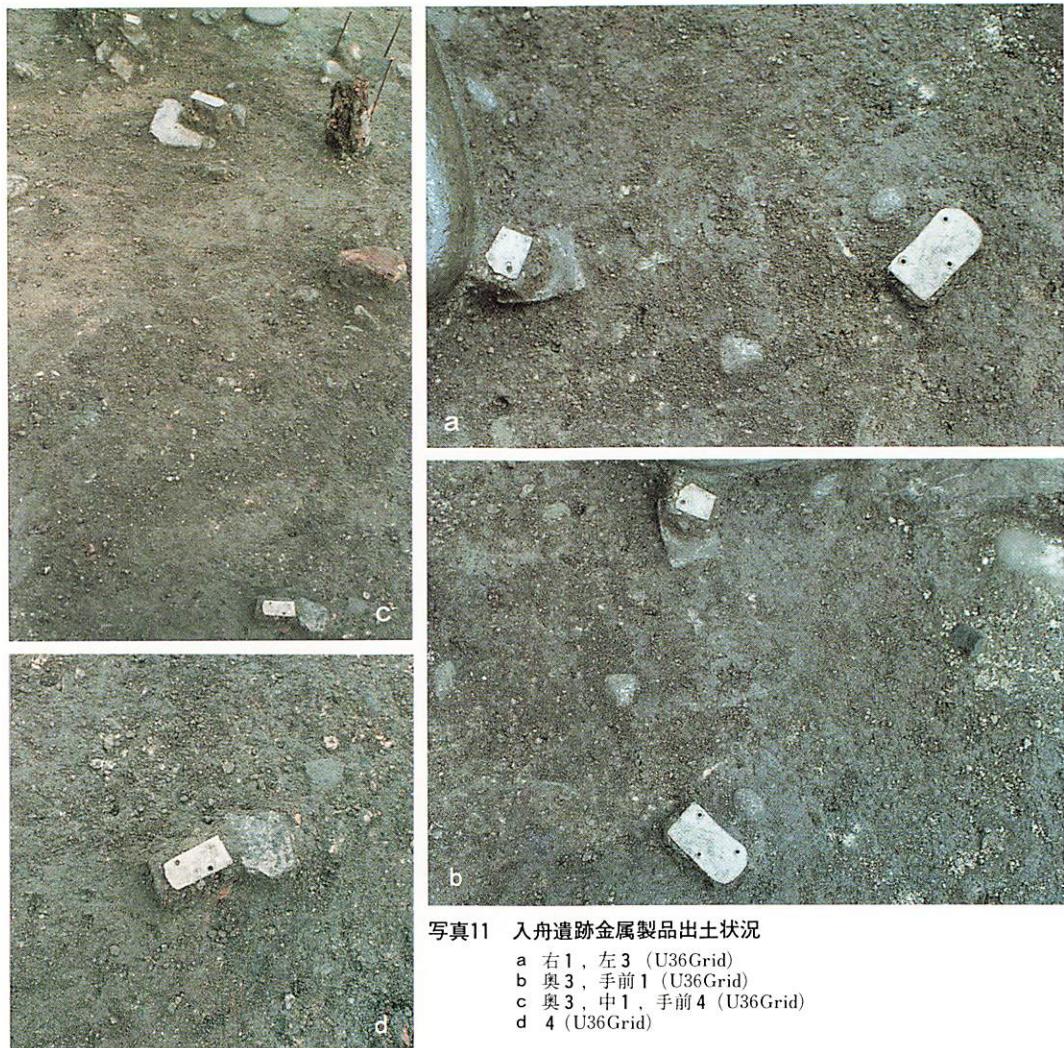


写真11 入舟遺跡金属製品出土状況

- a 右1, 左3 (U36Grid)
- b 奥3, 手前1 (U36Grid)
- c 奥3, 中1, 手前4 (U36Grid)
- d 4 (U36Grid)

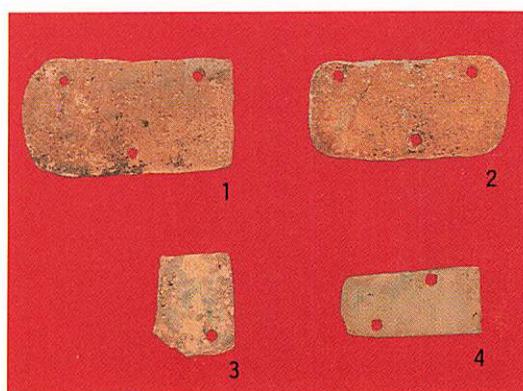
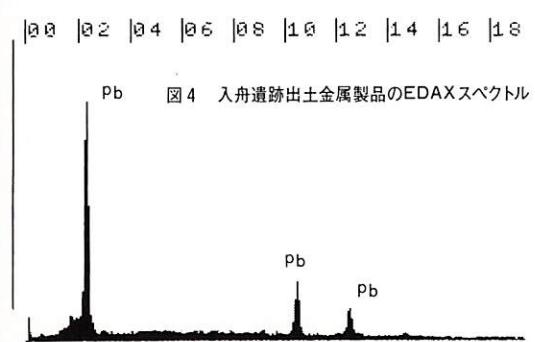


写真12 入舟遺跡出土の金属製品



II 諸分析の概要

a 入舟遺跡 UP-5 出土柱の樹種同定

大谷 謙（北海道大学農学部）

依頼出土試料から光学顕微鏡観察用の基本3断面の切片試料と走査電子顕微鏡観察用の試料を常法により作製した。これらの試料を用い、樹種識別の扱い所となる材の解剖学的特徴について光学・走査電子顕微鏡を用いて観察し、写真撮影を行った。

依頼出土材の解剖学的特徴は、次の通りである。



写真9-1 入舟遺跡UP-5検出状況



写真9-2 入舟遺跡UP-5柱出土状況

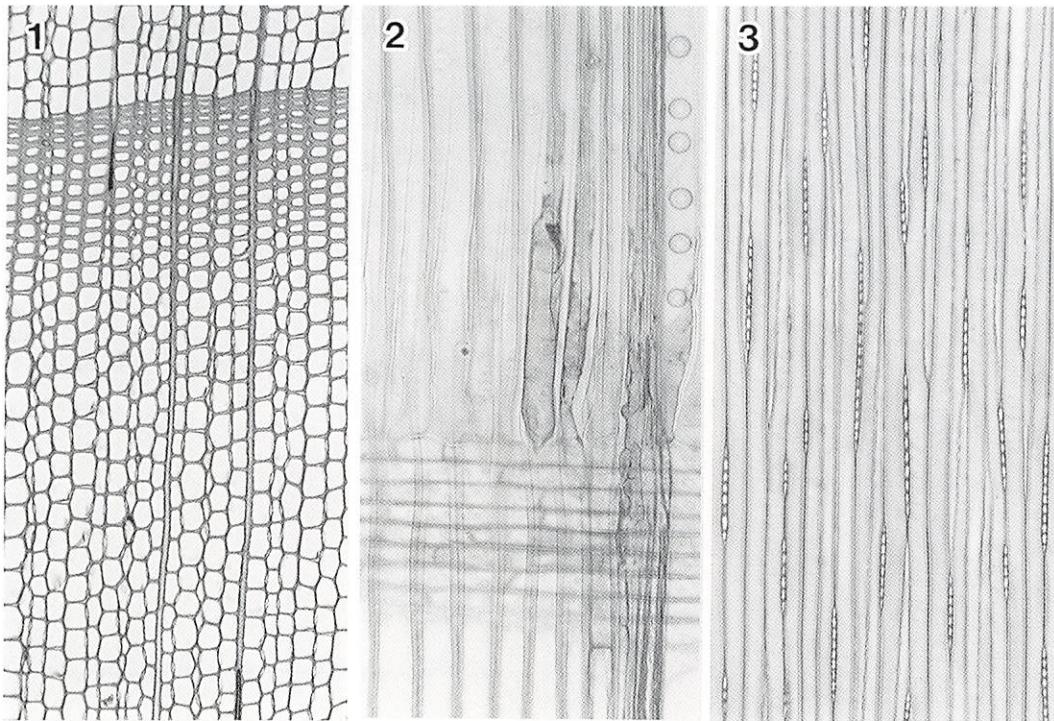


写真10 入舟遺跡UP-5出土柱の光学顕微鏡写真

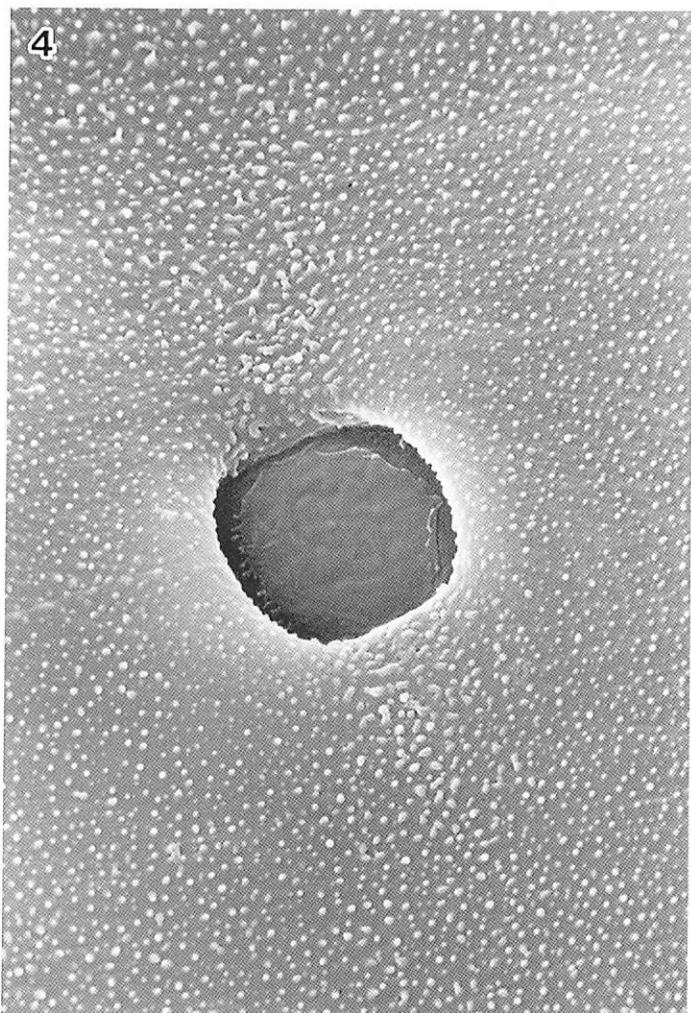


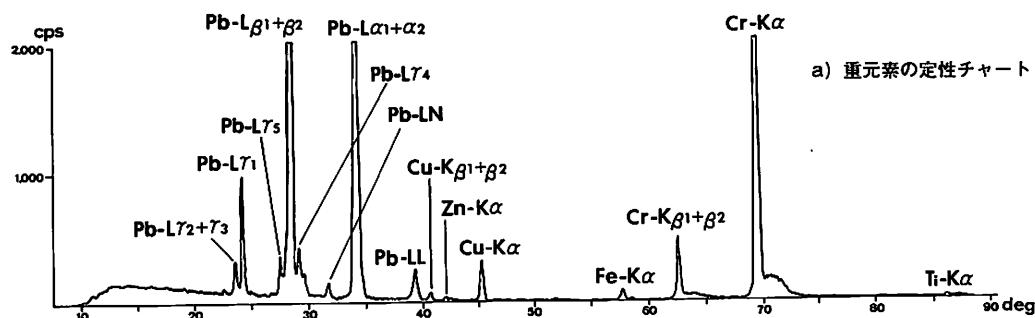
写真10-4 入舟遺跡UP-5出土柱の走査電子顕微鏡写真

顕微鏡写真の説明

- 写真10-1 光学顕微鏡写真。80倍。木口面。明瞭な年輪界、やや急な早材から晩材への移行、狭い晩材を示す。垂直樹脂道は存在しない。
- 写真10-2 光学顕微鏡写真。160倍。まさ目面。放射仮道管は存在しない。放射柔細胞壁は厚く、単壁孔が認められる。
- 写真10-3 光学顕微鏡写真。80倍。板目面。単列放射組織のみが存在し、水平樹脂道は存在しない。
- 写真10-4 走査電子顕微鏡写真。6000倍。まさ目面。内こう側からみた仮道管壁。スギ型分野壁孔を示す。仮道管にはらせん肥厚は存在しない。仮道管壁にはいぼ状構造が存在する。

年輪界は明瞭である。早材から晩材への移行はやや急である。晩材幅は狭い。構成要素は仮道管と放射柔細胞の2種類である。樹脂道・樹脂細胞・放射仮管は存在しない。仮道管にはらせん肥厚が認められない。放射組織は単列であり、30細胞高を越える場合がある。分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞壁は厚く、単壁孔対が明瞭に認められる。仮道管壁にはいぼ状突起がある。

以上の解剖学的特徴から、依頼試料はマツ科モミ属であると判断される。トドマツであると推定される。



a) 重元素の定性チャート

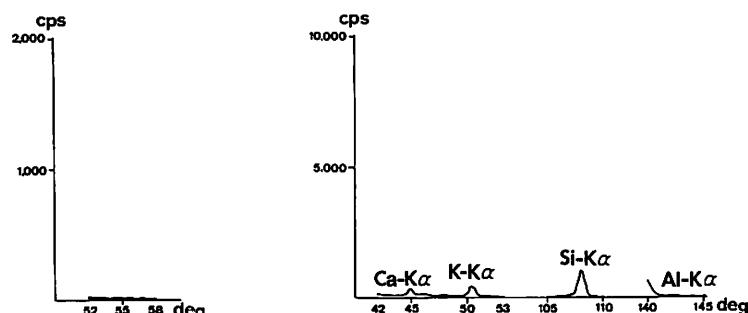
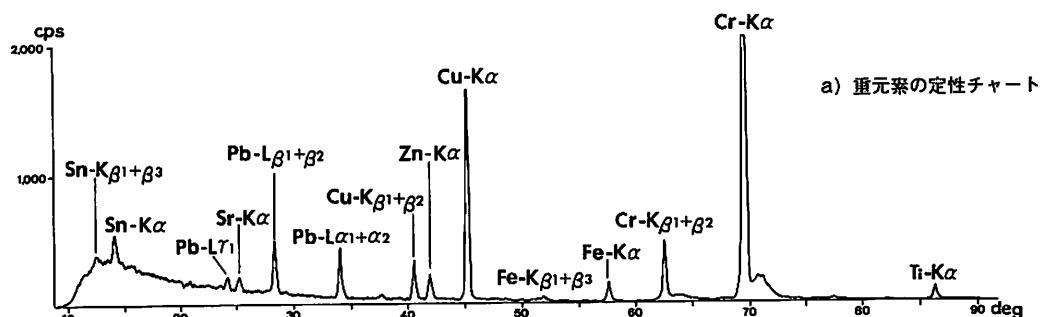


図6 蛍光X線分析法による
資料No.5の定性分析チャート

b) 軽元素の定性チャート



a) 重元素の定性チャート

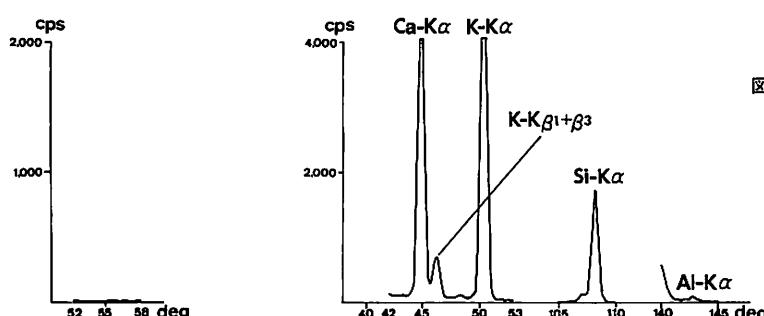


図7 蛍光X線分析法による
資料No.6の定性分析チャート

b) 軽元素の定性チャート

3 分析結果ならびに考察

試料No.5の定性チャートを図6 (a)・(b)に示す。(a)は分光結晶LiFにより重元素を、(b)は分光結晶EDDT・TAPにより軽元素を測定したものである。測定結果はX線強度100cps(1秒あたりのX線強度)未満を「+」, 100cps以上1000cps未満を「++」, 1000cps以上を「+++」, 検出されずを「-」で表し, 表3にまとめた。資料No.5は緑色を呈し, 丸玉である。主成分はケイ素(Si)・鉛(Pb)で, カリウム(K)・カルシウム(Ca)・鉄(Fe)・銅(Cu)も検出されている。これにより主原料Si・融剤Pb, 緑色の着色剤はFe・Cuによるものと推定される。

図7 (a)・(b)は, 試料No.6(水色・丸玉)の定性チャートである。Si・Pb・K・Caを主成分とし, 他にFe・Cu・錫(Sn)・チタン(Ti)・亜鉛(Zn)が含有されている。主原料Si, 融剤にPb・K・Caが使用されており, 水色は, Fe・Cuが着色剤として, Snが乳白剤の作用をして発色しているものと推定される。

ガラスはその成分より, 鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスとに分けられる。上述と同様他の6点のガラスの分析結果をまとめると表3のごとくなるが, この表によればNo.3・No.4・No.5はPbを多量に含む鉛ガラス(以下Aグループという)であり, No.1・No.2・No.6・No.7・No.8はK・Caの多いアルカリ石灰ガラス(以下Bグループという)に分類される。Aグループは主原料Si, 融剤に多量のPb, 少量のK・Caを含む $K_2O-PbO-SiO_2$ 系鉛ガラスである。着色剤としてFe・Cuを含み, 青色・青緑色を呈している。Bグループは主原料Si, 融剤に多量のK・Caが使用されている $K_2O-CaO-SiO_2$ 系アルカリ石灰ガラスである。Fe・Cuは着色剤として, Snは乳白剤として含まれている。

また, 現在ではチタン(Ti)は, ガラス熱膨脹の低下, 高屈折率を与えるため, 亜鉛(Zn)は, ガラス耐久性の向上, 热膨脹の低下, 着色安定剤等に利用されるが(註1), 8点のガラスにおいてTi・Znを意識的に加えたかどうかは不明である。

入舟遺跡出土ガラス玉8点の蛍光X線分析により, 鉛ガラスのAグループと, アルカリ石灰ガラスのBグループとに分けられた。わが国におけるガラス生産は7世紀以降明治初期までは鉛ガラスが主体であり, ソーダ石灰ガラスが国内生産として一般化したのは, ほぼ明治16年頃からである(註2)。このような状況の中, 入舟遺跡よりアルカリ石灰ガラスのガラス玉が出土したことは興味深く, 今後, その製造場所及び流通の状況を明確にする必要があろう。

(註1) 吉武素水「ガラスの製造」『ガラス』35~73

(註2) 吉武素水「ガラス」『日本の美術』37

d 入舟遺跡出土管玉の産地分析

藁科哲男・東村武信（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠・勾玉・管玉の産地分析というには、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ヶ所かある碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国・雲南・ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2)・3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例⁴⁾が報告されている。石鎌などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1) 石器の原材料産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動・活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉・管玉は権力の象徴・お祭り・御守り・占いの道具・アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになる碧玉製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。祭り・御守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材料産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は北海道余市町に位置する、入舟遺跡の遺構外出土の管玉1個で、分析結果が得られたので報告する。



写真15 入舟遺跡(右1点)と大川遺跡(左4点)出土の碧玉製管玉

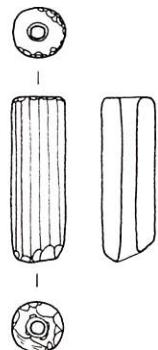


図8 入舟遺跡出土の碧玉製管玉(原寸)

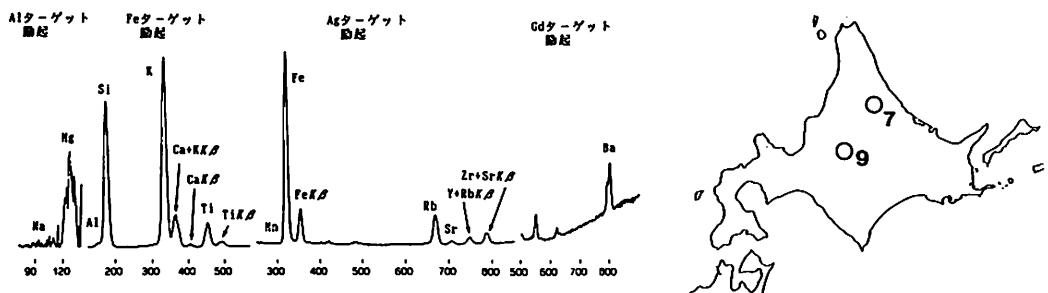


図9 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル



図10 碧玉および碧玉様緑色石の原産地

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標をみつけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ・比重の違い・原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ・碧玉製勾玉・大珠・玉などは、国宝・重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材料産地分析で成功している⁵⁾ 非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠・勾玉・管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。碧玉・ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標をみつけて、産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県花仙山産原石を図9に示す。

猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図9で示されるピークは観測される。土岐・興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は Al/Si・K/Si・Ca/K・Ti/K・K/Fe・Rb/Fe・Fe/Zr・Rb/Zr・Sr/Zr・Y/Zr である。Mn/Fe・Ti/Fe・Nb/Zr の元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba・La・Ce のピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図10に示す。佐渡猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畠野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約 7 cm 幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が 2.6~2.5 の間のものは 31 個、2.5~2.4 の間のものは 5 個の合計 36 個で、この中には、茶色の碧玉も 2 個含まれている。原石の比重が 2.6~2.3 の範囲で違っても、碧玉の色が茶色・緑色また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造湯泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は 2.5 以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に 2.2 まで低くなる。分析した原石は、比重が 2.619~2.600 の間のものは 10 個、2.599~2.500 は 18 個、2.499~2.400 は 7 個、2.399~2.300 は 11 個、2.299~2.200 は 11 個、2.199~2.104 は 3 個の合計 60 個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差は見られなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色・石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も 2.6 以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないとから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が 2.644~2.600 は 23 個、2.599~2.589 は 4 個の合計 27 個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷・石井・アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、(4)石川県金沢市二俣

町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣川原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、(5)富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分がみられる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、(6)愛知県土岐市地域で、赤色・黄色・緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の包有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、(7)北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の包有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものではなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、(8)兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。(9)北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4が5個である。碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質の碧玉を多数収集することは困難である。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。(10)北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉で不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差をもとめて母集団を作り表4に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部・玉谷・土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、縁系の原石ではない。

| 原石群 | 分析番号 | Al/Si | K/Si | Ca/K | Ti/K | K/Fe | Rb/Fe | Fe/Zr | Rb/Zr | Sr/Zr | Y/Zr | Mn/Fe | Ti/Fe | Nb/Zr | 比重 $\bar{X} \pm \sigma$ |
|------|------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------------|
| 奥部 | 31 | 0.011±0.003 | 0.580±0.320 | 0.123±0.137 | 0.061±0.049 | 0.022±0.006 | 0.070±0.021 | 174.08±124.9 | 16.99±13.44 | 0.688±0.435 | 1.801±1.434 | 0.004±0.003 | 0.001±0.001 | 0.455±0.855 | 2.620±0.032 |
| 笠知A1 | 10 | 0.049±0.017 | 1.044±0.299 | 2.308±0.556 | 0.488±0.096 | 0.632±0.012 | 0.188±0.042 | 4.658±2.044 | 15.576±4.311 | 0.054±0.041 | 0.076±0.152 | 0.019±0.005 | 0.003±0.007 | 2.495±0.039 | |
| 笠知A2 | 3 | 0.019±0.009 | 0.675±0.377 | 0.623±0.203 | 0.172±0.031 | 0.040±0.007 | 0.037±0.010 | 27.651±10.97 | 1.132±0.739 | 5.930±3.179 | 0.349±0.251 | 0.009±0.003 | 0.006±0.002 | 0.118±0.167 | 2.632±0.012 |
| 笠知B | 2 | 0.065±0.001 | 3.927±0.267 | 0.088±0.004 | 0.088±0.003 | 0.233±0.034 | 0.455±0.010 | 2.281±0.278 | 0.035±0.104 | 0.253±0.084 | 0.129±0.022 | 0.015±0.002 | 0.022±0.004 | 0.123±0.010 | 2.607±0.001 |
| 猿八 | 36 | 0.046±0.007 | 3.691±0.548 | 0.049±0.038 | 0.688±0.011 | 0.370±0.205 | 0.384±0.153 | 1.860±1.070 | 0.390±0.165 | 0.139±0.127 | 0.165±0.138 | 0.003±0.001 | 0.018±0.010 | 0.032±0.014 | 2.583±0.049 |
| 土岐 | 11 | 0.010±0.001 | 0.404±0.229 | 0.090±0.074 | 0.057±0.035 | 0.027±0.007 | 0.091±0.029 | 47.540±31.76 | 4.076±2.784 | 0.271±0.323 | 0.289±0.265 | 0.001±0.001 | 0.001±0.001 | 0.261±0.242 | 2.607±0.009 |
| 玉谷 | 27 | 0.025±0.009 | 0.625±0.297 | 0.110±0.052 | 0.476±0.104 | 0.045±0.014 | 0.151±0.020 | 6.190±1.059 | 0.940±0.205 | 0.192±0.170 | 0.158±0.075 | 0.006±0.003 | 0.016±0.003 | 0.164±0.021 | 2.619±0.014 |
| 花畠山1 | 27 | 0.019±0.004 | 0.909±0.357 | 0.171±0.108 | 0.222±0.088 | 0.059±0.019 | 0.225±0.028 | 10.633±3.616 | 2.355±0.683 | 0.476±0.192 | 0.088±0.062 | 0.001±0.001 | 0.009±0.002 | 0.042±0.034 | 2.570±0.044 |
| 花畠山2 | 33 | 0.022±0.003 | 1.178±0.324 | 0.157±0.180 | 0.229±0.139 | 0.055±0.015 | 0.219±0.028 | 12.677±2.988 | 2.723±0.519 | 0.472±0.164 | 0.122±0.071 | 0.001±0.001 | 0.009±0.004 | 0.035±0.025 | 2.388±0.079 |
| 細人 | 8 | 0.019±0.003 | 0.534±0.284 | 0.991±0.386 | 0.372±0.125 | 0.031±0.008 | 0.075±0.020 | 12.884±3.752 | 0.888±0.201 | 1.879±0.550 | 0.026±0.082 | 0.003±0.002 | 0.008±0.002 | 0.021±0.344 | 2.169±0.039 |
| 二俣 | 4 | 0.043±0.001 | 2.644±0.183 | 0.337±0.079 | 0.158±0.009 | 0.312±0.069 | 0.338±0.039 | 1.455±0.734 | 0.481±0.176 | 0.697±0.051 | 0.088±0.015 | 0.007±0.002 | 0.043±0.001 | 2.440±0.001 | |
| 石戸 | 4 | 0.019±0.004 | 0.601±0.196 | 0.075±0.022 | 0.088±0.038 | 0.154±0.072 | 0.707±0.079 | 7.242±1.597 | 1.142±0.315 | 0.649±0.158 | 0.247±0.082 | 0.007±0.001 | 0.009±0.002 | 0.227±0.089 | 2.388±0.038 |
| 女代南B | 68 | 0.045±0.016 | 3.115±0.445 | 0.042±0.024 | 0.107±0.036 | 0.283±0.099 | 0.267±0.063 | 2.374±0.676 | 0.356±0.065 | 0.214±0.097 | 0.171±0.047 | 0.011±0.004 | 0.006±0.009 | 0.034±0.016 | 2.554±0.019 |

表4 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差
X:平均値 σ:標準偏差 女代南B:女代南遺跡(豊岡市)で使用されている原石產地不明の玉原材料で作った群

| 試料番号 | 分析番号 | Al/Si | K/Si | Ca/K | Ti/K | K/Fe | Rb/Fe | Fe/Zr | Rb/Zr | Sr/Zr | Y/Zr | Mn/Fe | Ti/Fe | Nb/Zr | 重量 gr | 比重 gr |
|---------|---------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------|----------|
| 管玉1 | 44909 | 0.036 | 4.420 | 0.029 | 0.056 | 0.436 | 0.503 | 0.944 | 0.475 | 0.121 | 0.076 | 0.002 | 0.021 | 0.026 | 1.788 | 2.551 |
| JG-1 a) | JG-1 a) | 0.075 | 4.024 | 0.759 | 0.224 | 0.120 | 0.282 | 3.560 | 1.004 | 1.306 | 0.200 | 0.022 | 0.024 | 0.065 | | |

表5 余市町入舟遺跡出土の管玉の分析結果

a):標準試料 Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E. (1974).
1974 compilation of date on the GUS geochemical reference
samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

| 遺物番号 | 分析番号 | 碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率 | ESR信号形 | 総合判定 |
|------|-------|----------------------|-----------------------|---------------------|
| 管玉1 | 44909 | <10 ⁻²⁵ % | 1×10 ⁻²⁰ % | 10 ⁻²⁵ % |
| 管玉1 | 44909 | 0.5 % | 1×10 ⁻⁶ % | 管(A)形 猿八產原石 |

表6 余市町入舟遺跡出土の管玉原石產地分析結果

入舟遺跡出土の管玉と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材产地の同定をするために、（1）蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製造物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較する定量的な判定法で行なう。（2）また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果（図11）で、Rb・Sr・Y・Zrの各元素が容易に観測でき、緻密で比重が2.5以上あることから原材料の岩石を碧玉に分類した（表5）。遺物の比重が2.3以上あり細入原産地の原石ではないことが分かる。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²検定⁸⁾により同定を行い結果を表6に示した。信頼限界としている0.1%以上で佐渡猿八群に帰属されたため、猿八原産地の原石の可能性が高く、さらに以下に述べる電子スピン共鳴（ESR）法による結果も猿八群に一致すればより確実な結果となる。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標をみつけて、産地分析に利用した。ESR測定は完全な非破壊分析で、直径11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図12-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さい信号（I）は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅広い信号（II）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（III）で構成されている。図12-(1)では、信号（II）より信号（III）の信号の高さが高く、図12-(2)・(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号（II）が信号（III）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（III）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図13-(1)に花仙山・猿八・玉谷・土岐を図13-(2)に興部・石戸・八代谷-4・女代(B)遺物群、八代谷および図13-3に富良野市空知川の空知(A)・(B)および北海道今金町花石の各原石の代表的な信号（III）のスペクトルを示す。今回分析した遺物のESR信号（III）の結果を図6に示す。管玉1は猿八(A)形に類似する信号であることから猿八産地の原石の可能性が大きいことを示唆しているが、さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法とともに同じ原産地に特定された場合のみ、そこの原産地の原石で作られた玉であると決定する（表6）。

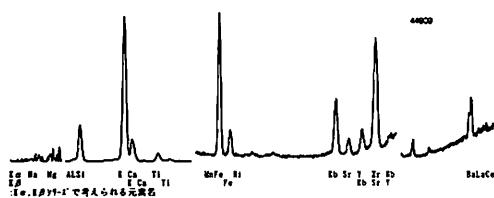


図11 碧玉製管玉の蛍光X線スペクトル

図12 碧玉原石のESRスペクトル(花仙山・猿八・土岐)

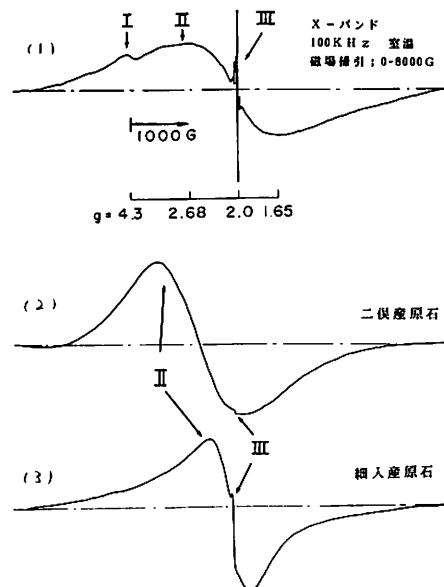


図14 碧玉製管玉の信号ⅢのESRスペクトル

図13-(1) 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル

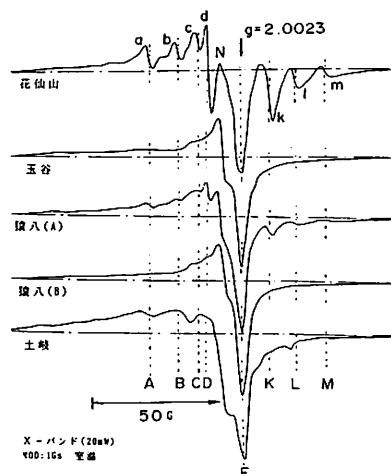


図13-(2) 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル

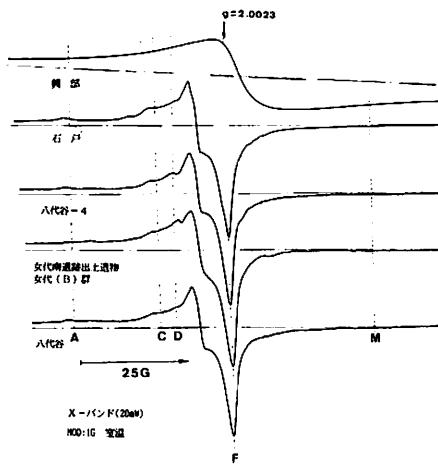
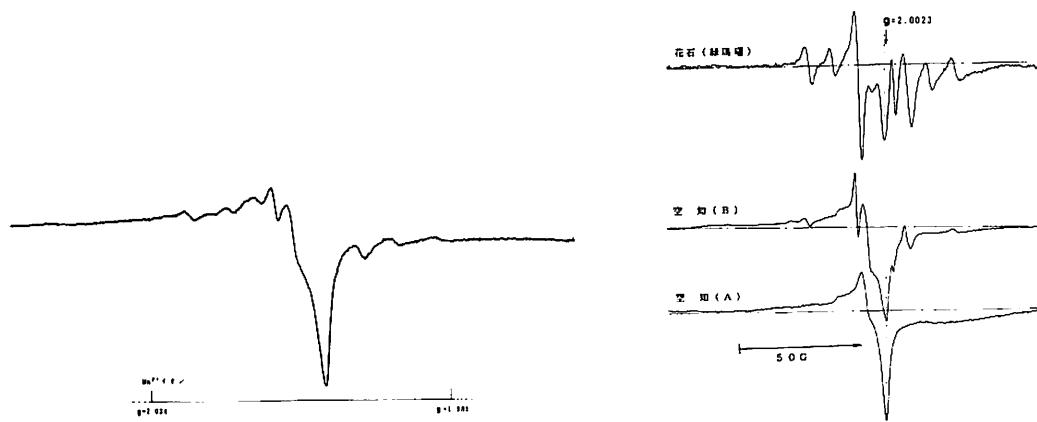


図13-(3) 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル



結論

今回分析を行った入舟遺跡の遺構外出土の管玉1個の蛍光X線・E S Rの両分析による総合判定では佐渡猿八産碧玉と同定され、余市町では佐渡産碧玉は、大川遺跡の管玉10・17・18・20・21に使用されていることはすでに明らかになっていて、これで余市町では佐渡猿八産原石を使用した管玉は合計6個発見されたことになる。したがって、佐渡との交流がより確かであったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 茅原一也 1964 「長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について」（概報）『長者ヶ原』新潟県糸魚川市教育委員会 63-73
- 2) 萩科哲男・東村武信 1987 「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要』6 1-18
- 3) 萩科哲男・東村武信 1990 「奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析」檜原考古学研究所紀要『考古学論攷』14 95-109
- 4) Tetsuo Warashina 1992 Allocatin of Jasper Archaeological Implets by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19 357-373
- 5) 萩科哲男・東村武信 1983 「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16 59-89
- 6) 番場猛夫 1967 「北海道日高産軟玉ヒスイ」『調査研究報告会講演要旨録』No18 11-15
- 7) 河野義礼 1939 「本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質」『岩石礦物鉱床学雑誌』22 195-201
- 8) 東村武信 1976 「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9 77-90

III 主要遺物の概要

a 入舟遺跡・大川遺跡出土和鏡

青木 豊（国学院大学文学部）

入舟遺跡出土和鏡

入舟遺跡からは現在までのところ2面の和鏡が検出され、それらは菊水双雀鏡（図15-1）と菊花双雀鏡（図15-2）であり、前者はG P-1墓壙内より検出されたもので、出土状況からも副葬品であることが窺い知られるものである。一方、後者の菊花双雀鏡は遺物包含層であるI層中からの検出であって直接何らの遺構に伴うものではなかった。

菊水双雀鏡（図15-1）

本鏡は擬漢形式の菊水双雀鏡で、面径8.1cm、縁高0.8cmを計る。

鉢は、ほぼ正円形の亀甲を呈する亀鉢を配置するが、亀甲部の詳細文様は鋳化が著しいため不明瞭であり俄かに判断し難いものとなっている。

界囲は擬漢形式の特徴をなす所謂特殊圈を呈し、縁はやや丸味を帯びながらも垂直に立ち上がる直角式外縁を呈する。

鏡背文様は、内区全域を波間に漂う菊花を表現した菊水文様で埋め尽くし、背面中央部上端に双雀を付置する構図を鋳出する。一般に菊水文に描かれる菊花は、下半部を水中に没した形の半花状に表現されるが、本資料の場合は満開花を描いていることが特徴としてあげられよう。

また、菊花は範押しによる形成ではなく、スタンプ状工具による押圧により雌型製作がなされたものである。双雀は、口嘴を下方に向け相対する固定対向形式で配され、それはまた亀鉢の亀頭方向にそれぞれ向けるものの、接嘴するには至っていない。

鏡背文は全体に形骸化が進み硬渋したものとなっているところから、本資料の製作年代は室町時代中期～後期の所産であると看取される。尚、金質は青銅である。

菊花双雀鏡（図15-2）

本鏡は、面径11.3cm、縁高1.0cmを計る菊花双雀鏡で外区に鋳造後の双孔を有する。

鉢は、やや大形の花蕊中隆鉢を設置し、界囲は中線單圈を呈し、縁は直角式外縁を採用する。

鏡背意匠は写生手法によるもので、内区の下端に洲浜を描き、その洲浜の右側から生ずる菊花を圈に沿って大きく左回りに撓め、その先端は洲浜の左端部に今にも接しそうな勢いで表現している。

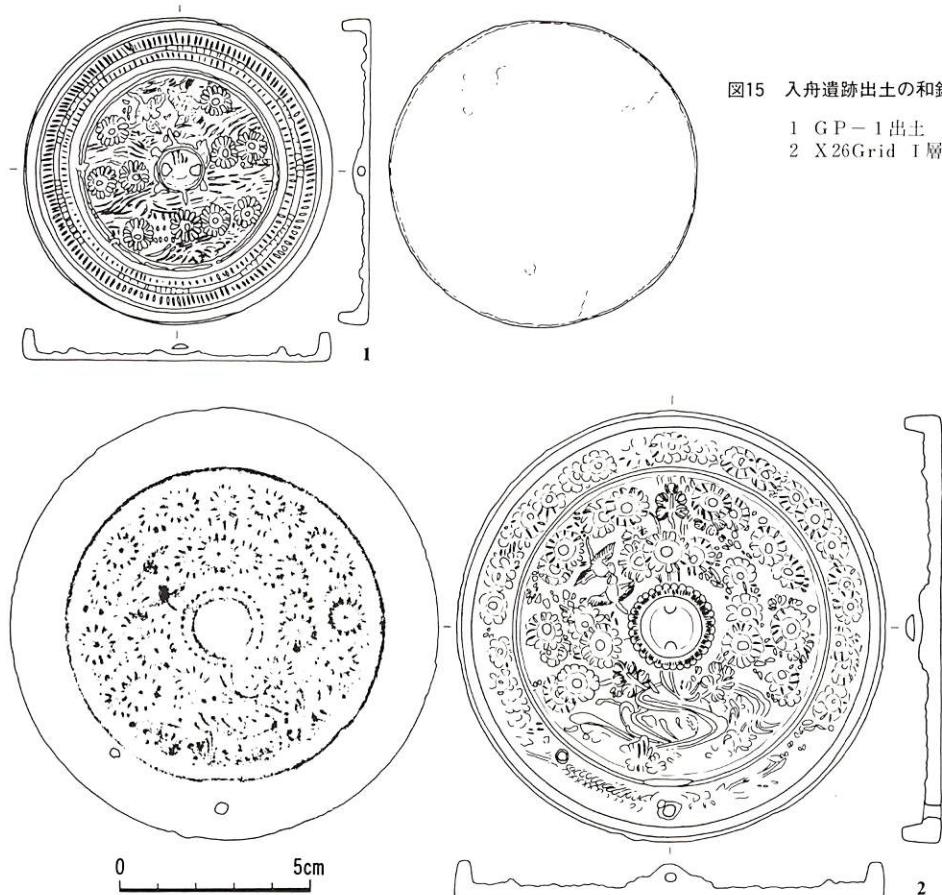
中央より、左寄りの上部の花の合間に、概ね上下に相対し接嘴する双雀が自由写生形式で描かれ布置されている。

外区は、洲浜の延長部を除きこぼれるばかりの満開菊で埋めつくし、更にそれらは内区と同様に範押しによるものであり、菊花の重なりにより遠近感を呈出したものとなっている。

図15 入舟遺跡出土の和鏡

1 GP-1出土

2 X26Grid I層出土(2孔あり)



1)



2)



3)



4)

写真16 入舟遺跡和鏡出土状況

1) GP-1 遺構検出状況

2) GP-1 南頭位とみられる

3) GP-1 西側より伴出

4) X26Grid I層出土

金質は上質の青銅で、全体に鋳上りも良好である。

本鏡の所属時期は外縁形式及び意匠表現等から鎌倉鏡が隆盛を迎える鎌倉時代中期よりやや下る13世紀極く末、ないしは14世紀極く初の所産と観察される。

本鏡の性格については、前句の如く造構に伴うものではなく遺物包含層内からの出土であるところから不明であるが、本鏡の性格あるいは使用方法を示唆する唯一の情報は外区に穿たれた鋳造後の双孔である。本双孔は釘等を使用した打圧による穿孔であるが、穿孔目的は通常であれば寺社の荘厳飾りを目的として内陣の梁や柱に鏡を固定（写真-19）する為の孔であり、本事例は中世和鏡に於いて多見されるところである。

また、鏡の使用方法のひとつとして御輿につけられていたものとも想定されよう。

御輿は神輿とも呼ばれ、御神体もしくは御靈代が乗るとされる輿で、その歴史は古く天平勝宝元年（749）に、宇佐八幡を東大寺に迎える時に用いられたとの記録がある。形状は、多種多様のものがあり、四角形・六角形・八角形と形の複雑なものまである。通常黒漆を施し、その各所に金銅製透金具類を多用することにより美装し、屋蓋中央には鳳凰または葱花を設置する。当然、本体下部の台には肩に担ぐ便に供するための二本の棒を縦に貫いているのが基本形である。

鏡は、神輿本体の四隅に荘嚴を整えるために取り付けられている幡・帽額・華鬘の飾り金具に嵌め込まれ用いられている。

この神輿に具備されている鏡は、神輿全体の荘嚴を呈出させる事と、それに加えて基本的には、神体が座す神輿の周辺に陽を反射し目もくらまんばかりに光り輝く鏡をめぐらせる事により、神輿に忍び寄る邪悪なものを払う事を目的としたものと看取される。

武藏国の總社である大国魂神社の神輿がその代表例のひとつとしてあげられる。更に本例の場合、遺存する中・近世鏡を觀ると神輿の荘嚴のみに留まらず、多数の鏡をつるし、そのぶつかりにより音を故意に発生させていたらしく、驚く程大きく変形あるいは破碎したものも数多く認められる。

この点は、後述する大川遺跡出土の変形の著しい菊花散双雀鏡（図16-4）や破碎鏡である菊花（？）双雀鏡（図16-5）に共通する一面である。

順当にかかる觀点に立脚すれば当該和鏡は、前句の如くの使用に供されたものと考えられるが、本州と異なり北海道域の場合もうひとつ想定せねばならない事は、アイヌによる和鏡の使用である。アイヌにとって鏡は、鏡の物を映ずると言った映像具とはまったく隔絶したものであって、あくまで宗教的儀式に供されたもので、このことは鏡の出現時以来よりの精神觀念の產物としての鏡の合わせもつ一面を象徴するものと把握できよう。

なお、アイヌの鏡は単品で用いられる事は決してなく、アイヌ玉等によって構成される頸飾りの「飾板」として使用されるのを常としている。また、アイヌの玉飾りは二大別され、先ずひとつは一連の中央部に「飾板」を連ねたシトキ（写真-20）と、他方はガラス玉のみを連ねたタマサイと称されるものである。

後者のガラス玉のみを連ねたタマサイは、アイヌ婦人の装飾品として必要欠くべからざるものであって、代々母から娘に伝える母系の宝物と言えるものであった。即ち、それはある意味では女の魂であり、護符であり、宝であったところから婚礼調度の第一の品とされてきたようである。これは江戸期における所謂「ボテ鏡」に対する観念と同一であると言えよう。

これに対しシトキは、重要な宗教的儀式に用いられるものであって、同じ頸飾りでありながらもタマサイのそれとは使用・意義をまったく異にするものであった。

ただ、シトキの中央に垂下する飾板は必ずしも鏡と限らず、種々の金属物を使用したものが認められ、その形状も円形を基本としているようであるが、中には鉗・長押金具・引手金具・簾筈の飾り金具等々の転用例も散見される。要するに飾板は、光沢を発する金属性のものであれば良しとされたようであるが、抜本的には光るものは邪を払うという基本観念がアイヌには強くあるようであり、鏡をシコルントンビ（眼の光るもの）と呼称するところからも、飾板は基本的には円形を呈し、光を放つ鏡である事を第一義としたものであって、それはシャーマンが邪鬼を払う呪物に鏡を用いるに基本的には通ずるものと考えられる。

以上のようにアイヌにおける玉飾りは、強い靈力を持つもので精神を高める具であり、それに鏡の第一義ともいえる辟邪の觀念とが相俟って、飾板に鏡を使用することにより、さらに強力な靈力を期待したものと考えられる。

このような觀念に基づく、アイヌによる鏡の使用であることも当然予想せねばならない。

更には、本州に於いて中世に寺社で莊嚴として使用されていたものが、その後当該地域に搬入された等々、そこには種々のファクターの介在が予想されるが、にわかには断じ難い。

大川遺跡出土和鏡

大川遺跡からは4面の和鏡が検出されているが、詳細に述べると図16-4・5・6は発掘調査による検出であるのに対し、同図16-3は1924年の秋に大川遺跡より耕作中に出土したと口伝される和鏡であり、調査によるものとは異なるものである。

今回調査により出土した和鏡3面は、いずれも遺構に伴うものではなく、4・5・6はそれぞれH50・H37・J39 Grid の共にI層である遺物包含層中より検出されたものである。

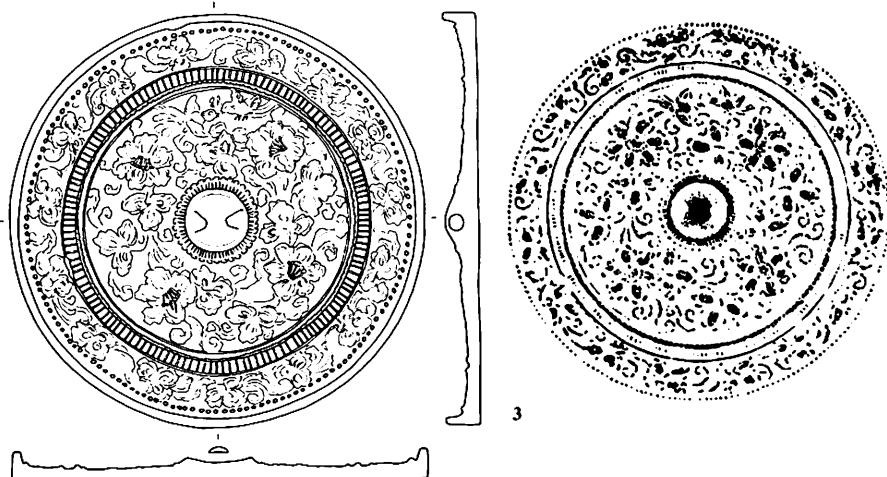
これらI層出土である、同一層中出土鏡3面を観ると4・5の2面は中世和鏡で室町時代後期に比定されるものであるのに対し、6は江戸時代後期の所産である柄鏡であり、両者の間にはかなりの時間差が介在することも事実であるが、同一包含層と言えども地点が異なるところから即座に4・5の中世和鏡の伝世を云々するわけにはいかないようである。

以下、それぞれの鏡について観察してみると次の如くである。

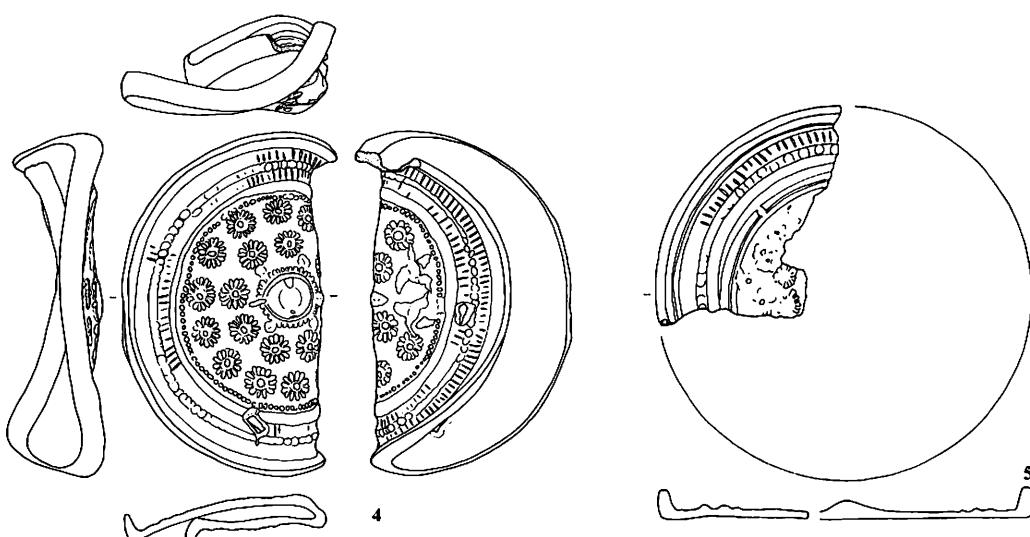
唐花双雀鏡（図16-3）

本鏡は、面径 11.0cm、縁高 0.8cmを計測する擬漢形式の鏡で、金質は黄銅を供する。

先ず、本鏡は前句の如く1924年に発見されたと伝えられるものであり、更に昭和3年発行の鑑



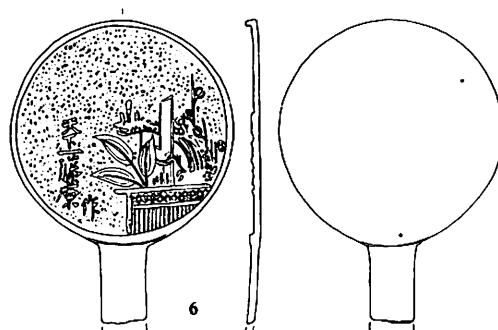
3



4

5

0 5cm



6

図16 大川遺跡出土の和鏡

- 3 1924年秋出土したと伝えられている鏡
- 4 H 50 Grid I層出土
- 5 M 37 Grid I層出土
- 6 J 39 Grid I層出土

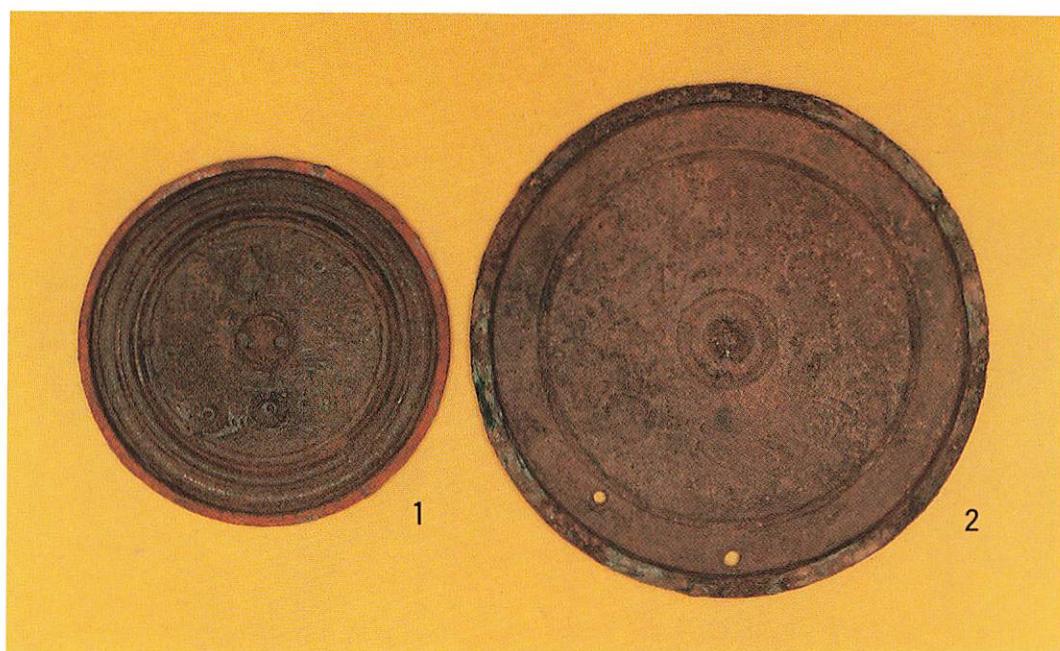


写真17 入舟遺跡出土の和鏡

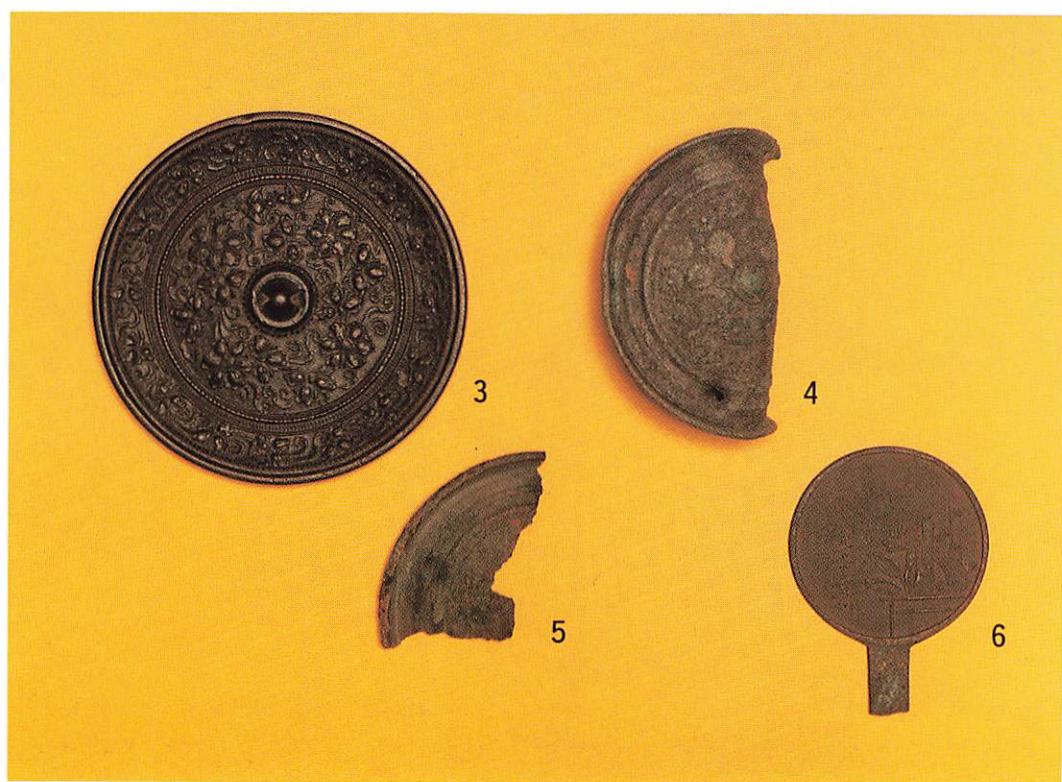


写真18 大川遺跡出土の和鏡

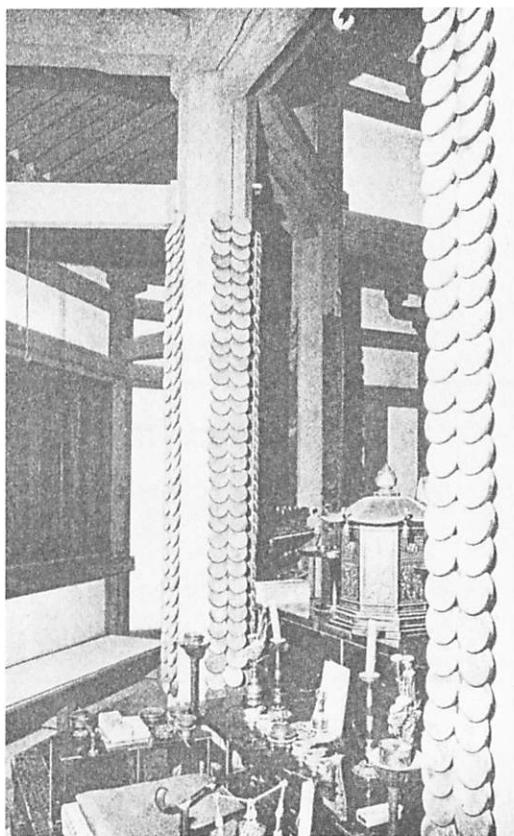
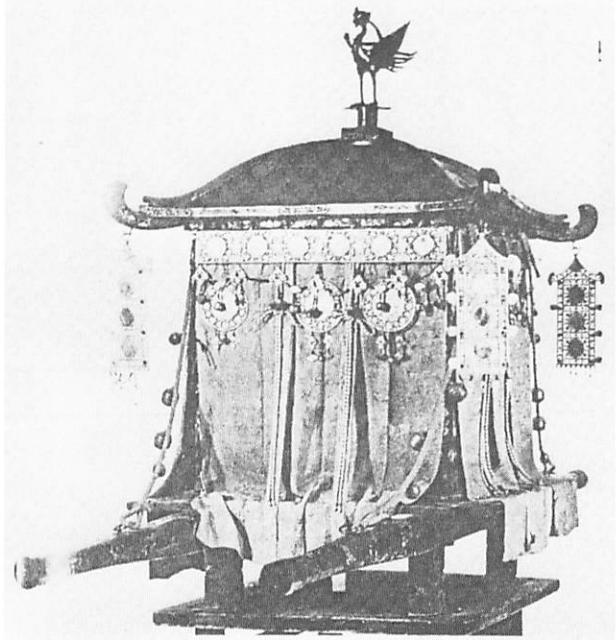


写真19 法隆寺西円堂内陣の和鏡(『法隆寺の至寶』より転載)



写真20 シトキ(釧路市立博物館蔵)



▲写真22 神輿の図
(『年中行事絵巻』より)

◀写真21 誉田八幡神輿
(鎌倉時代,『原色日本の美術』より)

定書が今でも添えられている。鑑定者は、漢式鏡の研究の先駆者であり、考古学史にも名を刻む当時東京帝室博物館歴史部長であられた高橋健自先生であり、先生によると南北朝時代の和鏡であると鑑定されている。

鏡式、鏡背文様、金質等より先生の鑑定通り本鏡は典型的とも言える南北朝期の所産で、^{じょうて}鑄上り等も良好で所謂上手の資料である。

鉢は、花蕊座中隆鉢を配し、界圈は擬漢式特殊圈を呈し、外縁は直角式中縁である。

中外区ともに端花とされた唐花を復刻し、埋め尽くしている。範使いは軽妙で、鑄上がりも良好である。尚、内区上端の唐花の間隙には接嘴する双雀が対置式に付置されている。

特殊界圈は鉢より外縁に向かって、先ず細線、次いで連珠状隆帶、簾状文、更に細線と言った4要素により構成されている。

本鏡は前句の如く南北朝時代、具体的には14世紀中葉に比定されるものであるが、その良好な遺存状態と現在有する色調からは口伝である1924年の出土と言うことは到底考えられないものである。基本的に本鏡は伝世鏡であり、出土鏡では有り得ない。それは入舟・大川両遺跡の出土の和鏡と比較してみると一目瞭然である。それも金質が白銅であるならばともかく、黄銅であってである。

菊花散双雀鏡 (図16-4)

本鏡は擬漢形式鏡で、面径は概ね 9.1cm、縁厚 0.7cmを計る。概ねと記した理由は、図からも理解できるように本鏡は外圧により、大きく鏡面側に折り曲がり、まさに餃子の皮で包んだ状況である為である。と言うように本鏡は本来の形状を大きく逸脱し、変形をきたしているが、しかし破損はしていない。中世和鏡がここまで変形したものは極めて稀であるところから、何らかの人為的臭を感じさせるものである。

また、加熱痕を留めるものであり、その為遺存状況及びかなあじは悪いものとなっている。

鑄は素文亀鉢で、界圈は擬漢鏡特有の特殊圈であり、鉢から外縁に向かって連珠文・六花纹・簾状文・7連を一単位とする複円断続隆帶・簾状文・細線により構成されている。

外縁は内湾気味の直角式中縁を呈する。

鏡背文様は、範押しではなくスタンプ様工具による満花菊を鉢を中心に二重に配することにより内区全面を埋めつくしている。意匠としては形骸化したものとなり、雅味の感じさせないものとなっている。

更なる特徴は、釘等による乱雜な双孔が穿たれている事であり、本鏡の製作時期は鏡式・鏡背文様から室町時代末に比定されるものと看取せられる。

菊花 (?) 双雀鏡 (図16-5)

本鏡は破碎し大半を失い、約4分の1程度を遺存しているものである。

面径は約10cmと推定され、縁厚は 0.8cmを計測する擬漢鏡である。

鉢は鏡式から判断して亀鉢を呈したものと推定されるが欠失している為、不明である。

界圈は擬漢鏡特有の特殊圈で、内側より外縁に向かって細線、六乃至八花と觀られる花文隆帶、簾状文、連珠複円文、簾状文、細線文より構成され、外縁は丸味を帯びた直角式中縁を呈する。

鏡背文様は、遺存部分が狹少な為、断定し難いが恐らく洲浜を下辺に配し、洲浜の右側に菊花の株を描き、界圈に沿って枝を左にたわめた構図を採用する菊花双雀鏡と推定され、遺存部分は洲浜を下に置いた場合、左上の4半部に相当するものと看取される。

金質は青銅を用いている。尚、肉視のため不明確であるが、火中しているようにも思える。

本鏡の製作年代は、室町時代後期の所産であるが、4の菊花散双雀鏡と比較した場合、ほぼ同等か、あるいは僅か先行するものと看做される。

竹梅竹垣図柄鏡（図16-6）

本鏡は面径 6.0cm、現存柄長 2.0cm、厚さ 0.2cmを計る小形の柄鏡である。

鏡背には、竹垣のむこうに青竹と老木の梅樹を背面右下に寄せて描いている。したがって、背面の左半部と上部は大きな空間となり、その結果洗練された意匠となっている。

また、空間部は砂目地となっている。本砂目地は柄鏡に一般的に施される特殊なものではないが、鏡が小さいだけに同じ砂目地でも新鮮に感じられる。

背面左寄りに「天下一藤原作」の製作者名が陽鋲される。

柄は基部より 2.0cmのところで折損している。製作年代は江戸時代後期の所産であり、当該期の小形柄鏡は今日のコンパクトに相当する懐中鏡もしくは奉納鏡として一般的に製作されたものである。本資料の性格は両者いずれの用途か即断し難いが、先ず鏡面に図示した如く2個の鑄造の際に発生した鬆穴^{ナガナ}が埋め金される事なく放置されていることと、更に鏡は、鏡縁部に合せ范鑄成ゆえに生ずるバリを整形する為にヤスリで研磨調整が施されることを常とするが、本鏡の場合大ヤスリのヤスリ目を各所に留めている。つまり本鏡の仕上げ調整は入念になされたものではなく雑なものであったことが窺い知られる。

即ち、鏡面の鬆穴の無調整と鏡縁の乱雑な調整から実際に使用を目的とした懐中鏡とは想定し難く、むしろ実用を目的としない社、あるいは神棚の御神鏡・奉納鏡と理解するのが自然であろうと思われる。

北海道地域に於ける和鏡の出土例は稀であると言つても決して過言ではなく、寿都町朱太川左岸遺跡出土の室町時代後半に比定される2面と千歳市所在の末広遺跡出土の同じく室町時代後期の所産である亀甲地文鏡が代表と言えるものである。

その中で、入舟・大川両遺跡出土の複数和鏡は、和鏡の使用方法・信仰・流通等を考える上で和鏡の研究上極めて重要な資料であり、且つ和鏡研究に新たなフィールドを加えたものとして評価でき得るものであり、本遺跡からの更なる和鏡の検出が望まれるものである。

b 入舟遺跡・大川遺跡出土の魚形石器

高瀬克範（北海道大学文学部学生）

はじめに

魚形石器は、北海道縄文期の恵山文化に特徴的にみられる結合釣針の石製軸部である（高瀬1996）。大川遺跡（1989～1994年度）からは、これまでに未製品も含めて9点出土しており、95年度の入舟遺跡の発掘調査においても4点が出土した。ここでは、これまでに入舟・大川遺跡から出土した魚形石器を紹介し、他遺跡との比較をまじえて両遺跡出土資料の特徴についてふれてみたい。

[1] 入舟遺跡出土の魚形石器

1（図17-1） 遺構外出土の完形資料である。長さ24.6cm、幅4.5cm、厚さ4.5cm、重量347gであり、石質は砂質凝灰岩である。頭部と尾部にそれぞれ1本、体部に2本の溝がめぐる。魚形石器の表面を全周する溝が体部に2本存在する点、さらに全体的に湾曲した形態が特徴的である。

頭部先端には明確な「ノブ」が作出されている。溝は頭部と尾部にめぐるものが太くて浅い。それにたいして体部にめぐる2本の溝は細くて深く、断面がV字状に刻みこまれている。頭部から尾部にかけて、（長軸に対して）縦位あるいは斜位の擦痕がみられる。頭部平面にも同じ方向の擦痕がみられる。擦切痕はみられない。

2（図17-2） 遺構外から出土したほぼ完形の資料である。体部の一部が欠損している。計測値は、長さ17.6cm、幅3.4cm、厚さ3.4cm、重量は216gであり、石質は砂岩である。頭部の先端はとがっており、魚形石器としては特殊な頭部形態である。頭部平面はみられるが、「ノブ」は作出されていない。体部断面は三角形に近い。溝は頭部と尾部に、それぞれ1本ずつめぐっている。頭部から尾部にかけて縦位または斜位の擦痕がみられ、頭部平面にも同様の方向の擦痕が残存している。擦切痕はみられない。

3（図17-3） 遺構外出土の、頭部が欠損した資料である。計測値は、長さ（14.8）cm、幅4.2cm、厚さ3.6cm、重量（230）gであり、石質は泥岩である。尾部に1本の溝がめぐる。体部から尾部にかけて、縦位方向の擦痕がみられる。擦切痕はみられない。

4（図17-4） 遺構外出土の、頭部および尾部が欠損した資料である。計測値は、長さ（11.6）cm、幅3.6cm、厚さ3.7cm、重量（211）gであり、石質は砂岩である。体部には斜位方向の擦痕が残存する。擦切痕はみられない。

[2] 大川遺跡出土の魚形石器

1（図18-1） 中世の壕状遺構MO-3の覆土から検出された完形資料である。長さ20.2cm、幅4.9cm、厚さ4.9cmであり、重量は650gともっとも重い魚形石器のひとつである。石質は砂岩である。体部が太く断面はほぼ円形を呈し、尾部の太さもほとんど変わらない。頭部の「ノブ」は

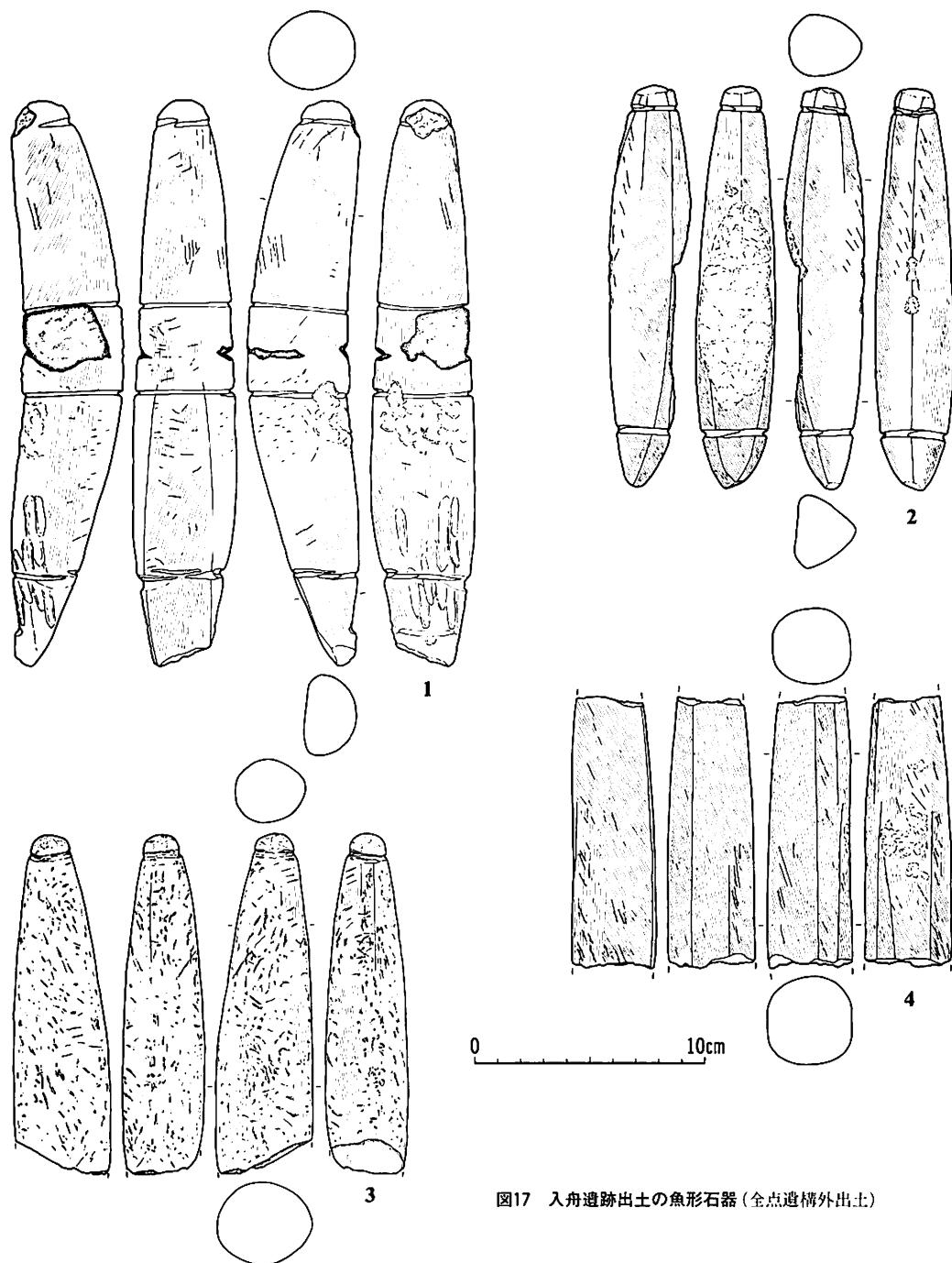


図17 入舟遺跡出土の魚形石器（全点追構外出土）

みられないが、平面は明確に作出されている。太く深い溝が、尾部に1本めぐる。資料表面には縦位方向の擦痕がみられる。擦切痕は観察されない。

2 (図18-2) 中世の壕状遺構MO-8の覆土から検出された両端が欠損した資料である。一部に

敲打の痕跡もみられるが、入舟・大川遺跡出土魚形石器に特徴的な石質・形態・製作手法からみて、魚形石器の未製品の可能性がある資料としてとりあげる。計測値は長さ(18.6)cm、幅5.2cm、厚さ5.2cm、重量は(477)gである。石質は、砂岩である。資料表面には、縦位または斜位の擦痕がみられる。

3 (図18-3) GP-75出土の完形資料である。計測値は 幅3.5cm、厚さ4.3cm、重量349gであり、石質は砂岩である。全体的に扁平で、頭部平面の幅は広く、溝はみられない。頭部から尾部にかけて、縦位または斜位の擦痕がみられる。頭部平面は斜位あるいは横位の擦痕がこる。擦切痕はみられない。

4 (図18-4) 図18-5とともに、GP-179から出土した完形資料である。本資料は、魚形石器の機能・用途の推定に重要な意味を持つために、すでに紹介されている資料である(宮 1993)。計測値は、長さ20.3cm、幅4.1cm、厚さ3.5cm、重量269gであり、石質は泥岩である。頭部には「ノブ」はみられないが、先端部が反りかえる。頭部平面は明確に認められる。溝は、頭部と尾部にそれぞれ1本ずつめぐっている。擦切痕はみられない。特筆すべきは、表面に残存する樹皮・繊維状の物質である。頭部の表面には、樹皮の巻き付け痕がみられ、2本の溝の中と体部下面にも紐と考えられる繊維質の物質が残存している。頭部平面の周縁部には木目痕が残っており、そこに何らかの装着物があったことは疑いない。さらに木目痕の範囲から、魚形石器と装着物の接着面の形態が理解できる。表面の調整は、入舟・大川遺跡出土の魚形石器の中ではもっとも入念である。頭部には横位の擦痕が、胴部から尾部にかけては縦位の擦痕がみられる。頭部平面の調整方向は、観察できない。墓壙にまかれたベンガラが、資料表面に付着している。

5 (図18-5) GP-179出土の完形資料である。図18-4とともに出土した。計測値は長さ22.4cm、幅4.6cm、厚さ3.5cm、重量401gであり、石質は砂岩である。頭部には「ノブ」がつけられ、幅広の頭部平面もみられる。溝は頭部・尾部に1本ずつめぐっている。全体に斜位方向の擦痕がみられるが、頭部平面のみ縦位の擦痕が残る。擦切痕は観察されない。

6 (図19-6) GP-359出土の完形資料である。次に紹介する資料とともに出土した。計測値は、長さ21.8cm、幅4.4cm、厚さ4.4cm、重量456gであり、石質は砂岩である。頭部には「ノブ」の作出はみられないが、幅広の頭部平面は存在している。体部は太く、その断面は円形に近い。溝は頭部に1本、尾部に2本みられ、すべて太く浅い。尾部に2本以上の溝がめぐる例は、江別市旧豊平河畔遺跡などで検出されている(図21-6)。表面全体に縦位もしくは斜位の擦痕が、頭部平面には斜位の擦痕がみられる。擦切痕は観察できない。

7 (図19-7) 図19-6同様、GP-359から出土した魚形石器の未製品と考えられる資料である。計測値は、長さ26.4cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重量344gであり、石質は砂岩である。擦切痕が片方の側面にみられ、頭部平面は作出される過程にあると考えられる。溝は付されていない。表面全体に、縦位の擦痕がみられる。

8 (図19-8) GP-390出土のほぼ完形の資料である。頭部の一部が欠損している。計測値は、

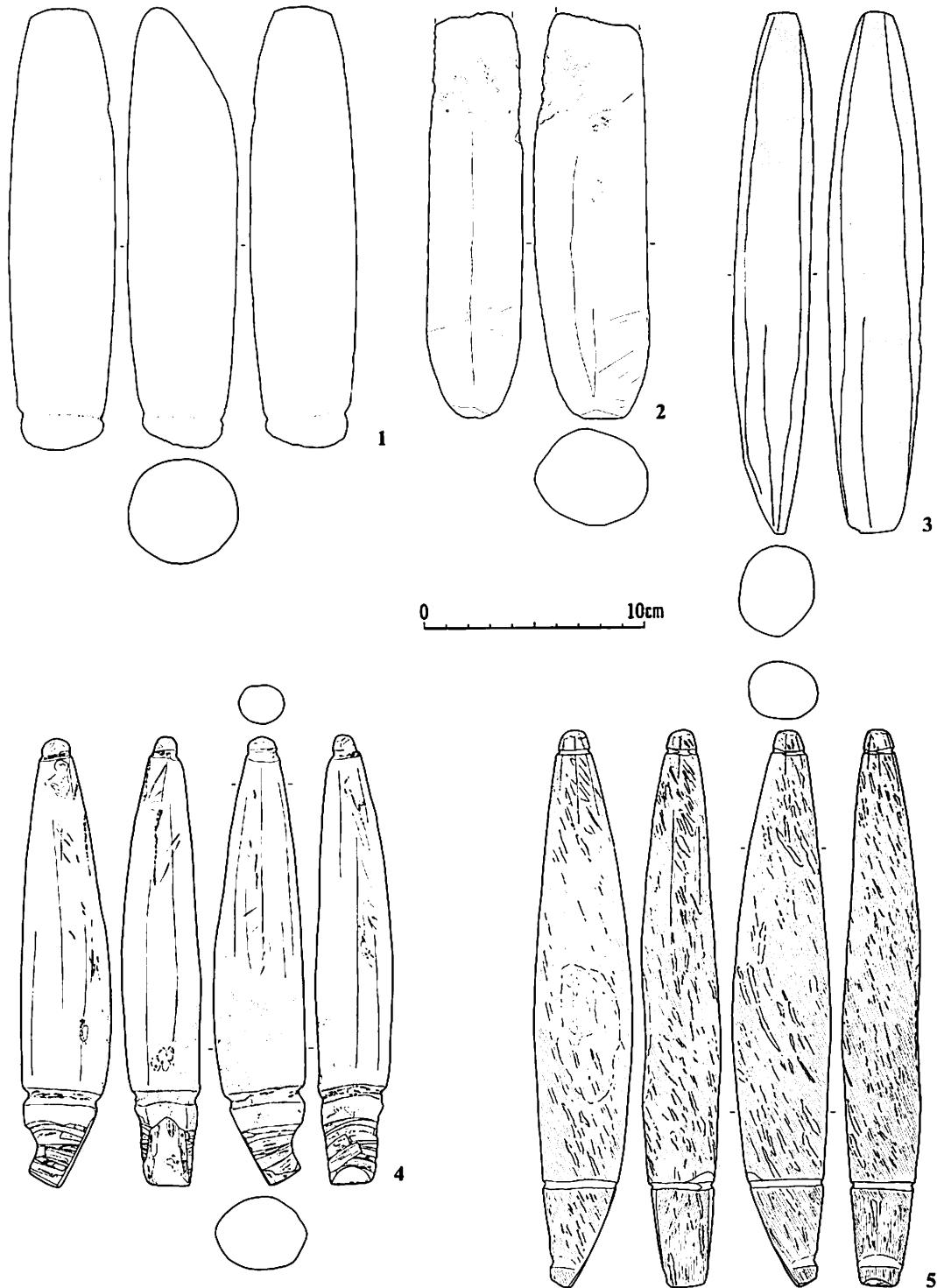


図18 大川遺跡出土の魚形石器

(1 MO-3 覆土, 2 MO-8 覆土, 3 GP-75, 4・5 GP-179出土)

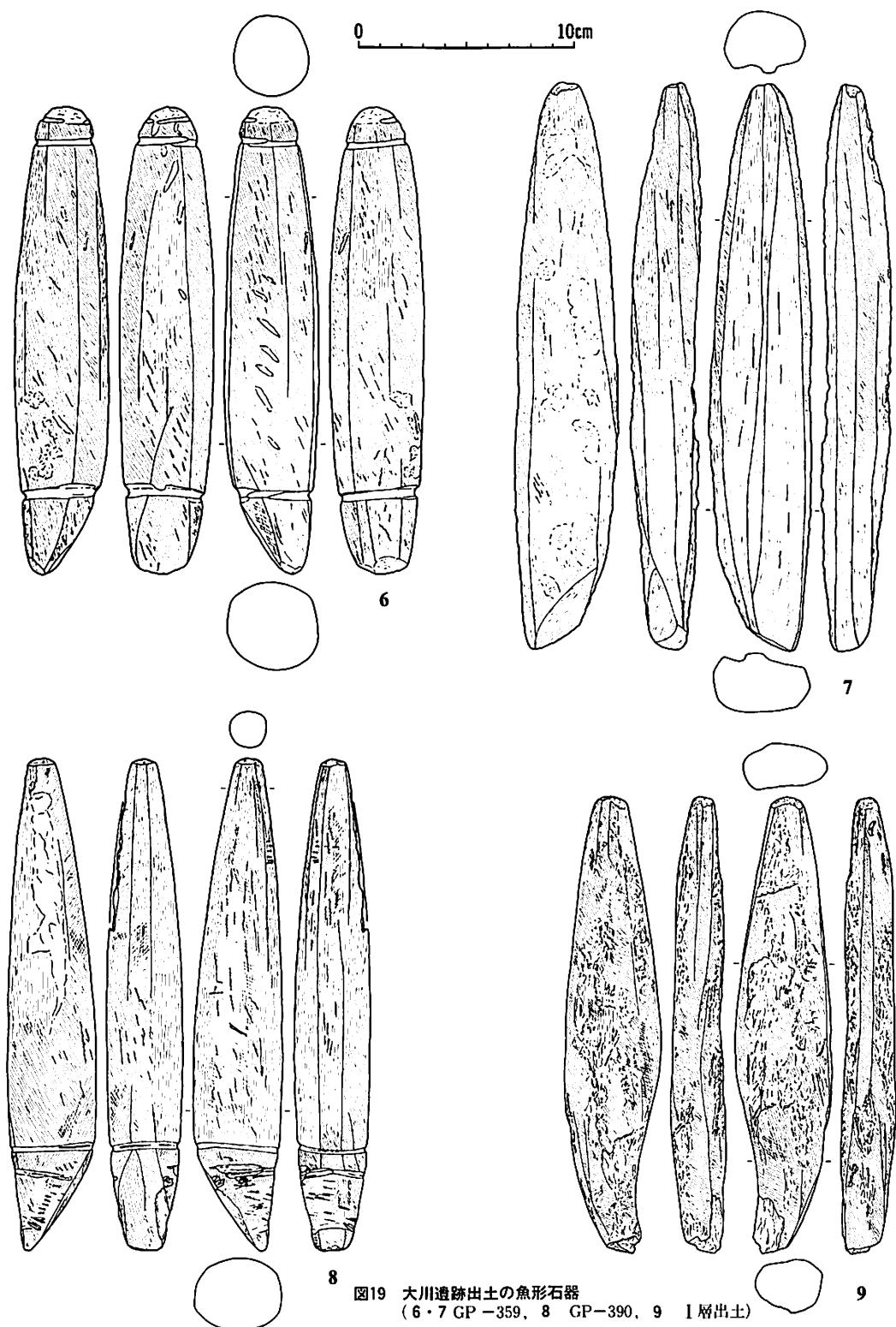


図19 大川遺跡出土の魚形石器
(6・7 GP-359, 8 GP-390, 9 1層出土)

長さ22.8cm、幅4.2cm、厚さ3.3cm、重量364g であり、石質は泥岩である。頭部と尾部の先端は細く、頭部と体部の境界付近に最大幅をもつ。頭部には、「ノブ」がつけられ、明確な幅広の平面がみられる。溝は、頭部に1本めぐり、尾部はない。頭部を全周する溝の前に、浅い溝のようなものがみられるが、これは頭部へ装着物を固定するために巻き付ける紐などを固定するための「段」であり、溝ではない。それを示すように頭部の「ノブ」と「段」のあいだにだけ、植物質の巻き付け痕がみられる。同様の頭部形態は、尾白内貝塚などに類例がみられる（図20-5）。尾部には、巻き付け痕や変色帯はみられない。資料表面には、縦位または斜位の擦痕がみられる。擦切痕は観察されない。表面の一部にベンガラの付着が認められる。

9（図19-9） 遺構外出土の完形資料である（表採）。計測値は、長さ21.2cm、幅4.4cm、厚さ2.1cm、重量310g であり、石質は泥岩である。頭部に「ノブ」はみられなく、先端が反り返る。頭部平面は明確に作出されているが、溝はまったくみられない。擦切痕もみられない。頭部には横位の擦痕が、頭部平面および体部・尾部には縦位または斜位の擦痕が観察される。尾部の先端から幅1.5~2.0cmの変色帯があり、巻き付け痕の可能性がある。尾部に巻き付け痕が存在する例は、これまでにも報告されている（石本編 1991、右代・高瀬 1994）。調整そのものは粗く形態も整っていないことから、未製品の可能性もある。

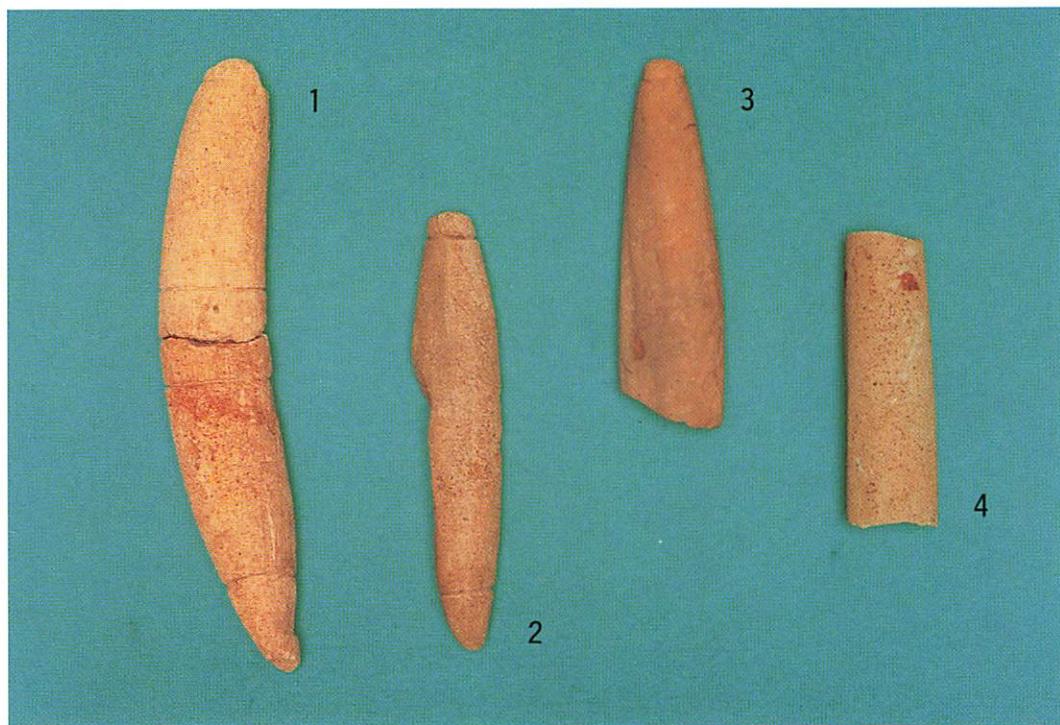


写真23 入舟遺跡出土の魚形石器



写真24 大川遺跡出土の魚形石器



◀ 入舟遺跡魚形石器出土状況
(W25Grid I層出土, 近世の整地
による搅乱層より出土)

大川遺跡魚形石器出土状況
(MO-3覆土出土, MO-3は中世の
壕状遺構である)



大川遺跡
GP-75 ▶
魚形石器出土
状況 (北側よ
り魚形石器出
土, 他に靴形
石器・完形土
器4点伴出)



▲ 大川遺跡GP-75検出状況
(126cm×110cm, 深さは概ね19cm)

大川遺跡GP-179検出状況 ▶
(東頭位とみられる。石器29
点伴出, 繩縄文期惠山式土
器を伴出)



◀ 大川遺跡GP-179
魚形石器出土状況
(右側の魚形石器
には結束あり)



大川遺跡
GP-359 ▶
魚形石器出土状況
(魚形石器2点・鐵
製品1点・他石器
66点出土)

◀ 大川遺跡
GP-359
検出状況
(縄縄文期,
惠山式土器
伴出)



大川遺跡GP-390 ▶
魚形石器出土状況
(石鎌・ナイフ・スク
レイバー・石斧伴出)

◀ 大川遺跡GP-390
検出状況 (145cm×
122cm, 深さは概ね
80cm)



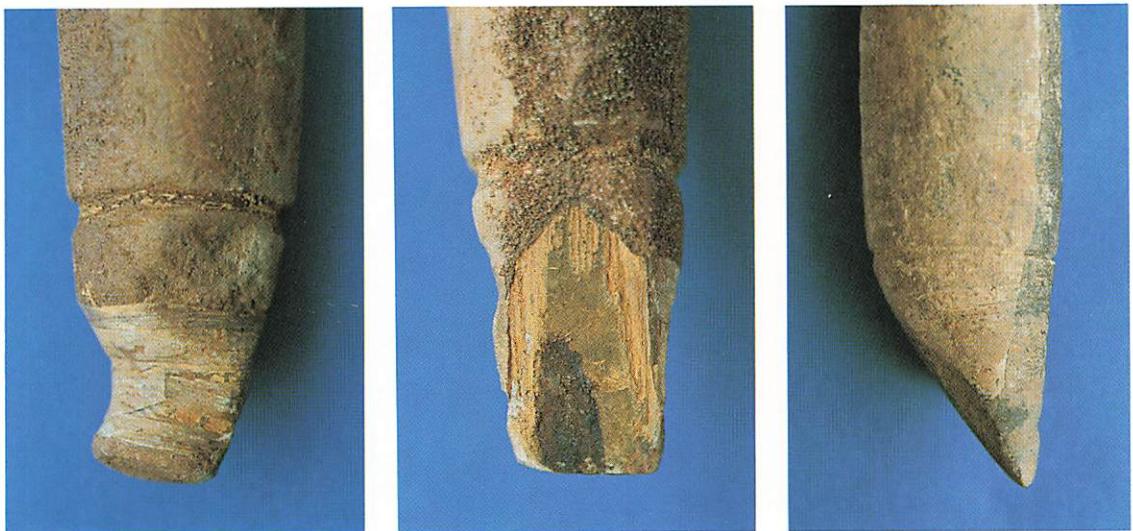
写真25 入舟遺跡と大川遺跡の魚形石器出土状況



写真26 大川遺跡 G P - 179一括出土遺物と魚形石器



写真27 大川遺跡 G P - 359一括出土遺物と魚形石器



GP-179出土の魚形石器(図18-4)

GP-179出土の魚形石器(図18-4)

GP-390出土の魚形石器(図19-8)

写真28 大川遺跡墓壙伴出魚形石器接写

[3] 入舟・大川遺跡出土資料の特徴

以上が、今年度までの発掘調査によって出土した魚形石器およびその未製品と考えられる資料である。これらの資料を他遺跡と比較するまえに、魚形石器が分布する北海道南部および中央部の状況を概観しておく。

道南部・道央部から出土した魚形石器は、破片資料も含めると150点以上にのぼる。それらは、(1)噴火湾北岸、(2)噴火湾南岸(津軽海峡地域も含む)、(3)渡島半島日本海側、(4)道央部、という地域ごとに特徴をもって分布している。それぞれの地域にみられる特徴は次のとおりである。

(1)噴火湾北岸(図20-1・2・4)

魚形石器の形態の変異の幅が広く、とくに頭部形態のバリエーションが非常に多い。特に石剣状あるいは頭部が斧状の資料も比較的多くみられ、同時に溝の種類や組み合わせもさまざままで、頭部を半環状にめぐる溝もみられる。石質は、良質の泥岩・粘板岩がもちいられることが多く、表面は入念に調整され光沢を持つものが少なくない。頭部の平面は明確に作られるが、幅が細く面積も小さい。また頭部には多方向の擦痕がのこるものが多く、縦位・斜位の擦痕がみられる体部・尾部の調整とは異なる。ただし、頭部下面に段を持つものや石剣・斧形のものは、頭部にも縦位・斜位の擦痕が残る例が多い。頭部・体部の厚さは幅に比べてうすく、尾部の溝から尾部の先端までが比較的長い。例として室蘭市絵鞆・祝津遺跡出土資料を図示する。

(2)噴火湾南岸(図20-3・5・6)

噴火湾北岸とおなじように、頭部形態のバリエーションに富む。しかし、石剣状・斧状の頭部は少ない。逆に、頭部全体を削って突出部をつくりだす例は増える。溝の種類も多く、頭部を半

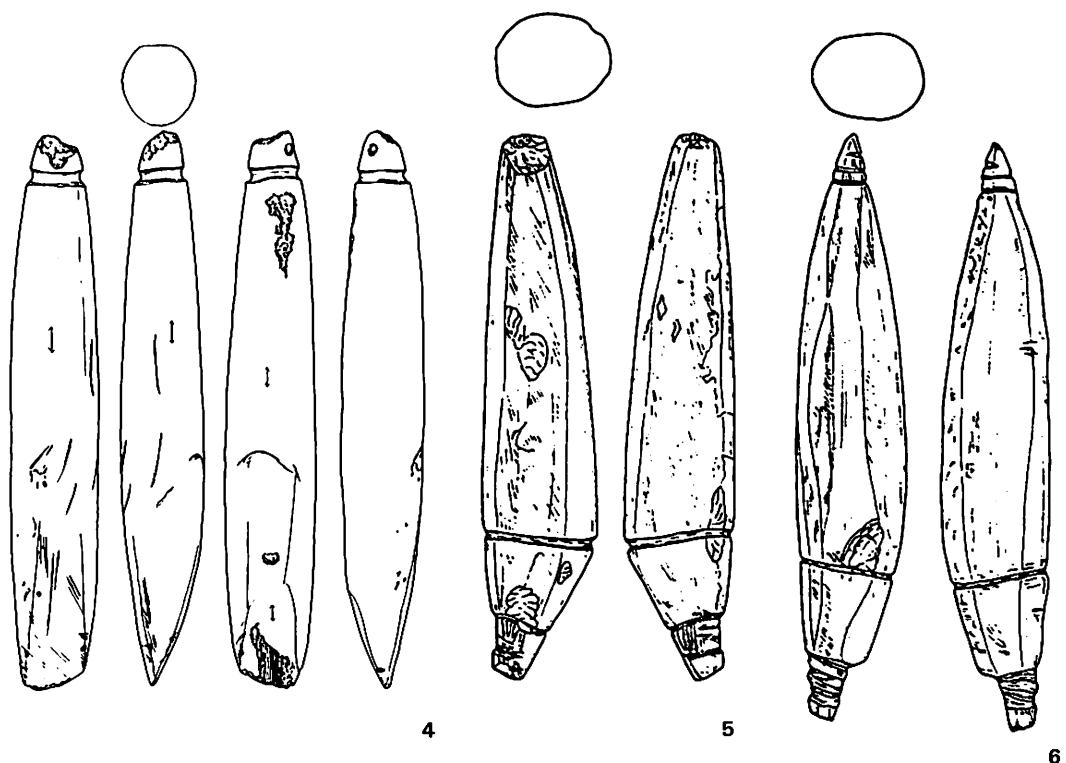
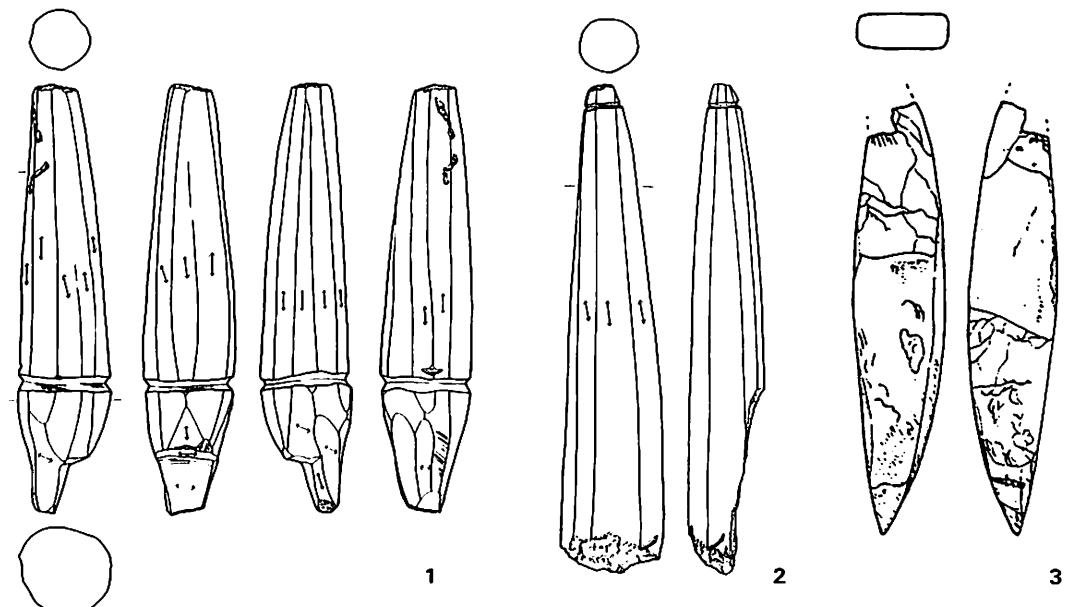


図20 噴火湾沿岸出土の魚形石器
(1・4 室湖絵柄出土、2 室蘭祝津出土、3・5・6 森町尾白内貝塚出土)

0 10cm

環状にめぐる溝も存在する。その他、石質・色調・形態・頭部平面・製作手法などは噴火湾北岸と共通する。例として森町尾白内貝塚遺跡出土資料を図示する。

(3) 渡島半島日本海側 (図21-1~5)

形態は噴火湾沿岸に比してシンプルである。頭部形態は単純に反り返るのが大半を占め、噴火湾沿岸でみられる石剣状・斧状の形態はみられない。一般に溝の本数は少なく、頭部を半環状にめぐる溝は少ないながらも存在する。厚さは幅よりもうすいものが多く、頭部平面は幅が広いものと狭いものの両方がある。また尾部の溝は、尾部の端に近い位置に刻まれ、尾部の溝から尾部の先端までが短い例が多い。その他石質・色調・製作手法に関しては、噴火湾沿岸と大きな違いはない。例として瀬棚町瀬棚南川遺跡出土資料を図示する。

(4) 道央部 (図21-6・7)

道央部の魚形石器は、石狩町紅葉山33号遺跡・札幌市N295遺跡・江別市旧豊平河畔遺跡でそれぞれ1点ずつ検出されているのみである。これらの特徴点は、砂岩で作られていることであり、頭部が残存する紅葉山33号と旧豊平河畔の資料では、頭部形態は明確な「ノブ」がつかずに反り返る形態である。また頭部平面の幅は非常に広い。製作手法、とくに頭部の作りだしは、道南部で一般的な多方向の擦痕がみられずに、体部・尾部と同様の単調な擦痕がみられる。例として江別市旧豊平河畔遺跡・石狩町紅葉山33号遺跡出土資料を図示する。

現在の資料から指摘できるこのように地域的な特徴をふまえ、入舟・大川遺跡出土資料について検討する。両遺跡の資料は、おおきくみて二群に区分することが可能である。ひとつは、砂岩・泥岩製で表面に入念な調整がみられるものである。あわせて頭部と体部の境界に最大幅を持ち、頭部・尾部の先端が細いという特徴を持つ。これらを1類とする(図17-3, 図18・19-3~8)。もうひとつは、砂岩・砂質凝灰岩製で、体部が太く断面が円形に近いものである。頭部・尾部の厚さと幅があり、溝が太く浅い。これを2類とする(図17-1・2・4, 図18・19-1・2・9)。さらに両群に共通する特徴として、次のような点が指摘できる。

- 1) 頭部形態は、複雑なものは少ない
- 2) 頭部平面の幅がひろい
- 3) 溝の本数と組み合わせのバリエーションが少ない
- 4) 尾部の溝からの先端までが短い(尾部の溝が、先端に近い位置に刻まれる)
- 5) 頭部に縦位・斜位の単調な擦痕がみられ、多方向の擦痕はみられない

このような特徴を持つ入舟・大川遺跡出土資料を、先述したような他の遺跡にみられる特徴とつきあわせると、噴火湾沿岸とは大きく異なっていることが理解できる。石質や形態・製作手法

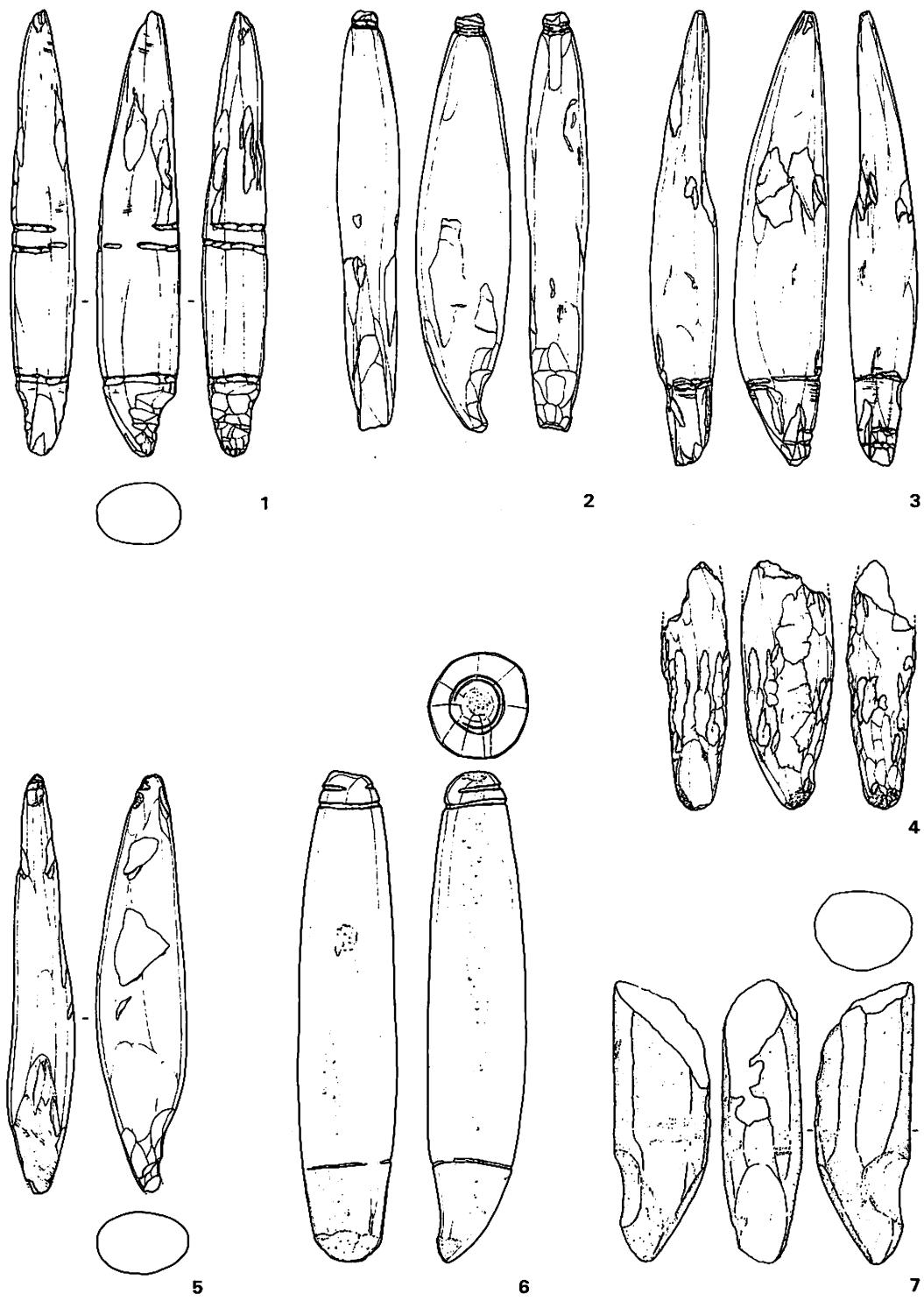


図21 渡島半島日本海岸・道央部出土の魚形石器
(1～5 濑棚南川出土, 6 江別市旧豊平河畔出土, 7 石狩町紅葉山33号出土)

0 10cm

などのあらゆる面で相違がみられるからである。

1類と共通性を示すのは、渡島半島の日本海側である。瀬棚南川遺跡出土資料と比較すると、頭部と体部の境界付近に最大幅があり、頭部・尾部の先端が非常に細くなる点が共通する。さらに泥岩が用いられる場合が多い、反り返るだけの比較的単純な頭部形態が多い、頭部平面の幅が広いものが多い、尾部の溝が刻まれる位置、溝の種類・本数がすくなく単純な組み合わせをなす、などの点で類似点をみいだせる。

2類にもっとも近いありかたを示すのは道央部である。道央の資料が不足しているため踏み込んだ議論は困難であるが、砂岩が多い点、「ノブ」をもたず直線的あるいは反り返るだけの単純な頭部形態などにおいて共通性を見いだすことはできる。

人舟・大川遺跡出土魚形石器のもっとも大きな特徴は、渡島半島日本海側と道央部にみられる特徴を持つ1類と2類が混在している点にある。

おわりに

人舟・大川遺跡出土の魚形石器を紹介し、石質・形態・製作手法からみたそれらの特徴について述べた。これにくわえて出土状況における大きな特徴としては、大川遺跡G P-179およびG P-359出土の魚形石器に鉄製品が共伴している点をあげることができる。鉄製品の鏽化がはげしく原形を推定することが困難な状況ではあるが、とくにG P-359では魚形石器の下部よりティア・ドロップ状の鉄製品が出土しており、魚形石器との関連（とくに鉄製の装着物の存否）が興味深い。今後、それが明確なかたちで理解できる資料の出土が期待される。

引用文献

藤田 登編 1993『尾白内2』森町教育委員会

石橋孝夫・清水雅男編 1984『紅葉山33号遺跡』石狩町教育委員会

石本省三編 1991『長万川遺跡』七飯町教育委員会

加藤邦雄ほか 1983『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会

宮 宏明 1993「墓壙伴出の魚形石器と鉄製品」『南北海道考古学情報』4

大場利夫編 1962『室蘭遺跡』室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館

高橋正勝編 1985『旧豊平河畔』江別市教育委員会

高橋克範 1996「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60

右代啓視・高橋克範 1994「魚形石器—北海道開拓記念館所蔵資料—」『北海道開拓記念館調査報告』33

c 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版

はじめに

本稿で紹介する手形付土版と足形付土版は、入舟遺跡の1995年度発掘調査区の西端（図2）にあたるT35・T37・U36・V36各Grid I層から散在して出土したものである。I層は近世における整地の際の搅乱層とみられる。両土版の時期は周辺から多数出土した余市式土器の盛行期とみられる。この貴重な出土例について紹介し、あわせて若干の考察を加えてみたい。

入舟遺跡出土の手形付土版

入舟遺跡から出土した手形付土版のうち、右手（写真29、図22-2）の土版はV36 Grid I層からの出土で、長さ14.0cm、幅8.8cm、厚さ1.5cm、重さ(157)gで、人差し指の先端を若干欠いている。色調は、にぶい褐色で版面に黒褐色の部分が多少ある。胎土には、長石・石英が含まれている。手を土版に押し付けた後に調整した痕跡があり、それが顕著なのは小指の部分であるが、他の4本の指とのバランスを考えると実際の小指の長さよりも非常に短くなっている。これは、中指や薬指先端に盛り上がり部分があることから、小指の先端部分を棒状工具の側面で、縁を調整した結果と考えられる。人差し指については、残存部分に調整痕は無く、親指も押し付けたままの状態と見られ、指の形がはっきりと付いている。掌の中央下部に貫通孔があり、版面から刺突具で回転するようにして広げたようである。

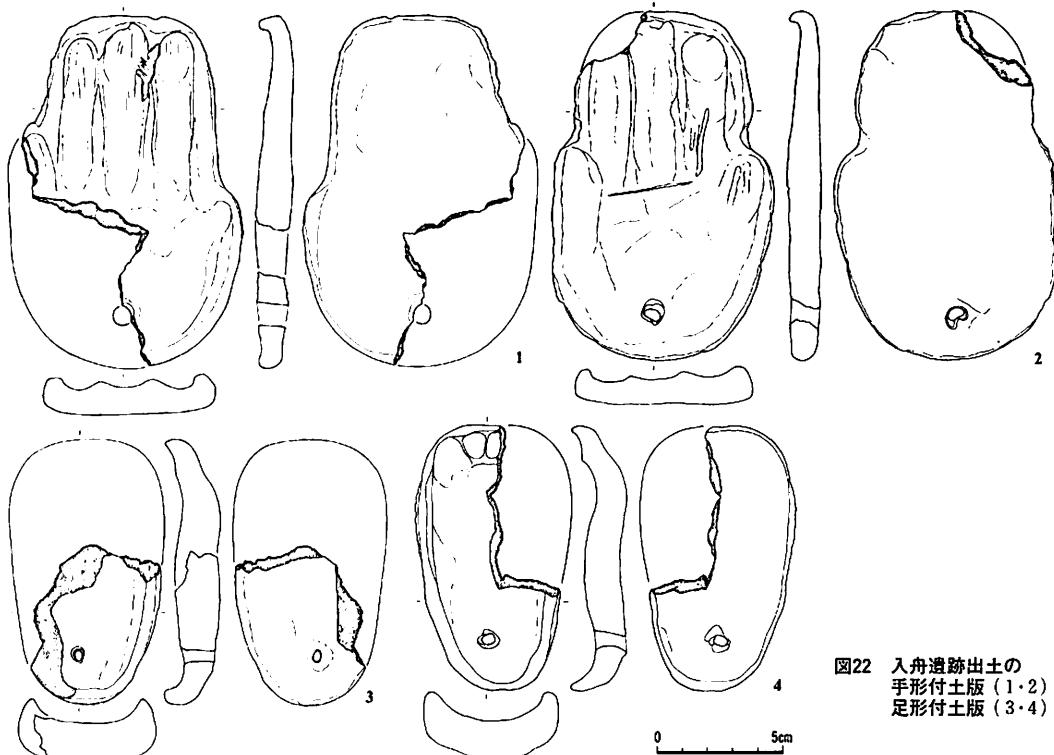


図22 入舟遺跡出土の
手形付土版（1・2）
足形付土版（3・4）

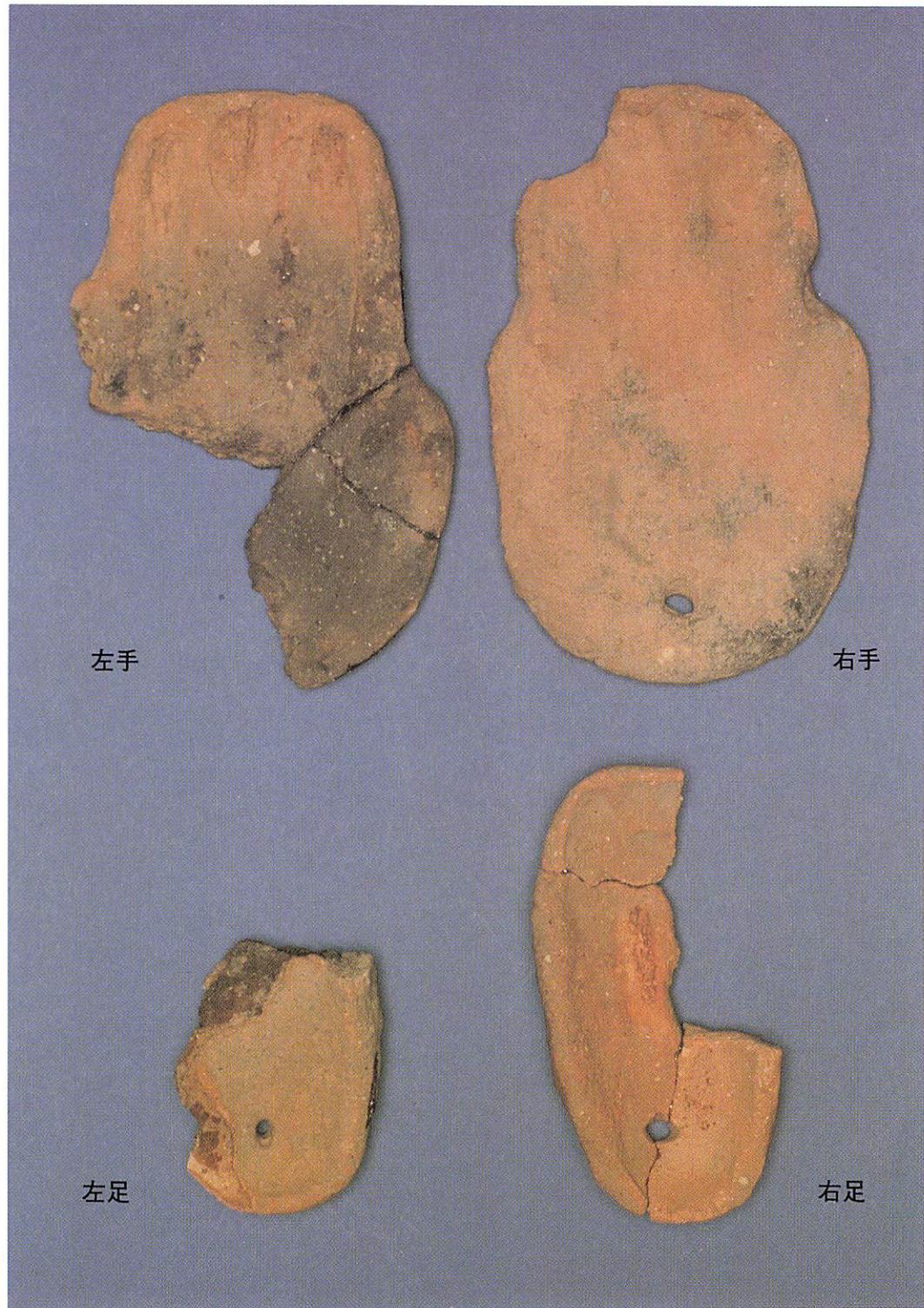


写真29 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版

左手（写真29、図22-1）の土版はT37Grid I層からの出土で、長さ（13.7）cm、幅（8.4）cm、厚さ1.6cm、重さ（133）gで、小指の中程から掌の半分程度を欠いている。色調は、にぶい黄褐色で版面に黒褐色の部分が広がり、伏せた形での焼成の結果とみられる。胎土にも、右手の土版と同じように長石・石英が含まれている。人差し指・中指・薬指の指先に、棒状工具で何回か調整した痕跡があり、これも右手の土版と同じく手を土版に押し付けた後に調整したもので、実際の指の長さより若干長くなっているものと考えられる。親指と小指は、調整痕は無く、押し付けたままの状態に近いとみられる。右手の土版とほぼ同じ位置に貫通孔があり、残存部分を観察すると、こちらも版面から刺突具で、回転するようにして広げたようである。

この2点の手形付土版を比較してみると、大きさや形状などが近似している。8歳～10歳位の男の子の両手の土版とみられ、同時期・同一人物のものであるとみてよいだろう。

入舟遺跡出土の足形付土版

入舟遺跡から出土した足形付土版のうち、右足（写真29、図22-4）の土版はU36Grid I層からの出土で、長さ10.5cm、幅（5.4）cm、厚さ（1.5）cm、重さ（72）gで、薬指と小指の部分から足形の中程まで1/4強を欠いている。色調は、版面がにぶい褐色、裏面がにぶい黄褐色である。胎土には、長石・石英が若干含まれている。土版に足を押し付けたままの状態であり、調整痕はみられない。踵の中央部に貫通孔があり、版面から刺突具で孔を広げている。

左足（写真29、図22-3）の土版はT35Grid J層からの出土で、長さ（6.3）cm、幅（4.7）cm、厚さ（2.0）cm、重さ（51）gで、踵付近（足形全体の3/8程度）のみの出土である。色調は、版面・裏面ともににぶい黄褐色である。胎土にも、右足の土版と同じように長石・石英が若干含まれている。こちらも土版に足を押し付けたままの状態であり、調整痕はみられない。右足の土版とほぼ同じ位置に貫通孔があり、版面から刺突具で孔を広げている。

この2点の足形付土版についても、前述の2点の手形付土版と同じように、大きさや形状が非常に似ている。これらは1歳～2歳の男の子の両足の土版とみられ、同時期・同一人物のものであるとみてよいだろう。

手形付土版・足形付土版の製作目的・用途をめぐる疑問

全国的規模で発掘調査が推進されている今日、少ないとはいえ当該資料も着実に増加している。足形付土版の類例が非常に少なかった時点（大型の当該資料が出土していないかった時点）での製作目的や用途については、立ち祝いを中心とする慶事・祭時等の際に用いられた。つまり、縄文時代のひとつの通過儀礼を示す具体的な遺物であると解することで事足りた。

しかし、その後、美々7遺跡他で大型の足形付土版が出土したことや、手形付土版の類例が増加してきたこと等を加味すれば、当該資料を限定して考えることが困難になってきたといえよう。出生～死に至る、さまざまな局面での通過儀礼を考慮しなければならないだけでなく、成功・失敗・病気・魔除けその他にも、さまざまな可能性がある。

特に当該資料を考える際に重要なことは、土偶などのように数千点いや数万点も出土している

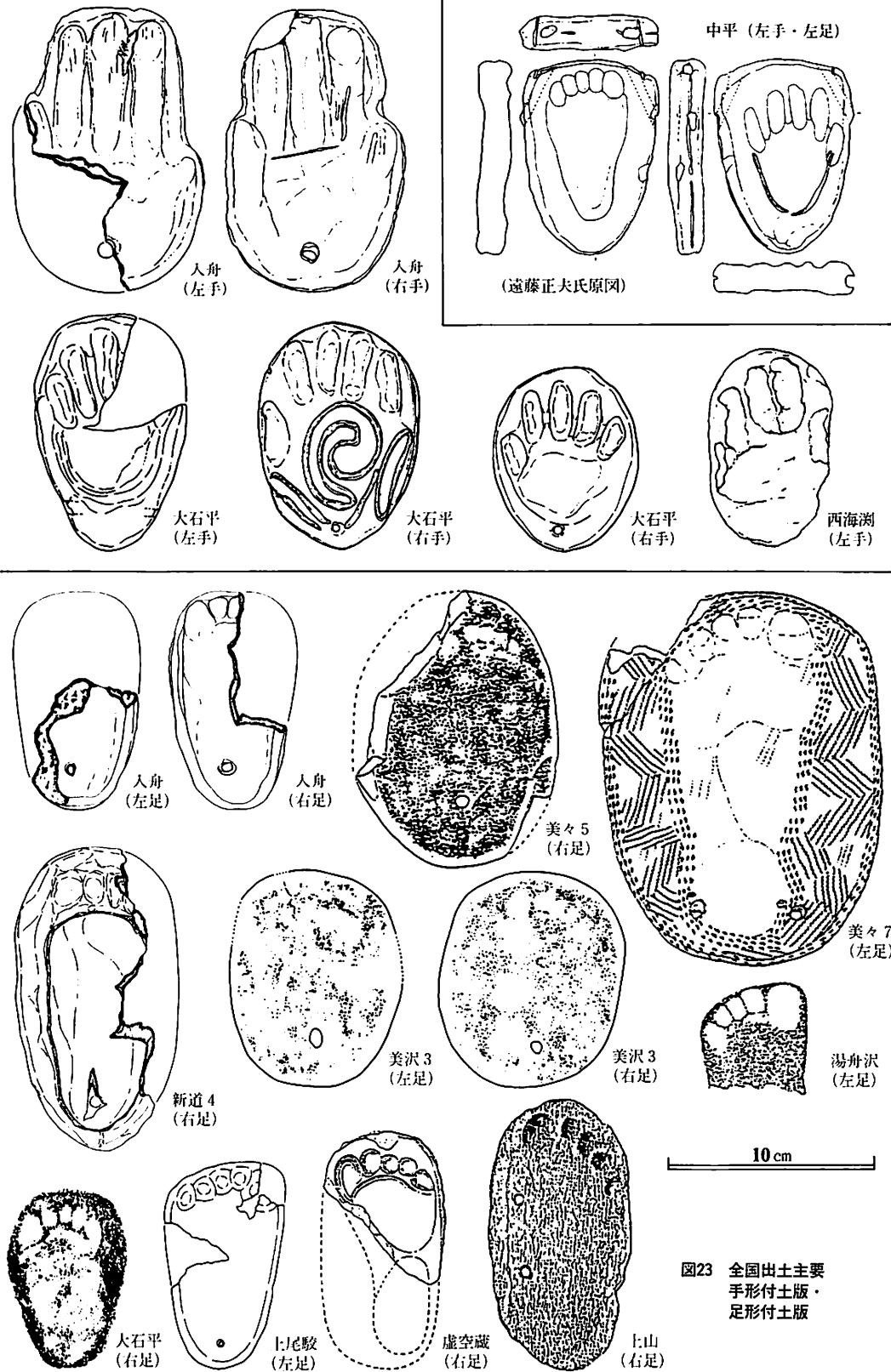
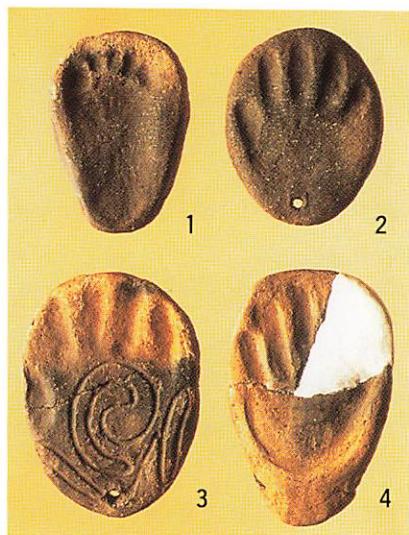


図23 全国出土主要
手形付土版・
足形付土版



手形付土版（右手、表）



手形付土版（右手、裏）



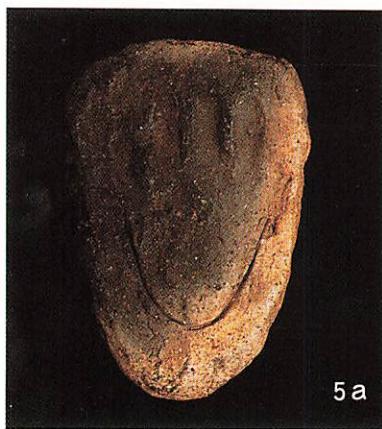
手形付土版（右手）



手形付土版（左手）



足形付土版（右足）



手形付土版（左手、表）



足形付土版（右足、裏）

写真30 青森県出土の
手形付土版と足形付土版

1~4 大石平遺跡出土
(写真提供 青森県埋蔵文化財調査センター)

5 中平遺跡出土
(写真提供 八戸市博物館)

ものではなく、下表のように両方あわせても20点程しか類例がないという点である。縄文土器や土偶を製作することからみれば、わずかな粘土でかつ短時間で製作可能であるにもかかわらず何故にこれほど珍品なのであろうか。誰もが残したものではなく、非常に稀にしか残されなかつるものであるということになろう。

次にさまざまな可能性について考えさせてくれる主要な当該資料について検討したい。中平遺跡の表裏に左手・左足を付した土版は、左右に傾斜する2孔の貫通孔を有しており、幼児に背負わせた可能性を彷彿とさせる唯一の土版である。中平遺跡では、いずれ右手・右足を表裏に付した土版が出土するかもしれない。西海渕遺跡出土の左手の土版裏面には、大人の手形（左手とみられる）が斜めに付されており、子供の手形を付すために押された跡であると考えられるものである。上山遺跡出土の足形付土版にも土踏まずにあたる部分に2孔あり、懸垂して吊り下げるという点で他の当該資料とは異なっている。

地域的には東北・北海道に限定されている現状であるが、時期的にはほぼ縄文時代の全期間に跨がっている。縄文早期あるいは前期の当該資料が今後とも東北地方で出土しないということになれば、北海道の縄文文化の中から成立したと解釈されることになろう。

入舟遺跡の本報告での再考を約して、ひとまず擱筆する。

(宮 宏明・齊藤麻紀)

手形付土版の類例

| 都道府県 | 市町村 | 遺跡名 | 時期 | 出土点数 | 備考 |
|------|------|-------|------|------|-----------------------------|
| 北海道 | 余市町 | 入舟遺跡 | 縄文後期 | 2点 | 右手・左手、日本最大、同一人物とみられる両手の出土は初 |
| 青森県 | 六ヶ所村 | 大石平遺跡 | 縄文後期 | 3点 | 右手・右手・左手、1995年重要文化財指定 |
| 山形県 | 村山市 | 西海渕遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 左手、裏面に大人のものとみられる手形あり |

手形・足形付土版の類例

| | | | | | |
|-----|-----|------|-------|----|-----------------|
| 青森県 | 三戸町 | 中平遺跡 | 縄文後期？ | 1点 | 表裏に左手と左足あり、2孔あり |
|-----|-----|------|-------|----|-----------------|

足形付土版の類例

| | | | | | |
|-----|------|----------|-------|----|-----------------|
| 北海道 | 余市町 | 入舟遺跡 | 縄文後期 | 2点 | 右足・左足、両足とも欠損 |
| 北海道 | 千歳市 | 美々5遺跡 | 縄文前期？ | 2点 | 右足・左足、左足は墓壙伴出例 |
| 北海道 | 千歳市 | 美々7遺跡 | 縄文早期 | 2点 | 左足・?足、2点とも墓壙伴出例 |
| 北海道 | 苫小牧市 | 美沢3遺跡 | 縄文早期 | 2点 | 右足・左足、2点とも墓壙伴出例 |
| 北海道 | 木古内町 | 新道4遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 右足、土踏まず側を欠損 |
| 青森県 | 六ヶ所村 | 大石平遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 右足、1995年重要文化財指定 |
| 青森県 | 六ヶ所村 | 上尾駒(2)遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 左足、2ヶ所を欠損 |
| 青森県 | 名川町 | 虚空蔵遺跡 | 縄文晚期 | 1点 | 右足、土踏まずから踵部分を欠損 |
| 秋田県 | 鹿角市 | 大湯環状列石 | 縄文後期 | 1点 | 右足、指先部分を欠損 |
| 岩手県 | 滝沢村 | 湯舟沢遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 左足、指側のみ残存 |
| 新潟県 | 山北町 | 上山遺跡 | 縄文後期 | 1点 | 右足、1971年重要文化財指定 |

文 献

- 青森県教育委員会 1978 「三内澤部遺跡発掘調査報告書」
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1992 「青い森の縄文人とその社会－縄文時代中期・後期編」
図説ふるさと青森の歴史シリーズ②
- 天羽利夫 1965 「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』第37巻第4号
- 岩手県立博物館編 1993 「じょうもん発信」第8回国民文化祭記念 第37回企画展図録
- 上原甲子郎 1961a 「7. 新潟県上山(うえやま)遺跡の調査」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』
日本考古学協会
- 上原甲子郎 1961b 「資料紹介 卷貝形土製品(口絵解説)－新潟県・上山遺跡出土－」『考古学雑誌』第47巻第3号
日本考古学会
- 遠藤香澄ほか 1989 「美沢川流域の遺跡群 Ⅹ」 北海道埋蔵文化財センター
- 遠藤正夫 1986 「青森県大石平(1)遺跡出土の「手形付土版」・「足形付土版」」『考古学雑誌』第71巻第4号
日本考古学会
- 遠藤正夫 1987 「手形付土版・足形付土版」「大石平遺跡 Ⅲ－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－」
(第1分冊) 青森県埋蔵文化財調査報告書第103集 青森県教育委員会
- 岡田淳子ほか 1977 「日本子どもの歴史 1 一夜明けの子どもー」 第一法規出版
- 鹿角市教育委員会編 1995 「特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書」(1) 鹿角市文化財調査資料52
- 熊谷常正 1986 「滝沢村・湯舟沢遺跡の足形付土製品について」『湯舟沢遺跡』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人 1992 「8. 山形県村山市西海瀬遺跡」『日本考古学年報』43 日本考古学協会
- 苦小牧市博物館編 1995 「大昔の苦小牧－よみがえる古代人のくらし－」 第33回特別展
苦小牧市博物館・苦小牧市埋蔵文化財調査センター開館10周年記念
- 長沼 孝 1993 「土版と土面から推理する一足形付土版とママチ土面の世界ー」苦小牧市博物館 第25回文化財講座
- 名川町教育委員会編 1978 「虚空蔵遺跡発掘調査報告書」
- 八戸市博物館編 1990 「特別展 縄文人の世界ー縄文後期の生活と文化ー」
- 春成秀爾 1985 「子どもの考古学(第13回歴博講演会)」『歴博』第10号 国立歴史民俗博物館
- 平沢弥一郎 1981 「直立歩行を支える左足」『サイエンス』1981年6月号
- 平沢弥一郎 1984a 「足跡が語る古代人」『埋文あおもり』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 平沢弥一郎 1984b 「保健体育－新しい人体論－」放送教育開発センター
- 平沢弥一郎 1988 「足形付土版について」『上尾駆(2)遺跡Ⅱ』青森県教育委員会
- 平沢弥一郎・臼井永男 1993 「幼児の足跡土版の発見」『保健体育－スタシオロジー』放送大学教育振興会
- 北海道教育委員会編 1979 「美沢川流域の遺跡群 Ⅲ」 北海道文化財保護協会
- 北海道埋蔵文化財センター編 1987 「木古内町 建川2・新道4遺跡」
- 北海道埋蔵文化財センター編 1993 「美沢川流域の遺跡群 XVI」
- 馬目順一 1967 「人手を表現した一土器片」『月刊考古学ジャーナル』No.13 1967年10月号 ニュー・サイエンス社
- 水野正好 1979 「足と足跡の語るもの－その印象と造形の考古学－」『月刊文化財』1979年1月号 第一法規出版
- 皆川洋一ほか 1992 「美々7遺跡」『美沢川流域の遺跡群 XV』(第1分冊) 北海道埋蔵文化財センター
- 森山泰太郎 1965 「津軽民俗」郷土を科学する第1集 陸奥新報社
- 余市町教育委員会 1995 「余市町の埋蔵文化財」No.24 「入舟遺跡 手形付土版」

d 入舟遺跡出土の植物遺体について

ここで扱う植物遺体は、フローテーション法に基づき、採取した土壤を天日により乾燥、内部に1.00mm、外部に1.40mm・0.425mmのメッシュを使用したフローテーションマシンにより土壤を搅拌し抽出されたものと、1.00mmのメッシュを使用した土壤水洗により処理し抽出されたものである。サンプリングの場所ごとの使い分けは下表のとおりである。フローテーションにより処理した土壤の量は約21.5ℓ、土壤水洗により処理した土壤の量はコンテナ数にして約440箱にのぼった。

(米谷登志子・小川康和)

| 遺構名 | サンプリングの位置 | 処理方法 | 種子名 | 備考 |
|-------|-----------|----------|--|--------|
| HS-1 | 石組炉下 | フローテーション | コブシ 1、ヤマゴボウ 13、ウルシ属 1、サルナシ 2、エゾニワトコ 4 タデ科 1、タラノキ 3、ミズキ 1、キビ 1、コメ 4 | |
| FP-1 | 焼土範囲 | フローテーション | アカザ科 1、イネ科 1 | |
| GP-1 | | 土壤水洗 | オニグルミ(片) 0.5g、ヤマブドウ 5、ヤマブドウ(片) 3、キハダ 2、コブシ 1 ヤマゴボウ 5、アカザ科 6、キビ 4、ヒエ 3 | |
| UP-1 | | 土壤水洗 | キハダ 1、オニグルミ(片) 0.2g | |
| UP-3 | | 土壤水洗 | コメ 1、オニグルミ(片) 0.2g | |
| UP-7 | | 土壤水洗 | オニグルミ(片) 0.2g | |
| UP-8 | | 土壤水洗 | キビ 1 | |
| SM-1 | | 土壤水洗 | ヤマブドウ 19、ヤマブドウ(片) 20、ヤマゴボウ 35、ヤマゴボウ(片) 5、アサ 1 キハダ 2、エゾニワトコ 1 | |
| SM-2 | 西 | 土壤水洗 | オニグルミ、コブシ、ホオノキ、アサ、ミズキ、キハダ、ヤマゴボウ ハイイヌガヤ、エゾニワトコ、マメ科等 | 不明種子あり |
| | ベルト | 土壤水洗 | オニグルミ、キハダ属、エゾニワトコ、ヤマブドウ、ヤマゴボウ、コブシ等 | 不明種子あり |
| | 東 | 土壤水洗 | ヤマブドウ、ヤマゴボウ、キハダ、オニグルミ、コブシ、アサ、エゾニワトコ | |
| T20便所 | | 土壤水洗 | ブドウ属 20211、ブドウ属(片) 6370、ナス属 845、サルナシ 1640 サルナシ(片) 59、シソ科 18、アカザ科 368、エゾニワトコ 100、ヤマゴボウ 29 ツユクサ科 159、ツユクサ科(片) 33、タラノキ 12、キチゴ属 27、タデ科 177 タデ科(片) 3、カタバミ属 2、ヨモギ属 4、ウルシ属 1、エノコログサ属 1 | |
| T27便所 | | 土壤水洗 | ブドウ属 16314、ウリ属 2458、ウリ属(片) 158、スイカ 102、スイカ(片) 23 タデ科 243、シソ科 19307、マメ科 8、ナス属 2277 | |
| Grid | サンプリングの位置 | 処理方法 | 種子名 | 備考 |
| W 23 | II | 土壤水洗 | ブドウ属、エゾニワトコ、ヤマゴボウ等 | |
| W 24 | II | | オニグルミ(片) 0.1g、エゾニワトコ 258、サルナシ 36、アカザ科 3132 アカザ科(片) 1130、ヤマゴボウ 1973、ヤマゴボウ(片) 307、タラノキ 32 コブシ属(片) 4、マメ科 1、キハダ 3、キハダ(片) 2、アサ 1、タデ科 7 ナデシコ科 1、ブドウ属 2、ブドウ属(片) 4、キク科 1 | |

表7 1995年度入舟遺跡出土植物遺体一覧

※遺物集計表には含まれておらず(2/29現在の数値)



1) 地下式遺構検出状況 (T 35Grid)



2) 地下式遺構検出状況 (T 35Grid)



3) 地下式遺構検出状況 (T 31Grid)



4) 地下式遺構検出状況 (U 37Grid)



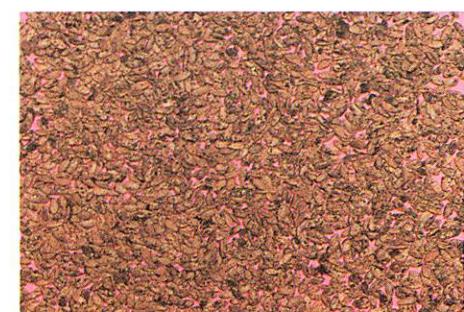
5) 地下式遺構検出状況 (T 20Grid)



6) 地下式遺構検出状況 (T 27Grid)



7) T 27Grid地下式遺構出土のブドウ属の遺体 (16,314粒出土)



8) T 27Grid地下式遺構出土のウリ科の遺体 (2,458粒出土)

写真31 入舟遺跡検出の地下式遺構と植物遺体

e 入舟遺跡出土の木製品について

入舟遺跡は、前年度までの大川遺跡とは様相が異なり、木製品が数多く出土した。木製品の発掘・保存処理に関しては経験が少ないこともあり、不手際が多く、次年度以降、改善していかねばならない点が課題として残された。

現場では、乾燥による収縮・変形を防ぐため、水を含ませた不織布を遺物の上にかぶせ、スプレーによる水の噴霧を行った。実測・取り上げ後は、水洗を行い、ポリシーラーによる脱気フィルムパックを施した。長さ・幅・厚さ・重量等のサイズを記入したカードを同封し、グリッド・遺構名・遺物番号等はパックした外側に直接表記した。それをグリッド・遺構別に分けて、スポンジを敷き詰めたコンテナに収納し、大型のものについては専用の木製水槽に水漬けにした。また、常温では冬期に凍結の恐れがあるため、部屋の一角をビニールで覆い、サーモスタッフ装備のオイルヒーターで温度管理を行った。漆器・漆片に関しても同様であるが、取り上げ後はエタノールに漬け、タッパーに収納している。木質部の残存していない漆片については現在、和紙に貼り付ける方法を検討中である。

今年度出土した木製品は総数 159点、漆器・漆片は25点を数え、その中には墨書や彫刻等が施されたものもある。これらの遺物の今後の保存処理について、当所で保存処理を施すか、あるいは専門機関に外注すべきか等、検討した結果、木製品に関しては釜石文化財保存処理センターに依頼することにしたい。

(小川)

| 遺構名 | No. | 木質部 | 漆の色調 | 備考 |
|-----------|-----|-----|------|-----------------------|
| S M - 2 | 625 | 有 | 黒・赤褐 | 半円フタ状、木質部脆弱、中央に取っ手の跡？ |
| S M - 2 | 775 | 有 | 黒・赤褐 | 半円フタ状？、木質部脆弱、細片多し |
| S M - 2 西 | | 無 | 黒・金 | 細片×2、魚骨選別より、紋様あり |

| Grid | 層位 | No. | 木質部 | 漆の色調 | 備考 |
|------|----|------|-----|-----------|-------------------------------------|
| T 37 | I | 3 回 | 有 | 黒・赤褐・金 | 板状、暗？、紋様あり、細片多し |
| U 36 | I | 2526 | 有 | 黒・赤 | 椀（ほぼ完形）、径10.5cm、高4.5cm |
| U 36 | I | 7555 | 有 | 黒・赤褐 | 椀（底部）、細片多し |
| W 28 | I | 909 | 無 | 黒・赤褐 | 漆膜（大）+細片 |
| W 28 | I | 910 | 有 | 赤褐・赤褐 | 板状、木質部脆弱、細片多し |
| W 28 | I | 911 | 無 | 黒・褐・赤褐・赤褐 | 漆膜（大）+細片、紋様あり |
| W 28 | I | 912 | 僅少 | 黒・赤褐 | 漆膜（大）+細片、紋様あり？ |
| V 20 | II | 1 | 無 | 黒・赤褐 | 細片のみ |
| V 23 | II | | 無 | 黒・赤褐 | 椀？、漆膜（大）+細片 |
| V 27 | II | 1 | 有 | 黒・赤褐 | 木質部厚い |
| W 20 | II | 34 | 無 | 黒・赤褐 | 細片のみ |
| W 22 | II | 4 | 有 | 黒 | 椀（底部） |
| W 22 | II | 5 | 有 | 黒・赤褐 | 木質部湾曲 |
| W 23 | II | 15 | 有 | 黒・赤褐 | 椀（底部） |
| W 23 | II | 16 | 僅少 | 黒・赤褐・金 | 漆膜（大）+細片、紋様あり |
| W 23 | II | 41 | 僅少 | 黒・赤褐 | 細片のみ |
| W 23 | II | 42 | 僅少 | 黒・赤褐 | 細片のみ |
| W 23 | II | 55 | 有 | 黒 | 椀（ほぼ完形）、径11.0cm、高5.0cm |
| W 24 | II | 10 | 有 | 赤褐 | 半円フタ状、縁に沿って段差、長22.0cm、幅7.5cm、厚1.0cm |
| W 25 | II | 2 | 無 | 黒 | 椀？、漆膜（大）+細片 |
| X 22 | II | 1 | 有 | 黒・赤褐 | 椀（ほぼ完形）、径10.0cm、高5.0cm |
| X 22 | II | 16 | 有 | 黒 | 椀（底部） |

表8 1995年度入舟遺跡出土漆器・漆片一覧

写真32 入舟遺跡の木製品と漆器等出土状況



1) X 22Grid II層（左は肥前酒徳利、右は漆器椀）



2) X 22Grid II層（上部の酒徳利を除去）



3) X 22Grid II層（上は漆器椀、下は板製品）



4) T 37Grid I層（植物をモチーフにしたとみられる漆器）



5) 木製品・漆器等実測風景



6) X 22Grid II層（中央は柄とみられる、右も木製品）



7) X 22Grid II層（左下は唐津の皿、他は木製品）



8) X 22Grid II層（手前は切り込みのある木製品）

| 遺構名 | No. | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|------|-----|-------|-------|-------|---------------------------|
| SM-2 | 689 | 33.0 | 10.0 | 1.5 | 半円フタ状、中央に径1.3cmの穴、裏面に釘穴×2 |
| 〃 | | 3.8 | 2.0 | 1.0 | 丸い凹み×3、動物遺体選別より |
| SM-3 | | 2.4 | 0.8 | 0.5 | 径0.4cmの穴×1、動物遺体選別より |

表9 1995年度入舟遺跡遺構出土木製品一覧

表10 1995年度入舟遺跡遺構外出土木製品一覧

| Grid | 層 | No. | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|------|----|------|----------|-------|-------|-----------------|
| | I | ① | 16.5 | 9.5 | 1.6 | フタ?、側面に釘穴×1、欠損 |
| 〃 | ② | 26.0 | 10.5 | 1.7 | | 半円フタ状、両面墨書き |
| 〃 | ③ | 61.0 | 径1.3~2.5 | | | 釣針様の形 断面橢円形 |
| W22 | II | 3 | 30.5 | 8.0 | 1.8 | 半円フタ状、側面に釘穴×2 |
| 〃 | 6 | 29.5 | 9.4 | 1.8 | | 半円フタ状、脆弱、一部欠損 |
| W23 | 〃 | 1 | 211.3 | 12.3 | 5.7 | 水槽内に保管 |
| 〃 | 6 | 98.0 | 径4.0 | | | 棒状、1ヶ所折、焦げ跡 |
| 〃 | 7 | 23.7 | 7.0 | 1.9 | | 半円フタ状、側面に釘穴×2 |
| 〃 | 10 | 77.3 | 8.5 | 6.5 | | 部分的に腐食欠損 |
| 〃 | 11 | 60.7 | 4.5 | 3.2 | | 断面三角形 |
| 〃 | 12 | 38.8 | 5.2 | 1.3 | | 2ヶ所折 |
| 〃 | 13 | 85.0 | 6.3 | 3.5 | | 脆弱、剥片×2接合困難 |
| 〃 | 14 | 33.3 | 8.5 | 1.9 | | |
| 〃 | 17 | 23.0 | 10.5 | 1.4 | | 半円フタ状 |
| 〃 | 23 | 38.0 | 4.5 | 1.0 | | |
| 〃 | 24 | 58.5 | 径2.3 | | | 棒状緩やかに湾曲、全体に焦げ跡 |
| 〃 | 28 | 18.2 | 3.2 | 1.1 | | |
| 〃 | 29 | 34.0 | 4.5 | 2.3 | | フタ?、側面に釘穴×2 |
| 〃 | 40 | 15.0 | 4.0 | 0.5 | | |
| 〃 | 43 | 28.2 | 2.8 | 2.0 | | 棒状、断面橢円形 |
| 〃 | 44 | 26.4 | 17.3 | 3.6 | | |
| 〃 | 45 | 24.4 | 11.7 | 1.0 | | 板状、木目に沿って半割 |
| 〃 | 46 | 79.0 | 15.0 | 1.3 | | 板状、数ヶ所に割れ目 |
| 〃 | 47 | 59.5 | 径4.0 | | | 棒状 |
| 〃 | 48 | 35.0 | 4.0 | 1.0 | | 鉄釘付き |
| 〃 | 49 | 15.0 | 1.1 | 0.5 | | |
| 〃 | 50 | 40.5 | 10.5 | 3.0 | | 脆弱 |
| 〃 | 51 | 57.5 | 6.4 | 4.5 | | 断面三角形、うち一面に焦げ跡 |
| 〃 | 52 | 37.0 | 4.4 | 1.1 | | 鉄釘付き |
| 〃 | 53 | 24.0 | 11.0 | 1.5 | | 半円フタ状、半削木釘により結合 |
| 〃 | 54 | 91.0 | 径1.3 | | | 棒状、1ヶ所折 |
| 〃 | 56 | 39.5 | 10.6 | 2.0 | | |
| 〃 | 57 | 33.0 | 15.5 | 2.2 | | 半円フタ状、側面に釘穴×2 |
| 〃 | 58 | 37.7 | 3.0 | 2.2 | | 棒状、1ヶ所折 |
| 〃 | 59 | 25.3 | 6.4 | 0.7 | | 全体に歪み |

| Grid | 層 | No. | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|------|----|-------|----------|-------|-------|-------------------------|
| W23 | II | 60 | 25.5 | 6.0 | 2.3 | 半円フタ状、側面に釘穴×2 |
| 〃 | 61 | 53.4 | 4.7 | 0.9 | | 1ヶ所折 |
| 〃 | 62 | 15.7 | 6.5 | 1.5 | | 脆弱、1ヶ所折 |
| 〃 | 63 | 25.7 | 2.2 | 1.2 | | |
| 〃 | 64 | 85.0 | 8.0 | 2.6 | | 脆弱、剥片×2接合困難 |
| 〃 | 65 | 16.0 | 4.5 | 0.2 | | 木目に沿って割れ |
| 〃 | 67 | 33.7 | 9.0 | 3.0 | | シラカバ、樹皮付き、焦げ跡 |
| 〃 | 68 | 19.0 | 7.2 | 5.8 | | 断面三角形 |
| 〃 | 69 | 19.8 | 9.2 | 1.0 | | 板状、脆弱 |
| 〃 | 70 | 18.4 | 7.6 | 0.4 | | 板状 |
| 〃 | 71 | 26.7 | 2.2 | 1.7 | | 棒状 |
| 〃 | 72 | 20.8 | 3.4 | 1.7 | | |
| 〃 | 73 | 27.0 | 4.7 | 0.8 | | |
| 〃 | 74 | 14.8 | 4.0 | 2.1 | | |
| 〃 | 75 | 45.0 | 4.5 | 1.0 | | |
| 〃 | 76 | 47.4 | 7.8 | 5.3 | | 全体に焦げ跡 |
| 〃 | 77 | 27.7 | 4.4 | 1.6 | | 脆弱 |
| 〃 | 78 | 9.0 | 4.0 | 0.9 | | |
| 〃 | 79 | 15.7 | 3.1 | 2.3 | | 鉄釘付き |
| 〃 | 80 | 12.5 | 1.8 | 1.5 | | |
| 〃 | 81 | 13.0 | 3.0 | 0.9 | | |
| 〃 | 82 | 25.0 | 2.3 | 1.2 | | |
| 〃 | 84 | 28.0 | 径2.4~2.8 | | | 棒状、二股 |
| 〃 | 85 | 8.4 | 7.3 | 4.7 | | 断面六角形内に径2.5cmの穴 |
| 〃 | 89 | 23.0 | 5.7 | 0.5 | | 両端から7cmに各々径1cmの丸穴 |
| 〃 | 90 | 40.0 | 5.8 | 1.0 | | 木目に沿って割れ |
| 〃 | 91 | 64.8 | 5.2 | 2.4 | | 両端から3.5cmに各々2×1cmの長方形の穴 |
| 〃 | 92 | 18.0 | 4.0 | 0.6 | | |
| 〃 | 93 | 18.0 | 4.0 | 0.8 | | |
| 〃 | 94 | 137.0 | 6.9 | 4.4 | | 片端二段、断面カマボコ型、水槽内に保管 |
| 〃 | 95 | 40.4 | 7.0 | 0.1 | | シラカバの樹皮 |
| W24 | 〃 | 2 | 15.8 | 9.0 | 2.0 | 脆弱 全体に焦げ跡 |
| 〃 | 3 | 18.5 | 6.0 | 0.8 | | 樹皮 半折 脆弱 |
| 〃 | 4 | 22.0 | 4.2 | 0.7 | | |
| 〃 | 5 | 34.2 | 7.2 | 4.0 | | 全体に焦げ跡 |

| Grid | 層 | No. | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|------|----|-----|------------|-----------|-------|--------------------------|
| W24 | II | 6 | 41.0 | 径 1.8~2.5 | | 棒状、半折 |
| | | 7 | 15.2 | 6.0 | 1.7 | 板状、中央に段差 |
| | | 8 | 61.6 | 2.7 | 1.8 | 棒状 |
| | | 9 | 18.5 | 2.0 | 1.0 | |
| | | 11 | 15.2 | 3.7 | 1.0 | |
| | | 12 | 12.0 | 5.4 | 2.0 | |
| | | 13 | 54.2 | 2.4 | 0.8 | |
| | | 14 | 18.2 | 2.3 | 1.7 | |
| | | 15 | 31.8 | 2.8 | 1.1 | |
| | | 16 | 22.5 | 径 2.5 | | 棒状 |
| | | 17 | 21.0 | 11.0 | 1.5 | |
| | | 18 | 32.8 | 25.0 | 0.9 | 板状、八角形、全体に歪み |
| | | 19 | 26.8 | 1.9 | 1.2 | |
| | | 20 | 13.7 | 3.5 | 1.0 | |
| | | 21 | 18.0 | 3.4 | 1.0 | |
| | | 22 | 25.0 | 3.4 | 0.5 | 脆弱 |
| | | 23 | 24.2 | 2.8 | 1.1 | |
| | | 24 | 18.0 | 3.6 | 1.0 | |
| | | 25 | 37.2 | 径 1.7~2.7 | | 棒状 |
| | | 26 | 27.6 | 6.0 | 2.9 | |
| | | 27 | 26.5 | 3.5 | 0.9 | |
| | | 28 | 23.4 | 3.3 | 1.3 | |
| | | 29 | 30.8 | 7.5 | 1.0 | 片端から7cmで段差 |
| | | 30 | 7.1 | 径 2.4~3.8 | | 樹の栓？ |
| | | 31 | 19.5 | 7.0 | 0.8 | 1ヶ所折、脆弱 |
| | | 32 | 6.0 | 5.9 | 0.3 | 表裏に彫刻紋様 |
| | | 33 | 28.0 | 7.3 | 1.7 | 半円フタ状 |
| X22 | II | 3 | 39.3 | 15.4 | 1.1 | 板状、1ヶ所折、中央に焼印 |
| | | 4 | 30.2 | 17.7 | 2.6 | 板状、側面に段差、一部割れ |
| | | 6 | 32.6 | 7.4 | 1.7 | フタ？、側面に釘穴×2、1ヶ所折 |
| | | 8 | 13.9 | 径 2.3~3.9 | | 包丁？の柄、断面中心部に金具、彫字 |
| | | 9 | 32.1 | 5.5 | 1.9 | フタ？、側面に釘穴×2、No.22と接合？ |
| | | 11 | 81.5 | 径 2.5~4.0 | | |
| | | 13 | 107.4 | 9.0 | 2.7 | |
| | | 14 | 93.0 | 径 8.0 | | 脆弱、枝状の突起 |
| | | 15 | 97.2 | 径10.0 | | 両端から26cm内に各々 5~6cm幅の割み×2 |
| | | 17 | 41.1 | 5.6 | 1.0 | |
| | | 19 | 38.7 | 13.0 | 1.6 | フタ？、側面に釘穴×1、欠損 |
| | | 20 | 外径9.0内径2.6 | 2.1 | | ドーナツ型 |
| | | 21 | 24.0 | 4.6 | 1.0 | |
| | | 22 | 29.3 | 9.0 | 2.0 | 半円フタ状、側面に釘穴×2、No.9と接合？ |
| | | 23 | 16.0 | 15.5 | 2.6 | 板状 |
| X23 | II | 1 | 13.0 | 4.0 | 0.9 | |
| | | 2 | 33.5 | 15.0 | 2.2 | 半円フタ状、側面に釘穴×2 |

f 入舟遺跡・大川遺跡出土の泥メンコと鋳型

宮 宏明（日本どろめんこの会々員）

はじめに

1995年11月上旬、今年度の入舟遺跡の発掘調査終了間際に同遺跡のY 20Grid（図2参照）Ⅱ層の低湿地部分から泥メンコの鋳型（下図-1）1点が出土した。これまでに発掘調査によって石製鋳型が出土した事例を筆者管見の限り全く聞いたことはなかった。そもそも石製鋳型自体が現存していないようである。19世紀に余市で泥メンコを製作し、使用したという事実、この何とも、ほのぼのとした愛らしい「北の泥メンコ」について紹介し、若干の考察を加えたい。

入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型

図24-1は、スレート質の泥メンコの鋳型である。左が鶴、右が右三つ巴の型であろう。左の型の直径が18mm、右の型の直径が17mmで、巴の型の方が若干小さい。左右両型の下部に植物とみられる刻画があるが、これも上の型を彫り上げた際に刻画されたものであろう。全体の配置からしても、そのように理解するのが妥当である。これら上下左右4つの刻画周囲の細かな釘描き様のもの及び裏面のものは、後に描かれたものようである。前の4つの刻画が、これらを切って彫られていないことでも理解できる。次に泥メンコとして図示した図24-2～10について説明する。2は亀をモチーフにしているようでもあるが断定できない。大川遺跡（図25）出土の30も亀をモチーフとしているが異なるものである。3は変わり捻じ梅である。大川遺跡の梅（39・40）とは、いわば「同范メンコ」であり、両遺跡の時代や性格を特定するにあたって、同じ鋳型による泥メンコが出土した意義は特筆されてよい。4は七宝をモチーフとしている家紋とみられる。大川遺跡（41・42）から同范メンコが2点出土している。5は雀をモチーフとしているようであり

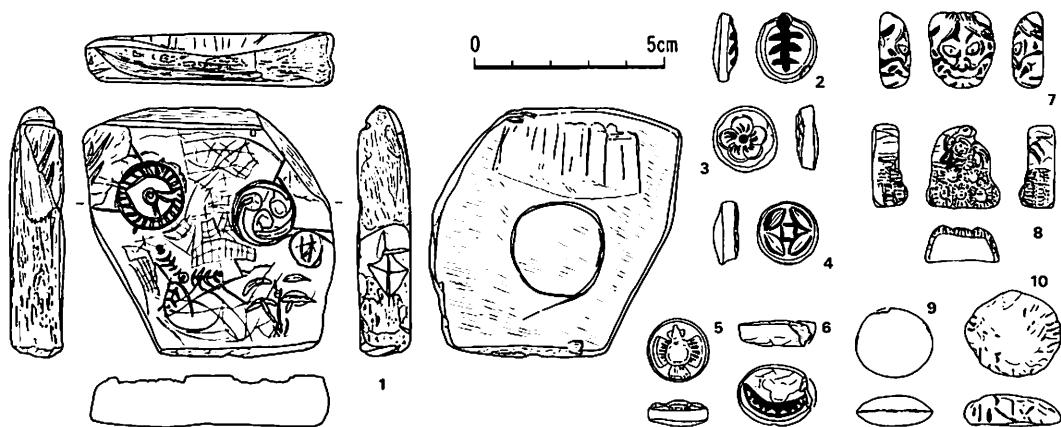


図24 入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型（全点遺構外出土）

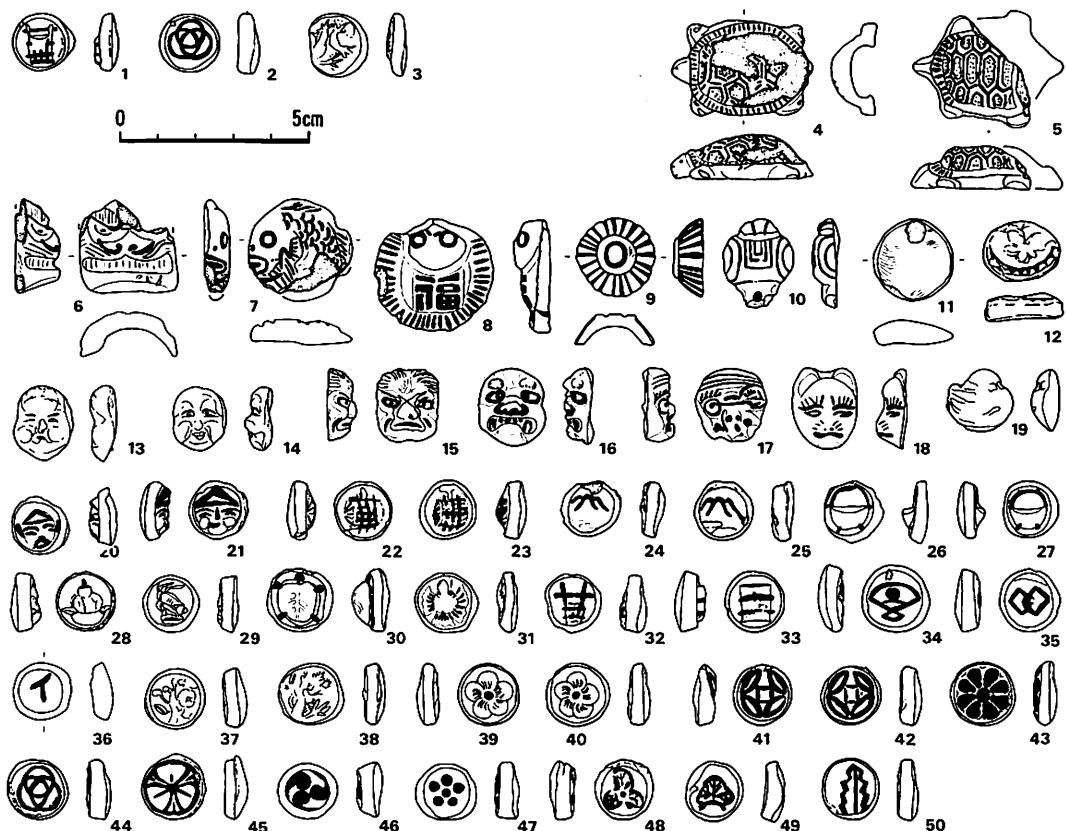


図25 大川遺跡出土の泥メンコ（1～3 SM-17, 4～50 造構外出土）

大川遺跡（31）からも1点出土していて非常に似ているが、これは同范ではないようである。6は橢円形のアワビとみられる。大川遺跡（12）からも1点同范メンコが出土している。7は鬼、8は大黒様のようである。非常に精巧に仕上げられている泥メンコである。9は無文で碁石様、10は大川遺跡（7）の鯛と同様な泥メンコが磨滅したものである可能性がある。入舟遺跡については、1997年度にも隣接区を発掘調査する予定であり、泥メンコや鋳型の資料が増加することを期待したい。

大川遺跡出土の泥メンコ

図25-1～3は大川遺跡SM-17出土のものであり、この貝塚は明治時代に残されたものとみられる。1は手桶であろう。32も手桶のようであるが異なる鋳型のものようである。2は三つ輪違いで44とはこれも同范である。3については植物かと思われるが、不明である。37・38とも若干類似するが、これらも植物であろう。磨滅が進んでいることや、そもそも凸凹が少ない泥メンコであるため判断が難しい。4・5は亀で、細部に亘って非常に良くできている。6は獅子頭、7は鯛、8は福良雀、9は茶碗様の玩具かとみられ、泥メンコには含めない方がよいのかもしれない。10は打ち出の小槌、11は碁石様で無文、12は前述のとおりアワビかとみられる。13・14は、おたふく、15・16は鬼（？）、17はひょっとこ、18は狐、19は鳩かとみられる。20・21は恵比

須様とみられるが、全く異なる鋳型によるものである。22・23は同範の俵である。24・25は同範の富士山、26・27は同範の鉄鍋、28は天神様（？）、29は生き物には違いないが不明である。猿の可能性もある。30は亀、31は雀、32は手桶、33は樽、34は日の丸扇、35は違い角、36は「イ」の字、37～42（前述）、43は八つ菊、45は剣片喰、46は左三つ巴である。非常に残念なことに、入舟遺跡出土の鋳型は右三つ巴であり、大きさは対応するものの全く反対の三つ巴である。47は星梅鉢、48は三つ柏、49は光琳松、50は御幣のようである。裏がコンケイブしているもの、即ち大川遺跡の4・5・6・9は狭義には泥メンコと分類しない方が適切かもしれないが、ここでは一応含めておいた。鋳型と泥メンコのセットでの紹介を残念ながらなしえなかつたが、石製鋳型の国内における類例はこれまでのところ皆無のようである。入舟遺跡と大川遺跡から出土した円形の泥メンコの径は、15～17mmであり、焼成による収縮を考慮すれば焼成前は17～20mm前後であったとみられる。入舟遺跡出土の鋳型の三つ巴の径は17mmであり、大川遺跡出土の47の三つ巴の径は15mm程である。一方、関東地方等で近年多数出土している、いわゆる江戸遺跡の円形の泥メンコのレギュラーサイズは概ね20～25mm、大きなものでも30mm前後のものが多い。

総じていうならば、「北の泥メンコ」は、小振りのものが多い。しかし、相撲や歌舞伎といった華やかさはないものの、種類等については決して引けをとらない。欠けたり、壊れたりといったものが少ないとこから、収集することが主目的であったようにも考えられる。

※ 家紋については、古沢恒敏編『正しい家紋帖』金園社を参考にした。



写真33 入舟遺跡出土の泥メンコ（右）と鋳型（左）

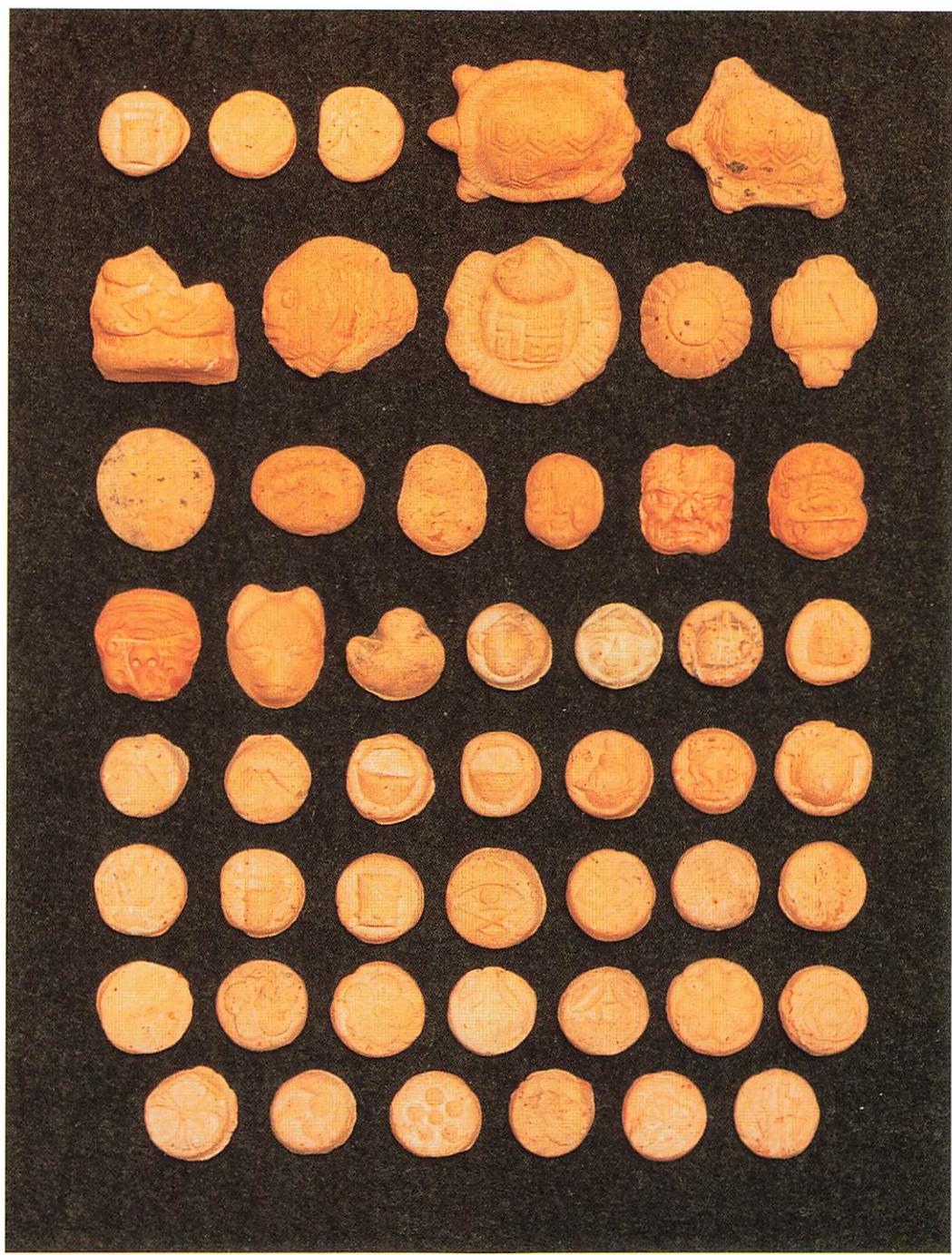


写真34 大川遺跡出土の泥メンコ

IV 結語

a 小括

入舟遺跡の1995年度の発掘調査によって検出された遺構及び出土遺物についての概略は前述のとおりである。本稿では主要遺構・遺物について、入舟遺跡の今後の調査の推移をも含めて概述し、小括としたい。今年度検出された遺構の内訳は4頁のとおりである。墓壙の検出は1基のみであるが、中世鏡（Ⅲa参照）を伴い、人骨も若干残存（写真16-1, 2）していた。HS-1は縄文後期と考えられる石組炉（写真1-5, 6）であるが、時期等については明確ではないため、C¹⁴年代測定等も参考にして本報告の際には再度検討したい。土壙（UP-1~8）についての時期も、遺物が皆無である等の理由から不明確なものがある。貝塚（SM-1~4）及び石矢来の時期は近世後半とみられるが、概ね19世紀前葉～中葉と考えている。貝塚と石矢来との先後関係については、現場での観察でも前後しており、ほとんど同時期と考えてよい。貝塚、特にSM-2から多くの骨角器・金属製品等（写真3・4）が出土した。現在鋭意、保存処理作業や実測作業を進めており、本報告でまとめたい。盛土層（表1参照）から2,000点強の遺物が出土している。盛土を構成する土質を観察すれば、近隣からの土が運び込まれ、盛られたとは考えにくい。盛土がなされたのは昭和7年前後と昭和37年前後の2度かと類推されるが、どの遺跡から運び込まれた土なのか不明である。おそらく余市町内の台地を構成する土かと思われる。盛土層中からは縄文後期～昭和までの遺物が含まれていた。I層からは63,000点強の遺物が出土している。前述したところであるが、主体は近世後半における整地の際の搅乱層かと考えられる。II層からは4,700点強の遺物が出土している。II層は入舟遺跡の発掘調査区東側部分でのみ観察されている。本来II層であった大部分が近世前後に搅拌されI層化したものとみられる。III層からは174点の遺物が出土した。発掘区全面を更に掘り下げるにより遺物は増加したとみられるが、大きく集計表を変更するようなことはならないだろう。また、III層出土遺物のほとんどが磨滅しており、水により洗われたことが明確である。入舟遺跡から出土した縄文後期の遺物のうち、特筆すべきは、や



写真35 手形付土版 (T37Grid出土)



写真36 ベンガラ付着の石皿 (T36Grid出土)

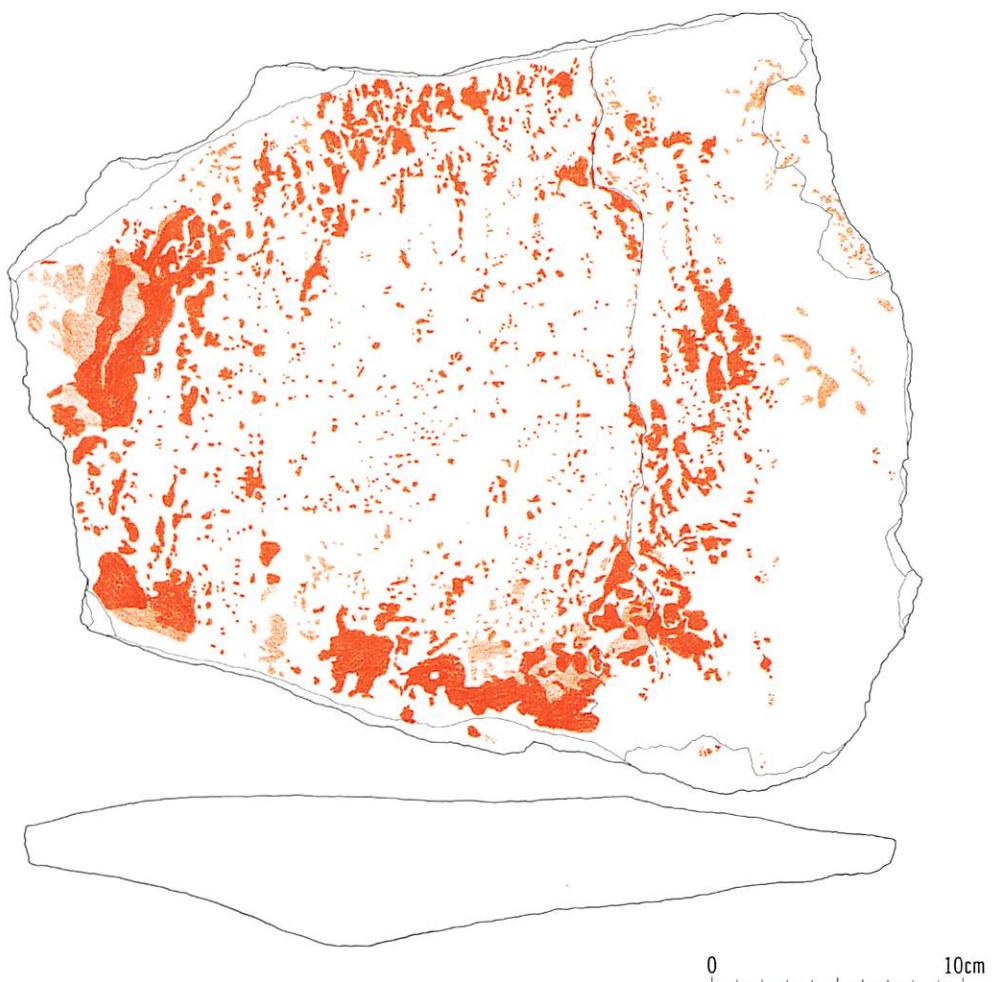


図26 入舟遺跡出土の石皿（ベンガラ粉碎具）

はり手形付土版・足形付土版（III c 参照）であろう。手形付土版（写真29）は日本最大でかつ初の左右セットでの出土となった。両土版が出土した地点は前述したように完掘されておらず、次回の調査の際に残りの部分の破片や、更なる当該土版の出土も期待されるところである。続縄文期では魚形石器が4点、中世・近世の和鏡については2点出土、それぞれ玉稿を頂いた。

入舟遺跡に関しては調査担当者としての誤算があった。1994年度に実施された道教委によるB調査は主に海側部分について実施されたものであったための誤算である。当初計画では入舟遺跡については、本報告を単年度ごとに発行する予定であったが、概報とならざるをえなかった。予想以上の遺物に加え、深くて完掘できない部分もあったためである。

1996年度の調査予算がこれまでの1/3程度に圧縮されてしまったこともあります、当該年度は発掘調査をとりやめ、遺物整理作業のみに専念する予定である。
(宮)

b あとがき 一入舟遺跡を掘る一

1995年度は、余市川を挟んで大川遺跡と向き合っている入舟遺跡の発掘調査を始めた。

現在の私達の生活の中では、大きな川は県や町村の境界とされることが多く、江戸時代の余市でも運上家が川の両側にあって、それぞれ一方は忍路まで他方は古平までを取り扱っていた。ここでも川を境界としていたことが知られる。しかし川を交通路とし、川筋を生活圏として暮らしてきた人々は、アイヌ文化の「イオル」のように川ではなく山や峠を境界線とするのが一般的であった。このことから縄文時代や続縄文時代の遺跡を現代人の観念で分割してしまっているかも知れないと考え、調査に先立ってこのことが気にかかっていた。

今シーズンは5月半ばから11月始めまで発掘を行い、その結果からは上述のことが杞憂であったように思われた。縄文時代後期の人口を引く遺物の発見と、近世以後の遺構の発見が中心だったからである。しかし、もともとこの地域の確認調査が行われたときは、続縄文期の遺物の発見がほとんどだったので、大川遺跡と一体化するものの存在が充分に予想される。

調査区域は昭和39年に完成した大川橋の川下、約2,200m²で、再度に亘る橋の架け替えのため2次堆積、3次堆積の行われた部分であった。それにもかかわらず、おそらくは山側から押し出されたと思われる暗褐色の土層から発見された遺物には、見るべきものが多くあった。最も話題を喚んだ、縄文後期の対になる手形・足形付土版は、石器時代の通過儀礼を考えさせるものとして意味をもつていて。調査された縄文時代の膨大な遺跡のなかで、発見が未だ十数例という少なさは通過儀礼の在り方が特殊だったのではなく、焼成されたものが少なかったと見るべきだろうか。

もう一つ特筆すべきは、近世の遺構と考えられる木製の柱の根元が一列に並んで残り、穴を開けた和鏡、一連のガラス玉、生産地不明の金属板などが発見されたことであった。1800年代半ばに描かれた当地点の建物と比較すると興味深く、今後発掘調査の進展により住居と高床の建物(倉庫)とが判明することを期待している。河口の近くでは発掘区の深さが1m位のところもあったが、橋脚の部分では4mに達する深さがあり、斜面で足場も悪く、その上堅く突き固めた礫の埋め土があって、エネルギーの要る調査であった。発掘期間中、風雨の日も少なくなかった。これらの難關にもかかわらず予定通り11月7日に終了したのは、発掘作業に対する興味と骨身を惜しまぬ努力、そして調査担当者のオーガナイザーとしての能力によると考える。

春に、荒川暢雄調査補助員が礼文町教育委員会に職員として県立っていったのに続き、青木 誠調査補助員が小樽市教育委員会の職員として赴任した。このプロジェクトが始まってから、6人の有能な若者を地方公務員あるいは財團法人職員として送り出したことについて関係者と共に喜びたい。余市町教育委員会の中にも移動があった。私達の申し出をソフトに受けとめて下さった高橋水産博物館館長が栄転され、代わって8年前に調査を実施した沢町遺跡の際には社会教育係長であり、文化財行政に経験のある佐々木功治館長が来られた。今まで同様よろしくお願ひしたいと思う。

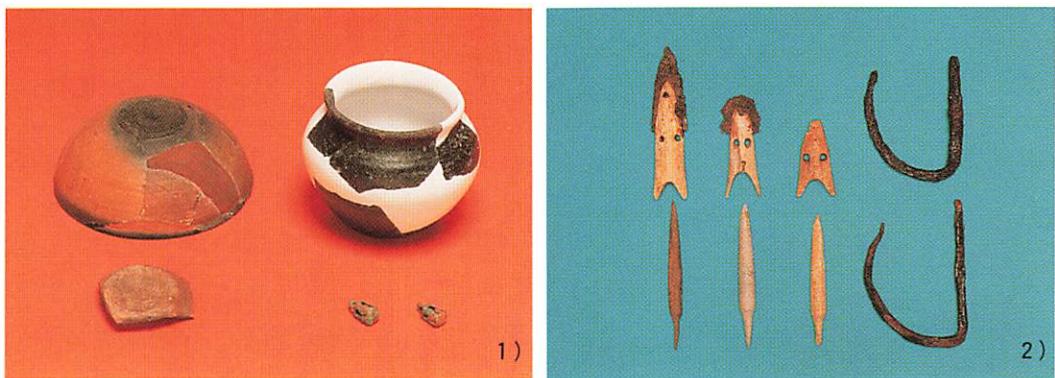


写真37 文化庁主催「新発見考古速報展'96」貸出資料(左 古代の土器と鈴、右 近世のマレク・キテ・中柄)

—大川遺跡 その後—

大川遺跡6年の成果については、引き続き整理作業に追われている。ベテラン整理作業員により、遺物が正確に組み立てられ図化され、分類されているが、資料があまりにも多いため氷山の一画が崩されたに過ぎない。それでも細かい変化や思わぬ発見が知られるのは楽しい。

一方、大川遺跡の出土遺物は本年も注目を浴びている、政令指定都市で行われている「まなびピア」が1995年度は札幌市で行われ、9月に大川遺跡の遺物の出品が要請されて、中世から近世初頭とみられるガラス玉（トンボ玉を含む）やコハク平玉2,000点等の一括資料を展示した。また、この「まなびピア」すなわち第7回全国生涯学習フェスティバルの一環として、9月30日に文部省肝入りの第10回「大学と科学」公開シンポジウム、〈北方文化と日本列島〉が行われ、先史の交渉のセクションで、流通の拠点—余市大川—と題して岡田淳子が代表して発表し、余市大川遺跡の注目すべき内容を各界に広めた。

国立歴史民俗博物館に大刀・太刀を14点貸し出したが、北海道の鉄製出土品としては一箇所でまとまっており、また保存の良さでも他を凌いでいるとの裏付けと言えよう。毎年、道内の発掘調査出土品のなかで注目すべきものを道庁本館1階のロビーに展示し、道民に知らせる北海道教育庁主催の「ロビー展」があるが、本年はこれにも依頼され、大川遺跡の出土品—土鈴・動物頭部形土製品・青銅製耳飾り—、入舟遺跡の出土品—手形付土版・足形付土版—、フゴッペ洞窟岩壁彫刻パネルと手形付土版出土状況パネルなど、合計15点とパネル3枚が貸し出され、1996年2月19日～23日まで展示された。さらに、文化庁が主催している「縄文まほろば展」（1996年7月25日～11月24日、東京→大阪→仙台→青森）に大川遺跡出土の縄文晩期の土鈴が、また、文化庁が昨年から始めた「新発見考古速報展'96」に大川遺跡の一括出土品が選ばれ、古代大陸との交流等を示す遺物5点と、江戸時代アイヌ民族の漁労具8点とが出品される。この展示会は1996年6月17日から7月14日までの4週間、東京国立博物館で行われ、その後、宮城・群馬・高知・広島・大分・滋賀・山梨各地の県立博物館で巡回展示される。思わずここで余市大川遺跡の遺物と出会えるかもしれない。

(岡田)

報告書抄録

| | |
|-------|--|
| 書名 | 1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報 |
| 副題 | —余市川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅶ— |
| 編著者名 | 岡田淳子・高瀬克範・小川康和・大谷 謙・葉科哲男・東村武信 赤沼英男・咲山まさか・小笠原正明・前川靖明・青木 豊・米谷登志子 斎藤麻紀・宮 宏明 |
| 発行機関 | 余市町教育委員会 |
| 所在地 | 余市町朝日町26番地 |
| 発行年月日 | 1996年3月25日 |

| 遺跡名 | 所在地 | コード | | 緯度 | 経度 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|------|-----|-----|------|--------|---------|------------------------------|---------------------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 入舟遺跡 | 余市町 | D19 | 53 | 43°12' | 140°48' | 1995年 5月16日 ～ 11月7日 | 2.213m ² | 河川改修 |

| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|------|-------|---|--|--|---|
| 入舟遺跡 | 遺物包含層 | 縄文後期 縄文晩期 統縄文期 擦文期 中世 近世 近代 | 墓 墓 土 墓 礎 石 石 組 石 組 石 組 石 矢 石 溝 貝 燥 燒 土 | 縄文土器 繞縄文土器 須恵器 土師器 擦文式土器 石器 石製品 鉄製品 | 手形付土版(左右2点) 足形付土版(左右2点) 土偶(1点) 魚形石器(4点) ガラス玉(多数) 中世鏡(2点) 碧玉製管玉(1点) 泥メンコ(10点) |

1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要VII—

発 行 余市町教育委員会

北海道余市町朝日町26番地

発行日 1996年3月

商工社 久留宮印刷

北海道余市町大川町4丁目98番地
